

983-cT93r-Y



*00258275 *

新潮文庫

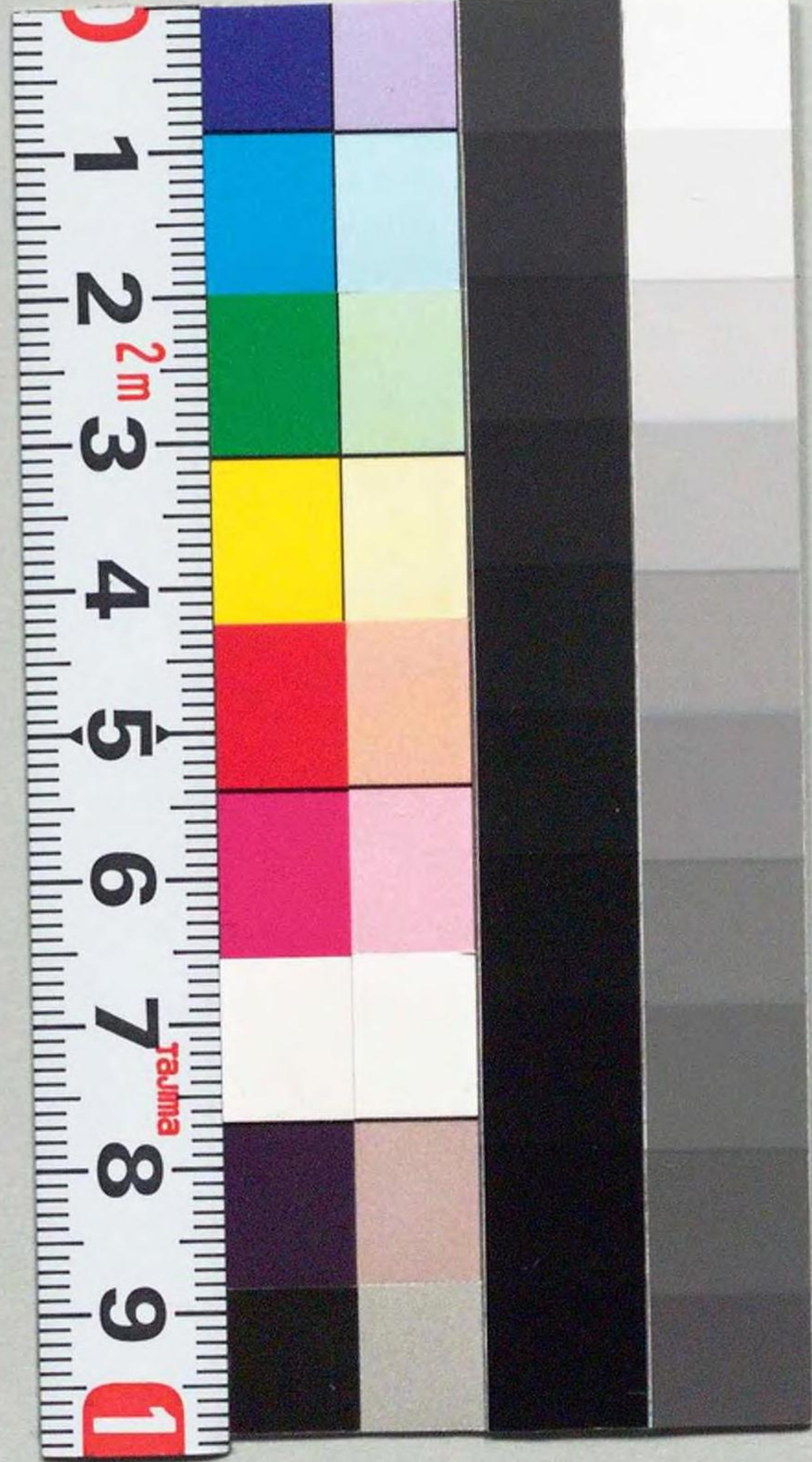
獵人日記

下卷

ツルゲーネフ
米川正夫 譯



新潮社



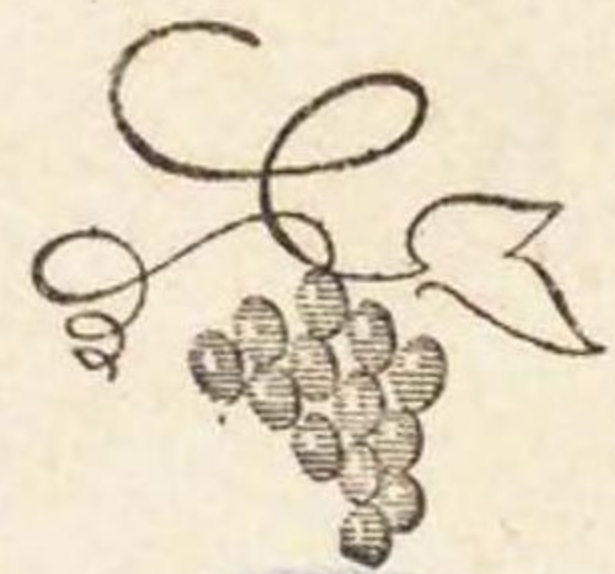
新潮文庫

獵人日記

下卷

ツルゲーネフ

米川正夫譯



新潮社版

276

983.c 1934Y

目次

レ	ベ	ヂ	ヤ	ン	七
タ	チ	ヤ	ー	ナ	・	ボ
リ	ー	ソ	ヴ	ナ	と	そ
の	甥	六
死	五
歌	う	た	ひ	四
ピ	ョ	ー	ト	ル	・	ペ
ト	ロ	ー	ギ	ツ	チ	・
カ	ラ	タ	ー	エ	フ
.....	三
あ	ひ	び	き	二
シ	チ	グ	ロ	フ	郡	の
ハ	ム	レ	ッ	ト
.....	一



258275



記 下卷

チエルトフハーノフとネドピユースキン……………二七一

チエルトフハーノフの最後……………一九九

生きた御遺骸……………二五三

音がする！……………二七七

森と曠野……………三〇一

解題……………三二一

わが親愛なる讀者諸君、獵といふものの主な利益の一つは、人を絶えずあちこち歩き廻らせることで、これが閑人にとつては至つて愉快なものである。尤も、時によると（殊に雨の多い季節などは）田舎道を彷徨ひ歩いたり、道のない所を横切つたり、行き當たりばつたりの百姓を引止めて、『おい、君！モルドフカへはどう行つたらいいだらう？』と訊ねたり、それからやつとモルドフカへ着いたかと思ふと、鈍な百姓女に（働き手はみんな野良へ出てゐるので）街道筋の旅籠屋まではまだ遠いか、そこへ行くにはどう道をとつたらいいかななどと、散々に苦心して訊ね出した揚句、もの十露里も馬を追つて行つてみると、旅籠屋の代はりに、荒れ果てたフドブノフの小村へ出て、通りの真ん中に溜まつてゐるどす黒い茶色の泥水に耳まで浸つて、闖入者がやつて來ようなどとは思ひも設けなかつた豚の群を吃驚仰天させたりする。こんなのは餘り愉快な話ではない。それから又、膽をひやくさせるやうな橋を渡つて、谷へ下りて行き、泥つぽい小川の淺瀬を涉つて行くのも、大して面白いものではない。馬車に乗つて、まる一晝夜も青草の海にかこまれたやうな街道をゆられて行つたり、こんな目に逢つてはやり切れないが、片面には『十二』片面には『二十三』と書いた染分けの里程表の前に、何時間も何時間も泥まみれになつて立ち往生したりするものも、これまた愉快な事ではない。何週間もぶつ續けに、卵と牛乳と評判倒れの黒麵麩だけで生命を繋ぐのも楽しいものではない……しかし、かうした不自由や失敗も別種の利益と満足で帳消しになるのである。それにしても肝心の話に移らう。

これだけの事を申し上げたら、どうして私が五年前に、レベチャンの馬市の混雑の眞つ只中に行き合はせたか、くだしく讀者に説明する必要はなからうと思ふ。私たち銃獵家仲間、天氣のいゝ朝を選んで、大なり小なり先祖傳來の持ち村を後に、翌日の晩には歸つて來るつもりで出かけるのだが、ひつきりなしに鶴などを撃ち續けてゐる中に、だん／＼足が延びて行つて、終ひには天恵に満ちたペチョーラ川の岸あたりまで出てしまふ。それに鐵砲や犬の好きな人は、必ずこの世で最も上品な動物とされてゐる馬を、心底から愛して止まぬものである。かういふわけで、私はレベチャンへ辿り着くと宿をとつて、着物を着替へ、市へ出かけて行つた。(年頃二十歳ばかりの瘦せたひよろ長い給仕が、甘つたるい鼻にかゝつた中音で、いち早く注進したところによると、**聯隊の馬匹補充官をしてゐるN公爵閣下が、この宿屋に泊まつてゐられるし、その他にも大勢立派な旦那方が見えてゐるので、毎晩ジプシイが唄を歌ひ、劇場では『波蘭貴族トルドーフスキ』がかゝつてゐるし、馬の相場も出てゐる——それに中々いゝ馬が集まつてゐるとの事であつた。)

市の廣場には幾つにも列を作つた馬車が際限なく續いて、車の傍にはありとあらゆる種類の馬がある。競走馬、種馬、挽馬、荷馬、馬車馬、たゞの百姓馬。中には肥えて艶々した馬が毛色で組に分けられ、色とり／＼の馬衣に身を飾り、動かないやうに綱を短くして高い横木に縛りつけられたまゝ、持ち主の伯樂が手に握つてゐる餘りにもお馴染みの深い鞭をおづ／＼と尻目にかけてゐる。百露里も、二百露里も先きから曠野の貴族が送つて來た馬は、よほ／＼の馭者か、さもなれば二三人の頑丈な馬丁に見張られながら、長い頸を振つたり、足踏みをしたり、退屈まぎれに柵を齧つたりしてゐる。葦毛のヴァトカ馬はお互ひに、ぴつたり身體をつけ合つてゐる。尾が

がふさ／＼して、足に朶毛の生えた、尻のどつしりと大きい、石垣や烏毛や栗毛などの駿馬は、さながら獅子のやうに、堂々と不動の姿勢を保つてゐる。この道の通人たちはその前に來て、尊敬の眼を睜りながら立ち止まる。車の列で自づと出來た通りには、身分、年齢、風采のそれ／＼違つた人たちが群れをなしてゐた。青い長上衣をきて高い帽子を被つた伯樂は、悪狡すさうに眼をきよろ／＼として買手を待ち設けてゐるし、出眼で縮れ毛のジプシイどもは、狂人のやうにあちこち駈け廻りながら、馬の齒を調べてみたり、足や尻尾を持ち上げたり、喚いたり、悪口を吐いたり、仲人に立つたり、籤を引いたり、或ひは軍帽を被つて海狸の襟付きの外套を着た馬匹補充官につき纏つたりしてゐる。頑丈さうなコサックが、鹿のやうな頸をした瘦せた去勢馬に乗つて、その馬を『まるごと』つまり鞍も馬勒もつけたまゝで賣らうとしてゐた。腋の下の破れた毛皮外套の百姓たちは、死物狂ひに人混みの中を押し分けたり『力試し』のために馬を車につけて、その上に何十人も塊まつて乗り込んだり、又さうかと思へば、どこか脇の方で抜け目のなさを相なぢプシイを間に立てて、お互ひにへと／＼になるまで押し問答を續け、双方自分の云ひ値を通さうとしながら、百遍も續けさまに手ばかり叩き合つてゐる。ところが、その問答の的になつてゐるやくざ馬は、でこぼこした筵を着せられて、まるで自分に關係した事ではないやうに、眼ばかりぱち／＼させてゐる……また實際、誰が引つぱたかうと、馬にとつては同じ事なのである！ 鬘を染めて、威嚴に満ちた様子を作り、波蘭風の三角帽子を被つて、呉侶の外套を片袖だけ通した額の廣い地主たちは、柔かい帽子を被つて緑色の手袋をはめた太鼓腹の商人に、腹の中はとにかく、表面だけは氣安さうに話しかけた。色々の聯隊の將校たちも、その邊で人波を押し分けてゐる。獨逸生まれのひよろ長い鐵騎兵が跛の伯樂に澄まし返つた調子で『この栗毛の馬の

代いくら？」と訊いてゐるかと思へば、やつと十九くらゐの白つばい髪の手をした輕騎兵が、瘦せた跑足馬に組み合はせる脇馬を物色してゐる。孔雀の羽を捲いた低い帽子を被り、茶色の外套を着込み、細い緑色の帯に革の指無手袋を差し込んだ驛遞駈者は、しきりに中馬を捜してゐた。駈者たちは自分の馬の尻尾を編んだり、鬣を濡らしたりして、主人に恭々しく口添へをしてゐる。取引きを済ました連中は、めい／＼身分に應じて、料理屋とか居酒屋とかへ、あたふたと行つてしまふ……かうして誰も彼も膝の邊まで泥につかりながら、ごつた返したり、喚いたり、蠢めいたり、爭論したり、また仲直りしたり、悪口をいつたり、笑つたりするのであつた。私は四輪馬車につける具合の好きさうな三頭立てを買はうと思つた。いま持つてゐる馬が役に立たなくなつたのである。二頭だけは見つかつたが、あと一頭は似つかはしいのがなかつた。今さら書き立てる氣にもならぬやうな酷い食事を済ました後（もう濟んでしまつた悲しみを思ひ起こすのが快からぬものなのは、既にイネアスの知つてゐたところである）、私はこゝでカフェーと云はれてゐる所へ足を向けた。こゝには軍馬補充部の將校や、育馬場の持ち主や、そのほか方々から入り込んだ客が、毎晩のやうに集まるのであつた。鉛色の波かとはばかり烟草の煙の濛々としてゐる玉突き部屋には二十人ばかりの人がゐた。そこには匈牙利風の上衣を着て、鼠色のズボンを選び、みあげを長くして髭には油をこて／＼つけ、品よく大膽にあたりを見廻してゐる若い磊落な地主たちもゐた。コサック風の上衣を着た、恐ろしく頸の短い、小さな脹れぼつたい目をした別の貴族仲間も、すぐそこで苦しきやうに鼻をすう／＼云はせてゐる。小商人たちは側の方で、所謂『隙のない恰好で』坐つてゐるし、將校連は互ひに遠慮なく話し合つてゐる。玉突き勝負をしてゐたのは、N公爵といふ二十二三の青年で、快活な幾らか人を小馬鹿にしたやうな顔をして、上衣

の前を擴げて赤い絹の襪衣を見せ、だぶ／＼した天鷲絨のズボンを穿いてゐる。相手は退職中尉のギクトル・フロバコフであつた。

退職中尉のギクトル・フロバコフは、小柄な、色の淺黒い、疎らな黒い髪に蒼色の眼をした、團子鼻を天井に向けてゐる、瘦せた三十前後の男で、選挙場とか定期市とかに大抵いつも顔を見せてゐる。跳び上がるやうな歩きつぶりをして、圓つこい感じのする両手をいと勇敢に振り廻し、帽子はいつも阿彌陀に被り、鳩羽色の寒冷紗の裏のついた軍服の袖を折り返してゐる。フロバコフ氏はペテルブルグ邊りから來る金持の道樂者に取り入る腕を持つてゐた。一緒に煙草をふかしたり、酒を飲んだり、歌留多をやつたりして「君、僕」で話をするのである。どうして彼らがこの男を引き立ててやるのか——かなり腑に落ちかねる次第である。頭がい／＼といふ譯でもなければ、剽輕とさへ云はれないから、道化のお役にも立たない。尤も、みんなはこの男を、お人好しだけれど頭のない奴さん位に思つて、隔てのない、ざつ／＼ばらん氣持ちで扱つてゐる。二三週間は友達づき合ひもするけれど、そのうち急にぱつたり挨拶しなくなつてしまふ。すると、こちらも同じく聲もかけなくなつてしまふのである。フロバコフ中尉の異色となつてゐるのは、一年でも二年でも、場所柄に合はうが合ふまいが、いつも同じ文句を遣ふことである。その文句といふのが、一向に面白くも何ともないのに、どうした譯かひとを笑はせる。八年許り前には一口毎に『謹しみ敬つて、ほ、御禮申し上げ奉る』と云つてゐたが、當時の最眞連はそのたびに笑ひ轉げて、またぞろ『謹しみ敬つて』を所望したものである。その次には、『いや、もう、それはあなたその、何て云ふか、かやうに成つたる成り行きで』といふ可成り込み入つた文句を遣ひ出して、これまた大喝采を博したものである。二年ほど経つて新らしい駄洒落を考へ出

した。「貴君、かん／＼、いけない、否、人は神の顔、着物は羊の皮」といつた風なものである。ところがどうだらう！ ご覽の通り、一向に智恵のない、このちよつとした文句が、彼に食ひ物から、飲み物から、着物まで授けてくれるのであつた。(自分の身代は疾の昔に叩き上げて、今ではたゞ友達の懐だけで生きてゐる。)念を押しておくが、これより外この男にはまるでお愛嬌になるものがないのである！ 尤も、一日にジュコフの煙草をパイプに百服もふかし、玉突きをやる時には右足を頭よりも高く上げて、狙ひをつけながら、こゝを先途とキウを捻くり廻すが——さてこんな藝當は皆がみな面白がつてはくれない。飲む方にかけてもいゝ腕を持つてゐるが……しかし、露西亞ではこの道で頭角を現はすことは至難の業である……一口に云へば、彼の成功は私にとつて全く謎なのである……まあ、たつた一つ取り得と云へば用心深い質で、内輪のあくぞもくぞを外へ持ち出さず、人の悪口をこれつから先きも云はないことであらう。

「さあ、」と私はフロパコフを見て考へた。「この先生の當節の十八番は何だらう？」

公爵は白球を突いた。

「三十の零。」薄暗い顔をして、眼の下に青い隈のある、肺病やみらしいゲーム取りが悲鳴を擧げるやうに云つた。

公爵はかちりとばかり、黄球を一番端のポケットへ入れた。

「いよう！」片隅で一本脚のぐら／＼するテーブルに向かつてゐた小肥りの商人が、腹いっぱいの嘆聲を發した。嘆聲を發しておいて、急に怖ぢ氣づいてしまつた。けれど仕合はせと、誰もそれに氣がつかなかつた。商人はほつとして、鬚を撫でた。

「三十七の零！」とゲーム取りは鼻聲でわめく。

「おい、どんなもんだい、君？」と公爵はフロパコフに聲をかけた。

「いやはや、まさに、ラ、ラ、ラ、ラカリオーオンだ。正真正銘のラ、ラ、ラ、ラカリオーオンだよ！」

公爵はぶつと噴き出した。

「え、え？ もう一度云つてみ給へ！」

「ラ、ラ、ラ、ラカリオーオン！」と退職中尉は得意げに繰り返した。

「は、あ、これだな、十八番は！」と私は考へた。

公爵は赤球をポケットへ入れた。

「やつ！ 違ひますよ、公爵、違ひますよ。」と出しぬけに、白っぽい髪をした、眼の血走つた、鼻の小さい、赤ん坊のやうな寝ぼけ顔の若い將校が、舌の廻り兼ねる調子で云ひ出した。「やり方が違ひますよ……本當は……さうぢやないんです！」

「ぢや、どうなんです？」と公爵は肩越しに訊ねた。

「本當はね……その……三つ球でやらなくちや。」

「さうかしらん？」と公爵は齒の間から呟いた。

「ときに、どうです、公爵、今晚ジプシイのところへ行つたら？」青年はどぎまぎしながら、慌てて押つ被せた。「スチョーシカが唄ひますよ……イリュエーシカも……」

公爵はそれに答へなかつた。

「ラ、ラ、ラ、ラカリオーオンだよ、君。」とフロパコフは狡さうに左の眼を細めながら云つた。すると、公爵はから／＼と高笑ひした。

「三十九の零。」とゲーム取が聲を張り上げる。

「零……まあ見てるが、今に我輩がこの赤球を……」

フロパコフはキウを捻くり廻しながら狙ひをつけて、まんまと失敗した。

「ちえ、ラ、ラカリオーオン！」と彼は忌々しきうに喚いた。

公爵は又もやからりと笑った。

「なに、なに、なんだつて？」

けれど、フロパコフは自分の十八番を繰り返さうとしなかつた。多少は手管を使はなければならぬので。

「當たり損ひでしたね。」と、ゲーム取りが云つた。「チヨークをおつけになりましたは……四十の零！」

「あ、諸君、」と公爵は一座の全部に向つて云ひ出したが、しかし、特別だれの方にも眼を向けなかつた。「どうだね、諸君、今夜芝居でエルジェムビーツカヤを舞臺へ呼び出さうぢやないか。」

「さうとも、さうとも、是非やらう。」公爵の言葉に答へる機會が現はれたので、呆れ返るほど有頂天になりながら、幾たりかの聲が先きを争つてかう呼んだ。「エルジェムビーツカヤを……」

「エルジェムビーツカヤは素晴らしい女優ですよ、ソプニャコーヴよりずっといいです。」と、隅つこの方から鬚を生やして眼鏡をかけた見すばらしい男が、黄色い聲で云つた。可哀さうに！この男は心ひそかにソプニャコーヴに深く思ひを懸けてゐたのである。けれど、公爵はこの男を見向きもしなかつた。

「おいボーイ、パイブだ！」と誰か一人、背の高い、顔つきの整つた、威風あたりを拂ふばかり

の紳士が、ネクタイに頸を埋めたまま云つた。——どこから見ても、いんちき骨牌師である。

給仕が煙管を取りに駆け出した。やがて歸つて來ると、驛遞馬車屋のバクラーガが御前にお目通りしたがつてゐると、公爵に言上した。

「あゝ！では、少し待つやうに云つてくれ。それからライトカを持つて行つてやるんだ。」

「畏まりました。」

あとで聞いたところによると、バクラーガといふのは、ひどく甘やかされて増長した若い美男子の馭者であつた。公爵はこれを鼻根にして、馬をやつたり、一緒に三頭立權を飛ばしたり、連日連夜興を共にしたりしたものである。……この當時の暴れ者で道樂者の公爵に、いま會つてみたら、まことに別人の感がある。……今では、香水をぶん／＼匂はせて、反り返つて、傲然としてゐること！職務に精勵なこと——第一、分別くさくなつたこと！

それはそれとして、私は烟草の煙で眼が痛くなつて來たので、最後にフロパコフの十八番と公爵の笑ひ聲をもう一度聞いて、自分の部屋へ引き上げた。そこでは反り返つた高い背つきの、馬毛織りの布を張つた、細い、彈條の利かなくなつた長椅子の上に、受持ちのボーイが床をのべてくれてゐた。

翌日、私は馬を見に小舎小舎を廻つて歩いた。まづ名の高いシートニコフといふ伯樂を手始めにした。木戸口を通つて、砂を撒いてある庭へ入つた。一杯に開け放した既の戸の前に當の主人が立つてゐた。もう若くない、背の高い肥つた男で、兎の毛裘を着て、立てた襟の端を折り返してゐる。私の姿を見ると、ゆつくりとこちらへ歩いて來て、兩手で帽子を頭上に捧げながら、歌ふやうな調子でかう云つた。

「あゝ、これはよろこそ。大方、馬を御覽なさいますのでせうな？」

「さうだ、馬を見に来たんだ。」

「それはどんな馬でございませうか、失禮でございませうか？」

「まあ、どんなのがあるか、一應見せて貰ひたいな。」

「よろしうございますとも。」

私たちは既に入つた。白い小犬が何匹か乾草の中から起き上がつて、尻尾を振りながら、私たちの方へ走つて来た。鬚の長い年とつた山羊が不満げに側の方へ寄つた。頑丈らしいが脂じみた毛裘を着た馬丁が二人、黙つて私たちにお辭儀をした。右にも左にも、ことさら高くした柵の中には、見事に手入れの届いた、つや／＼しい馬が三十頭ばかり並らんでゐた。鳩が横木から横木へ飛び移つて、くゝ／＼と鳴いてゐる。

「旦那は、つまり何に馬がお入用なので？ 馬車用でございませうか、それとも種の方に？」

「馬車用にも種の方にも。」

「なる、なる、なるほど。」と一々區切りながら伯樂は云つた。「ペーチャ、旦那様に黄、驄をお目にかける。」

私たちは庭へ出た。

「あの、なんでしたら家から床几でも持つて来させませうか？ …お入用ございませぬ？ …どうぞ御隨意に。」

板を踏む音が聞こえ、鞭がぴしりと鳴つたかと思ふと、あばたのある淺黒い顔をした四十男のペーチャが、灰色の可成り恰好のいゝ牡馬を曳いて、既から飛び出した。まづ後足で立たせて二

度ばかり庭のまはりを走つたのち、見頃の場所に手際よく引き据ゑた。黄、驄はぐつと身を伸ばし、勢ひよく鼻を鳴らし、尻尾を振り上げ、頭を一つ二つ動かして、私たちの方を流眊に見た。

『よく馴らしたものだ！』と私は思つた。

「放してやれ、放してやれ。」とシートニコフは云つて、私に目を据ゑた。

「いかゞ思召しますな！」たうとう彼は切り出した。

「中々いゝ馬だ——前足がちよつと危くないかな。」

「足は申し分ありませんよ！」とシートニコフは信ずるところありげに云ひ返した。「それにあの腰と來たら…まあ御覽くださいまし…まるで臥、煖爐そのけですよ、あの上でひと寝入り出来るくらゐで。」

「外、蹠が長い。」

「何が長いもんですか——飛んでもない！ 追つて見ろ、ペーチャ、追つて見ろ、跑で、跑で、

跑でな… 駈けさせるんぢやないぞ。」

ペーチャはまた黄、驄を曳いて庭のまはりを走つた。私たちはみんな暫らく黙つてゐた。

「ぢや、そいつを元の場所へ戻して、」とシートニコフは口を切つた。「鷹を曳いて來い。」

鷹は甲蟲のやうに眞つ黒い、腰の下がつた、瘦せ氣味の和蘭産の牡馬で、ゴルノスタイよりは幾らかましかつた。それはこの道の通人が『切つたり、刻んだり、生け捕つたりする』と稱する種類の馬であつた。といふのは、走りながら前足を左右に振り立てて、前へは餘り進まないことなのである。中年の商人たちはかういふ馬を所望する。その走り方はいなせな安料理屋の給仕の氣取つた足どりを想ひ起こさせる。こんなのは食後の散歩などに一頭立てで曳かせると好い。

下品なけば、しい馬車に、氣の遠くなるほど鱧腹くつた馭者や、胸焼けに惱んでへし潰されたやうな恰好をした商人や、碧い婦人外套を着て、薄紫の布を頭に巻いた彫弱さうなその細君が乗り込んでみると、この種の馬は胸を張りながら、氣取つた足どりで一生懸命に曳くものである。私は鷹をも斷つた。シートニコフはなほ數頭の馬を見せてくれた。唯一つゾイエコフ種の牡の石垣馬が、やつと私の氣に入つた。私はつい我慢しきれなくなつて、満足さうな様子で額毛を撫でてやつた。シートニコフはすぐ氣のなささうな顔を取り繕つた。

「どうだね、乗り具合はいかぬ？」と私は訊ねた。(跑馬のことになると、走るといふ言葉を遣はない。)

「よろしうがす。」と伯樂は落ちつき拂つて答へた。

「試してみる譯に行かないかしらん？」

「なに、よろしうがすとも。おい、クージャ、ドゴニヤイを馬車に駕けてお目にかける。」

この道で達人と云はれる調馬師のクージャが通りへ出て、三度ばかり私の前を往來した。よく走る馬で歩調も亂れず、尻も振らず、足の運びも素直で、尻尾もちやんと上げたまゝで、まれなる逸物である。

「幾らなら手放すんだい？」

シートニコフは途方もない値段を吹きかけた。私は往來に立つたまゝ、すぐその場で値段の押し問答を始めた。すると不意に街の角から、素ばらしくよく揃つた三頭立ての驪遞馬車が、凄まじい響きと共に飛び出して、シートニコフの家の前でびつたり立ち止まつた。狩獵用の洒落れた小馬車にはN公爵が乗つてゐて、その傍にはフロパコフがきよとんとした顔を突き出してゐる。

バクラーガが馬を馭してゐたが……その馭し方の鮮かさ！馬車ごと耳環の穴でも潜り抜けるかと思はれるばかり、何といふ小氣味のいゝ悪黨だらう！眼と足の黒い、生き生きした、小ぶりの栗毛の脇馬は、燃えるばかりに逸りきつて、全身をきつと引き緊めてゐる。ちよつとでも口笛を吹いたら——そのまゝ飛び出して姿を消すだらう！黒栗毛の中馬は頸を白鳥のやうに反らし、胸を張り、足を矢のやうに揃へて、しつかりと立つてゐる。これ見よがしに首を軽く振つて、傲然と目を細めてゐる……その見事さ！かういふ馬なら誰だつて復活祭あたりに、一つ走らせてみたくもならう！

「御前様！どうぞお入り下さいませ！」とシートニコフは叫んだ。

公爵は馬車から飛びおりた。フロパコフはのろ／＼と反対側から下りる。

「やあ、今日は……馬はあるかい？」

「御前様のことでございますもの、何で無いことがございませう！どうぞ、お入り下さいませ……ペーチャ、孔雀を曳いて来い！それから褒状も用意しておけ。ところで、旦那、」と彼は私の方へ振り向きながら云つた。「いづれ更めてお話を決めませう……フォームカ、御前様にお腰掛けを。」

最初わたしの氣がつかなくつた特別の既から、孔雀を曳いて来た。黒みがかつた栗毛の逞ましい馬は、空を翔るかと思はれるばかり逸り切つてゐた。シートニコフは顔をわきへ外らして、目を細くしたほどである。

「よう、ラ、ラカリオーオン！」とフロパコフは囁した。「ジェムサー。」

公爵は笑ひ出した。

孔雀を引き止めるには大分骨が折れた。馬丁は庭ぢゆう引き廻されたが、やつとのことで壁ぎはへ押しつけた。馬は鼻を鳴らしたり、身慄ひしたり、胸を縮めたりしてゐる。シートニコフは鞭を振りあげて、からかつてゐた。

「どこを見てゐるんだ？　そうれ、おれが一つ！　うゝ！」と伯樂は我しらず自分の馬に見とれながら、優しく嚇かすやうに云つた。

「幾らだ？」と公爵は訊ねた。

「御前様のことですから、五千ルーブリでよろしうございます。」

「三千だ。」

「そりやなりません、御前様、ご冗談を……」

「三千だと云ふのに、ラ、ラカリオーオン。」とフロパコフが口を出す。

私はこの取引きの結末を待たないで、その場を去つた。通りの一番端の角まで来たとき、灰色がかつた小さな家の門に大きな紙が貼りつけてあるのが眼に入つた。上の方には、筒のやうな恰好の尻尾をした轆轤つ首然たる馬がペンで描いてあつた。馬の蹄の下には、古風な書體で次のやうなことが書いてある。

『この處に於いて、タムボフ縣の地主アナスタセイ・イワーヌイチ・チェルノバイ氏所有の高名なる曠野の育馬場より、當レベヂャン定期市に連れ來りし毛色さまざまなる馬の賣り物有之候。右の馬はすべて體格優秀にして、完全に乗り馴らされ、性質温順に御座候。御購買の諸彦は何卒アナスタセイ・イワーヌイチに直々御問合はせ被下度、若しアナスタセイ・イワーヌイチ不在の節は、馭者ナザール・クブイシキンを御訊ね有り度し。御購買の諸彦、何卒老生の年に免じ御訪

問の榮を賜らんことを！』

私は足を止めた。よし、一つ高名なる曠野の育馬場主チェルノバイ氏の馬を見てやらう、と考へたので。

私は木戸口から入らうとしたが、この邊の習慣と違つて、錠が掛かつてゐた。私は戸を敲いた。

「どなた？……馬をお買ひになる方？」といふ女のか細い聲がした。

「さうだ。」

「たゞ今、旦那様、たゞ今。」

木戸が開いた。私の目に映つたのは、頭に何も被らないで、長靴を穿き、毛皮外套の前を開けつひろげにした、五十ばかりの老婆であつた。

「どうぞ、旦那様、お入り下さいませ。たゞ今アナスタセイ・イワーヌイチのところへ行つて、さう申し上げますから……ナザール、ちよつと、ナザール！」

「なんだね？」と厩の中から、七十からになりさうな老人の齒抜け聲が聞こえた。

「馬の用意をした。お客さまが見えたから。」

老婆は家の中へ駈け込んだ。

「お客様か、お客様か。」と、ナザールは返事の代はりに呟いた。一まだみんな尻を洗つてねえだ。」

『おゝ、何といふ桃源郷だ！』と私は考へた。

「御機嫌よう、あなた、よろこそお出で下さつた。」といふ水々した氣持ちのいゝ聲が、背後から

のどかに聞こえた。振り返つてみると、私の前に裾長の青い外套を着た老人が立つてゐた。中背で、髪が白く、愛想のいゝ微笑を浮かべ、綺麗な碧い眼をしてゐる。

「馬がお入用かね？ さあ、あんた、さあどうぞ……だが、その前に私のところへ寄つて、茶でも飲んで行きなさらんか？」

私は禮を云つて辭退した。

「まあ、お氣の向いたやうに、あんた、どうぞ御免なして、何分わしは昔風でしてな。(チェルノバイ氏はゆつくり／＼とそれをそのまま發音した。)(ロシア語で力點のないoはaと發音されるのが原)うちは萬事ざつくばらんで、その……ナザール、おい、ナザール。」と言葉尻を引き、聲を張らずに呼んだ。

鷹の嘴のやうな小さい鼻をして、楔形の鬚を生やした萎びたナザール爺さんが、既の闕ぎはに姿を現はした。

「ときに、あんた、どんな馬が御所望ですか？」とチェルノバイ氏が言葉を續けた。

「あまり値の張らない、車につけるのをね、幌馬車に。」

「よろしい……そんなのもありますよ、よろしい……ナザール、ナザール、旦那に茸毛の去勢馬をお目にかける、分かつてをるな、一番端に立つてるのだ。それから星のある栗毛か、でなければ……もう一つの栗毛がいゝ、あの美、人の子だ、分かつてをるだらう？」

ナザールは既へ引き返した。

「あゝ、お前そのまま、羂繩をつけて曳いて来い。」とチェルノバイ氏は背後から聲をかけた。「わしんところは、あんた、」澄んだ温順しさうな眼で私を見ながら、彼は言葉を繼いだ。「伯樂どもの所と

は違ひますてな、安心しておくんなさい——あんな奴ら、くたばつてしまふがいゝ！ やつらは鹽(酒糟や鹽を與へると馬は忽ち肥るものである。原著者註)だとか酒糟だとか、いろんな呪まじなひをしやがるんで呆れたもんですわ！……ところが、私んところや何もかも明けつびるげで、からくりなしですわい。」

馬が曳き出されたが、どれも私の氣に入らなかつた。

「まあ、仕方がない、そいつらは元のところへ戻して、」とアナスタセイ・イワーヌイチが云つた。「ほかのを出して見せんさい。」

ほかの馬を見せて貰つた。私は最後に一匹わり安なのを選び出した。値段の押し問答が始まる。チェルノバイ氏は決してむきにならないで、貫目を見せながら、分別のある調子で話をするので、『私も老生の年に免じ』ない譯に行かなくなつて、手付けを渡した。

「さて、それでは、」とアナスタセイ・イワーヌイチが口を切つた。「昔からの習慣で、この馬を裾から裾へお渡しすることにさして貰ひたいもんで……この馬なら、あんたも後でわしに禮を云ひなさるだらう……なんせ生き／＼したやつでな！ まるで若い胡桃のやうに……手つかずで……それこそ曠野クワンヤの生え抜きだで！ どんな馬車につけたつてよく走るよ。」

老人は十字を切つて、自分の外套の裾をわが手の上に掛け、羂繩を取つて私に馬を渡した。

「これで天下晴れてあんたの所有だ……ときに、お茶はやつぱし飲みなさらんか？」

「どうも有難う、折角ですが、もう歸る時刻なので。」

「どうとも御隨意に……では、今すぐうちの馭者に馬を曳かせてお供させませうかな？」

「さう、今、もし宜しかつたら。」

よ。馬を曳いて行つて、お金を頂くのだ。それでは、さやうなら、あんた、御機嫌よろしう。」

「さよなら、アナスタセイ・イワーヌイチ。」

馬は宿まで送り届けられた。翌る日になつて見ると、乗りつぶされた跛馬なのであつた。車に駕けようとする、馬は尻ごみする。鞭を入れてみると、ぢやく／＼けて蹴り廻り、結局臥てしまふ。私はすぐさまチュエルノバイ氏のところへ行つて、訊ねた。

「在宅かね？」

「へえ。」

「一體これは何といふ事です。」と私は云つた。「乗り潰した馬を私に賣りつけるなんて。」

「乗り潰した馬を？……滅相なことを！」

「おまけに跛で、しかもぢやく／＼馬といふ代物だ。」

「跛だつて？ 知りませんな。そりやあんたの馭者が何かの拍子で傷ものにしたと見える……わしは神明にかけて……」

「とにかく、アナスタセイ・イワーヌイチ、あなたはあれを引き取るのが本當だ。」

「いや、あんた、腹を立てんで貰ひませう。もう一旦この庭から出した以上、もう話は覺がついたわけだな。前によく見て置きなさりやよかつたに。」

私は真相が分かつたので、不運と諦めて、綺麗に笑つて別れた。仕合はせと、私はこの教訓にあまり高い授業料を拂つてゐなかつたのである。

二日ばかり経つて、私はこゝを引き上げたが、一週間後また歸り途にレベヂャンへ寄つた。カフエーを覗いてみると、相變はらずの顔ぶれで、N公爵は今度も球突きをやつてゐた。たゞフロ

バコフ氏の一身には、もうこの間に珍らしくもない變化が起つてゐた。白つばい髪の毛をした若造の將校が、公爵の寵を奪つたのである。可哀さうな退職中尉は私を見てゐる前で、もう一度例の十八番を持ち出してみた——あはよくば、ふたゝび御意に召さうといふ譯であらう——けれど公爵はにこりともしないばかりか、顔を顰めてひよいと片方の肩を竦めた。フロバコフ氏は目を伏せ、小さくなつて、隅っこへ引つ込むと、こつそりパイプに煙草をつめにかゝつた……

タチヤーナ・ポリーソヴナとその甥

親愛なる讀者よ、一つ手を貸して下さい。一緒に出掛けませう。麗かな日和で、五月の空は音なしやかに青み渡り、艶やかな楊の若葉は宛ら洗ひ上げたやうに輝いてゐる。廣い坦々とした道は、羊どもが喜んで食べる莖の赤味がかつた小草で一面に蔽はれてゐる。道の左右に連なる長い丘の斜面には、緑の裸麥が靜かに小波を立て、小さな流れ雲の影が淡い斑模様を落とすながらその上を滑つて行く。遠くには森が駒み、池が點々と輝き、村々が黄色く見えてゐる。雲雀が幾百となく舞ひあがり、囀り、やがて逆落として落ちて来て、首をさしのべながら土塊の上にもよこなんと立つてゐる。白嘴鴉が街道の上を下り立つて、こちらを見てしきりに土をほじつてゐるが、私たちの馬車をやり過すと、二度ばかりひよい／＼と跳ねて、重々しく脇の方へ飛んで行く。谷を隔てた丘の上には百姓が一人畑を耕してゐる。尻つぼの短い鬘を振り亂した斑の仔馬が、たどたどしい足どりで母親の後を追つて駆け出す、そのか細い嘶きが聞えて来る。私たちは白樺の林へ馬車を乗り入れる。つんと強い新鮮な香りが快く呼吸をつまらしてくる。やがて村はづれへさしかゝる。馭者は車から降りて行く。馬どもは鼻を鳴らしてゐる。脇馬はあたりを見廻し、中馬は尾を振りながら輓に頭を仰向ける……と大きな門がぎいと軋みながら開く。馭者はまた馬に乗る……『さあやれ！』わたしたちの眼前には村の光景が展開される。家敷にして五軒ばかり通り過ぎると、私たちは右へ折れて一寸した窪地へ下り、土手に乗り上げる。小さな池の向かう側には、林檎やライラックの圓つこい梢ごしに、煙突の二本ついた、かつては赤く塗られてゐた

らしい葺葺の屋根が見える。馭者は板塀に沿うて左へとり、古いぼれた三四のマスチフ種の犬が甲高い吠れた聲で吠え立てる中を、一杯に開け放した門内へ乗り入れて、廣い屋敷の既や納屋の傍をぐるりと景氣よく飛ばす。開いた物置きの高い閤を身體を横にして跨いでゐる年とつた女中頭にいなせな挨拶をして、さて漸く明るい窓の並らんだ小暗い家の上り段の前に馬をとめる……私たちはタチヤーナ・ポリーソヴナの所へ着いたのである。程なく當の御主人が息拔きの小窓を開けて、私たちの方へ頷いてゐる……『今日は、をばさん！』

タチヤーナ・ポリーソヴナは年の頃五十ばかり、飛び出し氣味の大きな灰色の眼に、幾らか先きの丸い鼻をした、頬の赤い二重顎の婦人であつた。その顔には愛想のいゝ優しい氣持が溢れんばかり。彼女は何時か結婚した事もあるけれど、間もなく寡婦になつてしまつた。タチヤーナ・ポリーソヴナは中々感心な婦人である。自分の小さな持ち村から一足も出ないで、ひっそりと暮らし、餘り近所づき合ひもせず、たゞ若い人たちだけを好んで出入りさせてゐる。兩親がごく貧しい地主であつたので、まるつきり教育を受けなかつた。と云ふのは、つまり佛蘭西語が話せないのである。モスクワにさへ一度も行つた事がない——かういつたやうな缺點があるにも拘らず、その態度振舞ひはさつぱりして厭味なく、感じ方も考へ方も自由で、小地主の奥さん方にある勝ちな悪い癖は殆んど感染つてゐない。これなどは全く感心しないわけに行かぬ……實際、年がら年中淋しい田舎に暮らしてゐながら、人の蔭口をきくでもなく、泣き言を並らべもせず、お上手も云はず、騒ぎ立てもしなければいやに悄氣かへることもなく、好奇心に身も世もあらぬやうな思ひをするでもない……これこそ正に奇蹟のものである！いつも鼠色の琥珀織の着物を着て、薄紫のリボンを垂らした白い室内帽を被つてゐる。美味しい物を食べるのは好きだけ

れど、度を越すといふ事はない。ジャムも、干物も、漬物もみんな女中頭に任せ切りにしてゐる。では一日何をしてゐるのか？ といふ問ひが出て来るわけ……本でも讀んでゐるのか？ いや、本など讀みはしない。全くの所本などと云ふものは、かういふ人のために作られるものではない……もし客でもなければ、わがタチャーナ・ポリソヴナは窓の傍に坐つて靴下などを編んでゐる——これは冬のこと、夏ならば庭へ出て草花を植ゑたり、水をやつたり、猫の仔を相手に幾時間も幾時間も遊んだり、鳩に餌をやつたりする……家事向きのことには餘り手を出さない。けれど、自分の鼻眞にしてゐる近所の若い地主でも遊びにくると、タチャーナ・ポリソヴナは見る／＼元氣づいて、椅子をすゝめるやら、お茶を注いで出すやら、客の話に聞き惚れて笑ひ興じたり、時には相手の頬を撫でたりする。けれども自分では餘り口敷を利かない。たゞ不幸があつたり悲しい事が起こりなどと、慰めの言葉をかけたり、いゝ智慧を借してやつたりする。内輪の話をしたり、心の奥の祕密を打ち明けたりして、彼女の腕に抱かれながら泣いた人がどれだけあつたか！ よく彼女は客とさし向かひに坐つて、そつと肘をつきながら、さも同情に堪へぬやうな顔つきで相手の眼をみつめ、愛情に満ちた微笑みを浮べるので、こちらは思はず『タチャーナ・ポリソヴナ、あなたはなんていゝ人なんでせう！ 一つあなたに私の胸の中にある事をすつかりお話ししてしまひませう。』といつたやうな氣持ちになるのである。彼女の家の小ぢんまりして居心地のいゝ部屋に坐つてゐると、誰でも何とも云へない暖かみを感じる。彼女の家は、もしこんな事が云へるとすれば、いつも上天氣なのである。タチャーナ・ポリソヴナは驚嘆すべき婦人であるが、誰もかくべつ驚嘆しようとしなない。彼女の確かな分別や、しつかりしたところや、自由なところや、他人の悲しみや喜びを眞底から我が事のやうに考へる性分や、一

口に云へば、彼女の凡ゆる長所美點は、さながら生まれながら具はつてゐるので、彼女にとつてはまるで骨も折れなければ、面倒もいらぬことだ……これより他には想像の仕方がないので、従つて何も改まつて禮を云ふ程のこともない譯である。彼女は若い人たちの遊びや、悪戯を見てゐるのがとりわけ好きなので、胸のところどころに兩手を組んで頭を後ろへ反らし、眼を細めてにこにこしながら坐つてゐるかと思ふと、だし抜けに溜め息をついて、『あゝ子供たち、私の可愛い子供たち……』と云ふのである。それを見てゐると、いきなり彼女の傍へよつてその手を取り、こんな風に云ひたくなつて来る。『ねえ、タチャーナ・ポリソヴナ、あなたは御自分の値打ちを御存じない。あなたは單純で素朴で、學問が身についてゐないけれど、實に素晴らしい人なんですよ！』彼女の名前を呼んだだけでも、なんだか親しみのある懐かしい響きがして、好んで口にしたくなるし、口にする、人懐っこい微笑みを誘はれるのである。例へば私が何遍道で出會つた百姓に、『おい、グラチェーフカへはどう行つたらいゝのだね？』と訊ねてみても、『それは、旦那、先づギヤゾエへお出になるがいゝ、そこからタチャーナ・ポリソヴナのところへおいでなさると、それから先きは誰でも教へてくれますよ。』と答へるに決まつてゐた。しかもタチャーナ・ポリソヴナの名を口にする時、百姓たちはなんだか特別な頭の振り方をするのである。彼女は分相應に小人數の召使ひを置いてゐる。邸や、洗濯場や、物置きや、臺所などは、女中頭のアギーフィヤが預かつてゐる。これは元タチャーナ・ポリソヴナの保母をしてゐた、ごく人のいゝ、涙もろい女で、齒がきれいに抜け落ちてゐる。アントーノフ林檎のやうな、どす赤い頬つべたをした、頑丈らしい二人の小間使ひがその下で働いてゐる。侍僕から執事、食堂番の役目まで一人で務めてゐるのは七十からになる下男のポリカルプである。これは學問のある男で、元は

ヴァイオリン弾きを勤め、ギョッチの崇拜者で、ナポレオン——と云ふより、彼の言葉に従へば『ボナパルトの奴さん』を不倶戴天の仇のやうに思ひ込んでゐる。夢中になるほど鶯の好きな、世にも珍らしい變人。いつも自分の部屋に鶯を五羽も六羽も飼つて置いて、早春の頃には朝から晩まで籠の傍につきつ切りで『初音』を待ち焦れてゐる。漸くその一と聲を聞くと、兩手で顔を蔽ひ、『おゝ、可哀さうに、可哀さうに！』とうめくやうに云つて、さめんとばかり泣き出すのである。ポリカルプの傍には手傳ひの格で、ワーシャといふ孫がついてゐる。年の頃は十二ばかり、髪のふさ／＼と渦卷いた、はしつこい眼つきをした男の子である。ポリカルプはこの子にはまるで目がないくせに、朝から晩までぶつ／＼小言の言ひ續けである。この子の教育をしてやるのもやはり老人自身なので、『ワーシャ、ボナパルトの野郎は悪黨だと云ひなさい。』と彼が云ふと、『さう云へば何くれるの、おぢいちゃん？』何くれるかつて？……何もやりやしないよ。……一體お前は何だと思ふ？ 露西亞人ぢやないか？』俺はアムチャニンだよ、おぢいちゃん。だつてアムチェンスクで生まれたんだもの。』『えい、この馬鹿な餓鬼め！ 第一アムチェンスクは何處にあると思ふ？』そんな事だれが知るものかい？』露西亞にあるんぢやないか、アムチェンスクの町は——この馬鹿めが。』露西亞にあるからつて、それがどうしたの？』『え、何だつて？』あのボナパルトの奴はな、おじ／＼なりになつたミハイロ イラリオノギッチ・ゴレニシチェフ・クトウゾフ・スモレンスキイ公爵閣下が神様の御助けを藉りて征伐に向かはれたものだから、露西亞の國境ひからお拂はれてしまつたんだぞ。それについてあの歌が出来たんぢやないか。』ボナパルトめは、踊りどころの騒ぎぢやござらぬ、靴下留めをみんな落とした……』といふ奴さ。分かつたか、公爵閣下がお前の生まれた國を助けて下すつたんだよ。』『それで俺がどうし

たと云ふのさ？』『え、この阿呆が、なんて馬鹿な子供だ！ さうぢやないか、もしミハイロ イラリオノギッチ閣下がボナパルトの奴さんを追拂つて下さらなかつたら、今頃はお前なんかどこの馬の骨とも分らない佛蘭西人に腦天を杖で叩かれてゐたんだぞ。こんな風にお前の傍へやつて来て、『コマン、ヴウ、ボルテ、ヴウ？』(ご機嫌は)——とかなんとか云ひながら、こつ／＼とお見舞ひ申すだらうよ。』『なに、俺そいつのどてつ腹に拳骨を喰らはしてやるよ。』『ところが向からはボンジウル、ボンジウル、ヴェネ、ジシ(今日は、今日は、)——てな事を云ひながら、お前の冠毛とさかを引つ張るんだ、その冠毛とさかをな。』『したら俺はそいつの脚を、ひよろ／＼脚を引つばたいてやらあ。』『そりやなるほど奴等はひよろ／＼脚をしてゐやがるが……でも、もし奴がお前の兩手を縛りにかゝつたら？』『俺、そんな眞似させやしないや。馭者のミヘイをよんで加勢して貰ふんだ。』『どうだワーシャ、佛蘭西人でもミヘイにかゝつちや敵はんだらうな？』『なんの敵ふもんで！ ミヘイはとつても強いんだから！』『は、あ、その時お前たちは奴をどうする積りだ？』『背中をどやしつけてやるよ。背中を。』『したら、奴さんパルドン(ご免、ご免)と喚くだらうな、パルドン、パルドン、セ、ヴウ、プレエ！』(ご免、ご免) なんかつてね。』『ところが俺たちはさう云つてやる。』『セ、ヴウ、プレエも糞もあるもんか、この佛蘭西野郎め！』……』『でかした、ワーシャ！……さて、そこで「ボナパルトの奴は悪黨だ！」と怒鳴つて見ろ。』『そんなら砂糖をおくれよ！』『ちよつ、なんて奴だ！……』

タチヤーナ・ポリローヴァは、女地主連とは餘り交際まじりつてゐない。奥さん方もさまで喜んで訪ねて來ないし、こちらにも上手には取り持ちが出来ない。女客がべちやくちや喋つてゐると、ついうと／＼睡氣がさして來る。一生懸命に目を開けようと骨折つてみても、また睡氣がさすのであ

る。タチヤーナ・ポリソヴナは總じて女といふものを好かない。彼女の友達に感心なおとなしい青年がゐるが、その男には姉があつた。三十八九になる老嬢オールドミスでこの上もなく人のいゝ女ではあつたが、自然なところがなくなつて、妙にわざとらしく、そのくせ矢鱈に有頂天になり易いのであつた。弟は始終タチヤーナ・ポリソヴナの話をして聞かせてゐた。ある時、わが老嬢はだしぬけに馬に鞍を置かせて、タチヤーナ・ポリソヴナの所へ押しかけて行つた。スカートの長い着物をつけ、帽子を被り、緑色の面紗ヴェールを垂らして、髪を振り亂したまゝ、玄關へ入つて行つたのである。ルサールカ（水精）がやつて来たかと度膽を抜かれてゐるワーシヤの傍を通り抜け、駆け込むやうに客間へ入つた。タチヤーナ・ポリソヴナは惘然ぼうぜんとして、思はず立ち上がらうとしたが、足が萎なえて云ふ事を聞かない。『タチヤーナ・ポリソヴナ』と、この女客は祈るやうな聲で云ひ出した。『不躰をお赦し下さいまし。わたしはあなたにお心易く願つてゐるアレクセイ・ニコラエキッチ・K……の姉でございます。弟からいろ／＼お噂を伺つて居りましたので、親しくお近づきを願ひ度いと思ひ立つた次第でございます。』『それはまあ、ようこそお越しを。』と女あるじは呆氣にとられて、口の中でもぞく／＼云つた。客は帽子を脱ぎ棄てて、長い髪をさつと一振りすると、タチヤーナ・ポリソヴナの側に腰をおろし、その手をとつた。『なるほど、この人なんだわねえ。』と、彼女は物思はしげな感に堪へたやうな聲で云ひ出した。『これがあの、優しくて、朗らかで上品な、聖人みたいな人なんだわ！ あゝ、この人がさうなんだわ！ これがあゝの、さつぱりしてゐて、しかも深味のある方なんだわ！ まあ嬉しい！ わたし本當にうれしいわ！ これからお互ひに仲好しになりませうね！ これで私やつと安心が出来る……全く想像してゐた通りの方だつたわ。』タチヤーナ・ポリソヴナの眼をひたと見詰めながら、彼女は囁くや

うに云ひ足した。『ねえ、あなた、ほんたうに腹を立ててらつしやるのぢやありませんの、ねえ、あなたつてば、ねえ？』とんでもない、わたし心から喜んで居りますわ……一つお茶でも如何でございます？』客は寛大な面持ちでにつこり微笑わらた。『なんて打ちとけた、なんてわだかまりのない方トでせう。』と彼女は獨り言のやうに呟いた。『どうか、あなたを抱きしめさせて下さいな、タチヤーナ・ポリソヴナ！』

老嬢はのべつ幕なしに喋り續けて、三時間ばかりタチヤーナ・ポリソヴナの所に腰を据ゑてゐた。彼女は新らしく出来た友達に自分の豪いことを納得させようと一生懸命であつた。この思ひがけない客が歸るが早いのか、氣の毒な女地主は勿々に風呂へ入つて、菩提樹の煎薬をしこたま飲むと、そのまゝ床の中へ入つてしまつた。けれど翌日、老嬢は又ぞろやつて来て、四時間ばかりも坐り込んだ後、これからは毎日タチヤーナ・ポリソヴナを訪ねて来るからと約束して、引き上げて行つた。讀者諸君もお察しの事と思ふが、彼女は當人の言葉を藉りて云ふと、タチヤーナ・ポリソヴナの豊かな天分を徹底的に發達させ、安全に教育してやらうと思ひついたのである。もし彼女が二週間ばかり經つてから自分の弟の女友達に「すつかり」幻滅を感じなかつたら、恐らく可哀さうな女地主をさん／＼な目に遣はしたに相違ない。それに、彼女は旅の若い學生に首つたけになつて、早速こまめに、熱情溢るる手紙の往復を始めたのである。その手紙はどんなものかと云ふと、かうした場合のお定まりで、相手を祝福して神聖な美しい生活を祈り、自分の「肉體も精神も」犠牲に捧げるなどと誓ひ、自分はたゞ姉と呼んで貰へばいゝのだからと頼んでゐるかと思ふと、自然描寫を長々と書き連ねたり、ゲーテ、シルレル、ベッティナを始めとして、獨逸哲學までも談じるといふ始末で——遂にはこの不幸な若者を暗澹たる絶望に驅り立て

る事になつたのである。けれど若さといふものはどうにもならないもので、彼はある朝ふと、目を覺ました時、「わが姉にして、敬愛措く能はざる友」に物狂ほしい程の憎悪を感じた。そして腹立ち紛れに従僕を危く撲りつけなければかりであつた。それから長い間、高遠純真な愛などといふ事はほんのちよつと匂はされただけでも、躍起となつて相手に喰つてかゝるやうになつた。……さて、それ以來、タチヤーナ・ポリーソヴナは前よりも一そう近所の婦人たちと交際ふのを避けるやうになつた。

嗚呼！ この世には何一つ無常ならざるものはない。私が今までお話しした優しい女地主の生活もすべて過去のことになつてしまつた。彼女の家に立ち單めてゐた静寂は永久に破られてしまつた。そこには、もうかれこれ一年餘りも前から、畫家の甥がペテルブルグから來て住んでゐる。それはかういふ経緯なのであつた。

八年ばかり前、タチヤーナ・ポリーソヴナの所に十一二の男の子が引き取られてゐた。亡くなつた彼女の兄の息子であつたが、天涯に寄る邊のない孤兒で、名をアンドリユーシャと云つた。アンドリユーシャは、大きく澄んだ露みのある眼に小さな可愛い口、筋のとほつた鼻、美しい秀でた額をしてゐた。話し聲は静かで氣持ちがよく、物腰はきちんとして行儀正しく、客に甘えながら、小まめに用をたし、いかにも孤兒らしい、いぢらし氣な様子で叔母さんの手を接吻するのであつた。誰か訪ねて行くと、まだ姿が見えるか見えないかに、もう肘椅子などを運んで來る。悪戯めいた事を一切しないで、ことりとも云はさず、部屋の隅にひつ込んで本など讀んでゐる。それも大人しくつゝ、まじやかに、椅子の背に凭れようともしない。客が入つて行くと、我がアンドリユーシャは立ち上がつて、お愛想につこり微笑みながら、顔を赧らめる。客が出て行く

と、また腰を下ろして、ポケットから刷毛と懐中鏡を取り出し、髪を撫でつける。極く幼い頃から繪を描く事に興味を持つて、紙切れ一枚でも目にあたると、彼は早速女中頭のアガフィーヤから鉄を借りて、克明に眞つ四角に切り、まはりに縁飾りをつけると、ヤがて仕事に取りかゝるのであつた。腫の大きい目だとか希臘風の鼻だとか、煙突から螺旋形に煙の出てる家だとか、まるでベンチのやうな恰好をした前向きアムニの犬だとか、二羽の鳩の止まつてゐる木などを描いて、「何年何月何日マイルイエ・ブルーイキ村にて、アンドレイ・ペロヴゾーロフ畫く」と署名するのであつた。タチヤーナ・ポリーソヴナの命名日前には、二週間ばかりといふもの殊さら一生懸命に精を出したものである。當日は第一番にやつて來てお祝ひを述べた上、薔薇色のリボンで縛つた巻物を叔母さんに捧げる。タチヤーナ・ポリーソヴナは甥の額に接吻して、結び目をほどく。巻物がくるくると擴がると、圓柱が竝らんで、眞ん中に祭壇のある神殿を大膽に陰影をつけて書き上げたのが、好奇の色を漲らしてゐる叔母さんの眼の前に現はれるのであつた。祭壇の上には心臓が焔を立て、花輪が置いてあつて、その上にはうね／＼した飾り粹をつけ、そこにくつきりした筆蹟で、「敬と愛とに満ちたる甥より、深甚なる愛慕のしるしとして、恩義ある叔母上タチヤーナ・ポリーソヴナ・ボグダーノワへ」と書いてあつた。タチヤーナ・ポリーソヴナは、もう一度彼に接吻して、一ルーブリ銀貨を握らしてやる。とは云ふものの、彼女は甥に對して心から愛情を感じはしなかつた。アンドリユーシャの鞠躬如とした態度が、どうも氣に入らなかつたのである。その中にアンドリユーシャはめき／＼大きくなつて行つた。タチヤーナ・ポリーソヴナは、その行く末について氣を揉み始めた。すると、思ひがけない出來事が持ち上がつて、彼女をその心配から救つてくれたのである。……

といふのは外でもない。今から八年ばかり前の或る日のこと、六等文官で勳章まで持つてゐるピョートル・ミハイイチ・ベネズレンスキイ氏なる人が、彼女の許を訪ねて來た。ベネズレンスキイ氏は、かつて程近い郡役所のある町で官吏をしてゐたが、一時せつせとタチャーナ・ポリソヴナの處へ出入りしたものである。その後ペテルブルグへ移つて、本省づめになり、かなり豪いところまで漕ぎつけた。公用で屢々出張を命ぜられてゐる中に、或るとき、古い女友達の事を思ひ出し「田園の靜寂しじまに抱かれて」二日ばかり公務の疲れを休めようといふ考へで、彼女のところへ立ち寄つたのである。タチャーナ・ポリソヴナは、いつもに變らず慇懃に彼を迎へた。で、ベネズレンスキイ氏も……しかし、この物語を續ける前に、親愛なる讀者よ、この新らしい人物を紹介さして頂きたい。

ベネズレンスキイ氏は、見たところ物柔かな中背の太り肉の男で、脚は短く、手はむつちりと膨らんでゐる。ゆつたりした、手入れの充分に行き届いた燕尾服を着て、大きな幅廣のネクタイをしめ、雪のやうに白いワイシャツを着込み、絹のチョッキに金鎖を這はせ、人差し指には寶石入りの指環をはめ、白つばい艶をした鬘を被つてゐる。話しぶりは諄々と人を説き伏せねば止まぬやうなその癖つゝ、まじやかな調子で、歩くのにも音を立てないし、氣持ちのいゝ微笑を浮かべ、氣持ちよく眼を働かせて、氣持ちのいゝ容子で顎をネクタイの間に埋める。總じて氣持ちのいゝ人物であつた。氣立てからいつても、生まれつきこの上なく善良な方で、容易く涙を流したり物事に感動したりする。その上、藝術に對して慾得はなれた熱情を燃やしてゐた。それこそ本當に慾得はなれてゐたのである。といふのは、そも／＼ベネズレンスキイ氏は、正直な話、藝術のことなど皆目わからなかつたからである。それどころか、一體どんな摩訶不思議な自然の法則

によつて、こんな熱情が湧いて來たのかと呆れるばかりであつた。見受けたところ、彼は常識的な十把一からげの人間らしかつた……尤も、我が露西亞にはこんな人間が可成りうよ／＼してゐるので。

藝術や藝術家に對するこんな連中の愛といふものは、何とも彼とも云へない甘つたるさを帯びてゐる。こんな連中と付き合つたり、話したりするのは難行苦行である。彼等は正しく蜜を塗りつけた丸太ん棒みたいな人間なのだ。例へば、ラファエルをちやんと眞當まことにラファエル、コレツジオをそのまゝコレツジオとは決して呼ばうとはしない。「神の如きサンツィオ、餘人の企及を許さざるデ・アレグリス」などと云つて、必らず〇に力點アクセントをつけて發音する。誰かしらお國出來の己惚れ許り強い、蟲のいゝ凡才が現はれると、彼等は忽ちそれを天才扱ひにして祭り上げる。即ちもつと正確に云へば「てゝんさい」にしてしまふのである。イタリヤの碧瑠璃の空とか南國のレモンの花とかブレンタ河畔の香はしき春のいぶきとかいふ言葉が、何時も彼らの口から消える事がない。「あゝ、ワーニヤ、ワーニヤ」とか、「あゝ、サーシャ、サーシャ」と彼らはお互ひ同志、情の籠つた聲で語り合ふ。「お互ひに南國へ行きたいな、南國へ……僕らは氣持ちから云へば希臘人、古代希臘人なんだからな！」展覽會へ行くと、露西亞の畫家の或る種の作品の前あたりで、かういふ連中をしてみ／＼觀察する事が出来る（斷つておかなければならないが、かういふ紳士諸君は概ね熱烈な愛國者なのである）。彼らは二歩ばかり下がつて、頭を後ろへ反らすかと思ふと、また畫面に近々と顔をさし寄せる。その眼には油のやうな露ひが漲るのである。……『ふう、實に大したもんだ。』と、遂に昂奮の餘り罅隙の入つたやうな聲で云ひ出す。「魂、魂の溢れてゐることはどうだ！ いや、眞情、眞情の横溢してゐること！ 魂が畫面に漲つてゐる！ 魂の氾濫

だ！……それに構想の變つてゐる事はどうだ！この構想には大家の面影がある！』とところで、さういふ彼等の家の客間にはどんな繪が懸かつてゐることか！毎晩彼らのところへやつて来て、お茶を飲みながら彼らの話に耳を傾ける畫描き連は、一體どんな連中か！この畫描き連が彼らに捧げてゐる畫面の遠近法はどんなものか！それは彼ら自身の部屋の光景で、左手にはブラッシュがあり、磨き立てた床には塵が一山かためてあり、窓際の卓には黄色いサモワールが載つてゐる。當の御主人は部屋着をきて丸い頭巾を被り、その片頬には明るい日光の反射が躍つてゐるといふ寸法である。また熱病やみのやうな人を小馬鹿にした微笑を浮かべて、彼等を訪れる髪の長い美神の子らは、一體なんとしたものか！彼らの家でピアノに向かつて甲高い叫び聲を立てる、蒼ざめた緑いろの顔をした若い娘たちは、これまた何といふものどもであるか！しかし、これが我が露西亞に於ける習慣なのである。露西亞人は美術にばかり没頭してはゐられない——なんでも手を出さずにはゐられないのだ。かういふわけで、これらのアマチュア諸君が露西亞の文學、特に劇文學に甚大なる援助を與へてゐるのは、毫も怪しむに足らないのである。『ジャコブ・サンナザール』は彼等のために書かれたものである。何百遍、何千遍となく書き古された、認められざる天才と世間の人々との、否、全世界との闘争の光景こそ、彼等を眞底から感動させるのである。

ベネゼレンスキイ氏が訪ねて來た翌日、タチャーナ・ポリソヴナはお茶の席で甥に向かつて、その繪をお客様のお目にかけるやうに云ひつけた。『お宅の甥御さんは、畫を描かれるんですか！』とベネゼレンスキイ氏は稍々驚いたやうに云つて、愛い奴と云はんばかりにアンドリュウシヤの方へ振り向いた。『え、え、描くんですとも。』とタチャーナ・ポリソヴナは云ふ。『そ

れはそれは好きなんです！しかも先生なしに一人でやつてゐますの。』『あ、お見せなさい、お見せなさい。』とベネゼレンスキイ氏は引き取つた。アンドリュウシヤは顔を赧らめて微笑みながら、客に自分の手帖をさし出した。ベネゼレンスキイ氏は一つぼしの通人らしい様子をして、手帖をめくり始めた。『うまいもんだねえ、君。』と彼はつひに口を切つた。『うまい、中々うまい。』と云つて、彼はアンドリュウシヤの頭を撫でた。アンドリュウシヤは、すかさずその手に接吻した。『どうもはや、大した才能ですよ！……あなたもお合せですね、タチャーナ・ポリソヴナ、おめでたう。』『でもね、ピョートル・ミハイリチ、こゝではこの子に先生を捜してやる事が出来ないんですの。町から頼んでくれば高くつきますしね。御近處のアルタモノフさんのお宅では、ちやんと畫家を抱へていらして、立派な腕前ださうですけど、奥様が他所の人に稽古をするのをさし止めていらつしやるんですの。趣味が下品になると仰つしやいましてね。』『ふむ』とベネゼレンスキイ氏は云つて考へ込み、上眼づかひにアンドリュウシヤを眺めた。『まあ、その事はいづれよく御相談しませうよ。』とだしぬけにかう云ひ足して揉み手をした。その日、彼は早速タチャーナ・ポリソヴナにさし向かひで話かしたいと申し入れた。二人は一室に閉ぢ籠つた。三十分ばかりしてアンドリュウシヤを呼んだ。アンドリュウシヤは入つて行つた。ベネゼレンスキイ氏は顔をほつと赧らめ、眼を輝かしながら、窓際に立つてゐた。タチャーナ・ポリソヴナは片隅に坐つて涙を拭いてゐる。『さあ、アンドリュウシヤ』と彼女は遂に云ひ出した。『ピョートル・ミハイリチにお禮を仰つしやい。この方がお前の世話を引き受けて、ペテルブルグへ連れて行つて下さるんですよ。』アンドリュウシヤはその場でぼうとなつてしまつた。『一つ遠慮なしに云つて御覽。』とベネゼレンスキイ氏は尊嚴と寛大さに満ちた聲で口を切つた。

『君は畫家になりたいんだらうね、藝術に對する神聖な使命を感じてゐるんだらうね？』『僕、畫家になりたいんです。ピョートル・ミハイリチ、』とアンドリユーシャは胸を躍らしながら答へた。『さういふ譯なら私も實に愉快だ。そりや勿論、君も、』とベネゼレンスキイ氏は言葉を續けた。『大切な叔母さんに別れるのはさぞ辛い事だらう。君は叔母さんを心から有難いと思はなかりやなりませんぞ。』『僕は叔母さんが好きで堪らないのです。』とアンドリユーシャは遮つて、眼をぱち／＼させた。『無論だとも、無論だとも、それは尤も至極なことで、君としても感心な次第だが、しかし考へてみたまへ、やがてその中に……君が成功したら……それこそどんなに嬉しいことか……』『わたしを抱きしめて頂戴、アンドリユーシャ。』と氣のいゝ女主人は呟いた。アンドリユーシャは飛んで行つて、その頸筋に腕を捲いた。『さあ、今度はお前の恩人にお禮を云ふんですよ……』『アンドリユーシャはベネゼレンスキイ氏の腹に抱きついた、それから爪立ちをして背伸びをし、やつとの事で彼の手を執つた。恩人はその手を握り返しはしたけれど、餘り喜び勇んで握つたわけではない……子供の心持ちを満足させるためには、これだけの氣安めも必要だつたし、自分でも多少得意のところがないでもなかつた。二日ばかり経つて、ベネゼレンスキイ氏は新らしく託された少年を連れて辭し去つた。』

別れてから當座の三年間は、アンドリユーシャも可成りまめに手紙を寄越して、時折り手紙に繪を添へる事もあつた。ベネゼレンスキイ氏もたまには二言三言書き添へてゐたが、それは大抵讚言葉であつた。その後、手紙がだん／＼間遠になつて、遂には全く途絶えてしまつた。丸一年といふもの、甥からなんの沙汰もなかつた。タチャーナ・ポリソヴナがそろ／＼心配し始めた頃、思ひがけなく、次のやうな文面の消息が届いた。

『なつかしき叔母上様！』

一昨々目、小生の保護者であつたピョートル・ミハイリチがこの世を去られました。烈しい腦溢血の發作が小生の杖柱とも頼む掛け替へのない人を奪つてしまつたのです。申す迄もなく、小生はもう本年とつて二十歳になりました。この七年の間に随分腕が上がりました。小生は自分の技倆に深い自信がありますので、それで生活して行けると思ひます。小生はくよく／＼致しませんが、それにしても、もしお願ひ出来ませすれば、早速幸便で二百五十ルーブリの金を送つて頂きたいのです。謹んでお手に接吻いたします、敬具』といつたやうな調子であつた。

タチャーナ・ポリソヴナは、甥に二百五十ルーブリ送つてやつた。二箇月経つと又ぞろ請求して來たので、彼女はありつたけの金をかき集めて、また送つてやつた。二度目の送金から六週間と経たない中に、また三度目の無心が來た。チェルチェレーシネワ公爵夫人に注文された肖像畫を描く繪具代とかいふ事であつた。タチャーナ・ポリソヴナはそれを斷つてやつた。『さういふ次第なら、』と、彼は叔母に書いて寄越した。『小生は健康回復のために田舎に歸省したく思ひます。』さうしてその年の五月に、アンドリユーシャは本當にマイルイエ・ブルイキへ歸つて來た。

タチャーナ・ポリソヴナは、初め甥の顔の見分けがつかない位であつた。手紙の文面では、瘦せた病身者のやうに想像されたが、當人を見ると幅つたい赤々とした顔で、油じみた捲毛を垂らした、肩幅の廣い肥つた若者なのであつた。ほつそりした蒼白いアンドリユーシャが、がつちりしたアンドレイ・イワーノギッチ・ペロヴゾーロフになつてゐたのである。變つたのは見かけばかりではなかつた。以前の神経質で、内氣な、用心ぶかい、潔癖な性質に引きかへて、今では

無頓着すぎるほど豪傑氣取りで、鼻持ちのならない程、だらしなさが目についた。歩くにも身體からだを左右に振り立て、眩椅子にどつかとばかり身を投げるやら、無作法に卓に凭れかゝるやら、傍若無人にふん反り返るやら、大きな口を開けて欠伸をするやら、叔母や召使ひたちにも厚かましい應待ぶりをするのであつた。『俺は畫家だから自由なボヘミヤンだぞ！ 我々仲間は、まあかうしたもんだ！』と云はんばかりの有様。時によると幾日も繪筆を手にとらうとしないが、所謂、感興が湧いて來ると——まるで酔っぱらつてでもあるやうに垢ぬけのしない調子で仰々しく無器用な氣焰を上げる。頬はどす赤く燃え立つて、眼はどんより霞んで來る。そして自分の才能話や成功談や、自分の藝術がぐんぐ伸びて進んで行くといふやうなことを盛んに吹聴し始める……そのくせ本當のところを洗へば、彼の腕と來たら、どうやら見られる程度の肖像畫でも描くのが關の山であつた。お話にならぬ無學者で、何一つ讀んでゐない。尤も、畫描きが本など讀んだつてなんにならう？ 自然、自由、詩興——これが彼等の領分なのだ。たゞ長い髪をふり立てて、鶯のやうに囀り、ジュエコフの煙草でもふんだんに吹かして居ればそれでいゝのだ！ 露西亞人の豪放といふ奴は結構なものだが、但しこれが本當に板に着いてゐる人は甚だ少ない。天分のない二番煎じのボレジャーエフ（露西亞の詩人、一八一八—一八三八年）氣取りと來たら鼻持ちがならない。我がアンドレイ・イワーノキッチは、すつかり叔母さんの所に御興を据ゑてしまつた。どうやらたゞの飯といふ奴がお氣に入つたらしい。この家を訪ねて來る人達は怖毛おそげをふるつてこの男を嫌がつてゐた。彼はよくピアノの前に坐つて（タチャーナ・ポリソヴナの家にはピアノも備へてあつた）、一本指で探りながら『勇ましきトロイカ』を弾き始める。鍵盤を叩いて、和音を出しながら、何時間も何時間もワルラーモフの『寂しい一本松』とか『いや、いや、お醫者さん、來ないでくれ』

などといふ小唄を苦しきうに唸り續ける。その眼は脂あぶらでどろんとなつて、頬は太鼓のやうにてらから光り出す……。かと思へば又だしぬけに、『静まれよ、胸の浪風』などと喚き出す……。タチャーナ・ポリソヴナは不意を打たれて胸懐むねひをするのである。

「本當に驚いてしまひますわ。」と、或るとき彼女は私に云つた。「なんだつて、この頃はあんな歌ばかり作るんでせう——なんだか——自棄あきらつ鉢はちみたいな。私どもの若い時にはまるで違つてゐましたわ。そりや悲しい歌もありましたけれど、でも、聞いてて氣持きもちちがようござんした……例へて申しますと、

來ませ君いざ來ませ草の野へ

我はおん身を徒あたにこそ待て

來ませ君いざ來ませ草の野へ

我はひまなく涙にむせぶ

さはれ君草の野に來たまはん時

あはれ既に時遅からん、戀しの君よ

タチャーナ・ポリソヴナは狡ずさうににつこり微笑んだ。

『我は苦しむ、我は惱む、』と隣りの部屋で甥が唸り出した。

「いゝ加減におしよ、アンドリュエーシャ。」

『君に別れて、我がこゝろ、なげき悶ゆる、』とこちらは飽きもせず歌ひつゞける。

「あゝ、あんな晝家連にはほと／＼閉口だ……」

それから一年ばかり過ぎた。ペロヴゾーロフは、相變らず叔母さんのところに暮らして、何時もペテルブルグへ行く話ばかりしてゐる。田舎住居をするやうになつてから、縦よりも横の方が太い位になつた。叔母さんは——誰しも思ひがけない事だつたが——この甥にはまるで眼がないのである。そして近處の娘たちも、この男にやい／＼騒いでゐる……

多くの昔の知り合ひは、タチャーナ・ボリーソヴナの所に寄りつかなくなつた。

死

私の近所に獵好きの若い地主がある。晴れ渡つた七月の或る朝、一緒に松鷄そんやまどりを撃ちに行かうと勧めるつもりで私は馬に騎つて彼の所へ立ち寄つた。彼は賛成した。『ですが』と彼は云つた。『家の柴山を通つて、ズーシャへ行かうぢやありませんか。私はついでにチャプレイギノを見たいので。御存じですか、うちの櫛の森を？』いま、あそこを伐らしてゐるので。『では、お伴いませう。』彼は馬に鞍を置かせ、猪の頭を型どつた青銅の釦のついた青い上衣を着て、毛糸で縫ひとりをした獲物袋と銀の水筒をかけ、新らしい佛蘭西製の鐵砲を肩に擔ぎ、些か得意らしい様子で鏡に向かひながら、身體をあちこちくねらした後、エスペランスといふ飼ひ犬を呼んだ。それは心立ての優しい、頭に髪の毛のない老嬢オールドミスターの従姉から贈られたものである。私達は出かけた。私の隣人がお伴につれて行つたのは、アルヒーブといふ村の小頭で、顔の四角い、太古民族のやうに頬骨の發達した、がつしりとよく肥つた百姓と、それにもう一人、つい近頃バルチック沿岸地方から雇はれて來た支配人のゴトリーブ・フォン・デル・コックといつて、年の頃は十九ばかり、白つばい髪の毛をした、しよぼ／＼眼まなこの、撫で肩で首の長い、瘦せた若者であつた。私の隣人はついでこの頃現在の領地の主人になつたばかりである。五等文官カルドン・カタージェ夫人と稱する叔母さんから遺産として譲られたので。この叔母さんは恐ろしく肥満した婦人で、病床に横はりながらも、のべつ哀れつばい聲で唸り通してゐたものである。私達は『柴山』へ乗り込んだ。『お前たちはこゝで待つてくれ、この空地おきでな。』とアルダリオン・ミハイリイチミハイリイチ（私

の隣人)は伴の者に向かつてかう云つた。獨逸人は一揖して、馬から下り、ポケットの中から、ヨハンナ・ショーペンハウエルの小説とおぼしき本を取り出して、灌木のかけに腰をおろした。アルヒーブは日向にちつとしたまゝ、一時間ばかり身じろぎもしなかつた。私たちは叢の間をぐるぐる廻つてみたが、雛鳥一羽みつかからない。アルダリオン・ミハイリイチは、これから森へ行くつもりだと云ひ出した。私自身も、この日は何だか獵の首尾がよくなさうな気がしたので、同じく後からぶら／＼ついて行つた。私たちは空地へ引返した。獨逸人は讀みさしの頁にしろしをつけて立ち上がり、本をポケットへしまひこんで、尾の短いやくざ馬にやつとこさと跨がつた。この牝馬は一寸さはつただけでも嘶いて、後肢を跳ね散らすのであつた。アルヒーブはぶつと身慄ひして、一度に兩の手綱を引き絞り、足をばた／＼動かすと、呆氣にとられてぼんやりしてゐた馬も、到頭しやうことなしに歩き出した。私たちはそこを出發した。

アルダリオン・ミハイリイチの森には、私も子供の時分から馴染みがあつた。佛蘭西人の家庭教師デシレ・フルーリイ氏といふ善良無比な男と一緒に(尤も、この先生は毎晩レルア水を私に飲ませたので、すんでの事で私の健康を一生涯臺なしにしてしまふところであつた)、よくチャブールイギノへ散歩に行つたものである。この森といふのは、全部で二百本か、三百本ばかりの大きな榎と、秦皮木の樹だけであつた。その威風堂々たる幹は、金色の光りを透かしてゐる胡桃やななかまどの緑葉の上に美しく黒々と浮き出し、次第に高く梢近くなるにつれて、澄み切つた紺碧の空にしなやかな線を描き、面白くさし交はした枝をテントのやうに大きく擴げてゐる。兀鷹、小鷹、野鷹などは、そよともしない梢のかけを口笛に似た啼き聲を立ててとびめぐり、縞きつゝきは厚い樹皮を力強くこつ／＼と叩いてゐる。よく徹る黒鶉の歌聲が、高麗うぐひすの高低さま

ざまな啼き聲に續いて、思ひがけなく繁葉の中に聞えて来る。下の藪では鶉鴒や、鶉や、田鳧が、囀つたり歌つたりしてゐる。金絲茨鵲が小路を敏しくあちこちと走り廻り、白兔が用心深く「抜き足さし足」で森の縁をこつそりと通つて行く。赤みがかつた鳶色の栗鼠が樹から樹へ元氣よく跳び移りながら、時々頭の邊まで尾をふり上げて不意に立ち止まる。まるで缺て切り抜いたやうな美しい羊齒の微かな葉かけ、高く盛り上がった蟻塚のほとりの草の中には莖や、鈴蘭が花をつけ、青葙、粟葙、平葙、榎葙、赤い蠅取り葙などが生えてゐる。大きく擴つた叢の間の草地には野生の草苺が點々と赤く見える……ところで、森の中の木蔭の素晴らしさ! どんな暑い日盛りでも、秋と同じであつた。その静けさ、その快い香り、ひんやりとした涼しさ……かうしてチャブールイギノでは、私は楽しい時を過ごしたものである。だからこそ今、正直なところ、餘りにも馴染みの深いこの森へ入つた時、なんとなくうら悲しい氣持を禁じ得なかつた。あの一八四〇年の恐ろしい破壊力をもつた雪のない冬は、私の古馴染みであつた榎や秦皮木をも容赦しなかつた。これらの樹々は枯れ果て、赤裸の姿となり、ところ／＼肺病やみのやうに勢のない青葉をつけて、『もとの姿には似通はぬまでも、その跡を繼いだ』若木の林の上に悲しげに聳えてゐる。中には下の方にまだ葉を繁らせて、生氣の通はない折れた枝を非難と絶望の表情で、高く中空にさし

* 一八四〇年には大寒が續きながら十二月の末まで雪が降らなかつたので、木や草がすっかり枯れてしまつた。多くの美しい樹の林もこの無慈悲な冬のために滅ぼされた。かういふ森はかけ代へのないもので土地の生産力も目に見えて乏しくなつて来る『禁伐林』(聖像を持つて通り過ぎた区域内)などにも、昔のやうな氣高い木立ちは影を消して、白樺や泥揚が勝手に伸びてゐる。それより外にはロシアでは植林の方法を知らないのである。

上げてゐるのもあるし、昔のやうに満ち溢れるやうな豊かさはないけれど、それでも可成りこんもり茂つた葉の間から、太いこつ／＼した枯れ枝を突き出してゐるものもある。それからもう皮がすつかり落ちてしまつたのもあれば、遂に倒れて死骸のやうに地べたで腐つてゐるものもある。かういふ事になり果てようとは、誰が豫想することが出来たらう？ チャプルーイキノの木蔭、あの懐かしい木蔭は、いまだここに求むべくもない！『どうだ』と私は死に絶えて行く樹々を眺めながら考へた。『さぞお前たちは恥づかしいだらう、やるせないだらう？』ふとコリツオフの詩が心に浮かぶ。

高らかに語りし聲々

誇りかなりしかの力

王者にも似るその威容

そもいましらは今いづこ？

頼もしげなりし緑の色よ

あゝそもいまし今いづこ？

「これはどうしたわけですらね、アルダリオン・ミハイルイチ、」と私は云ひ出した。「どうしてこの木を直ぐ翌る年に伐らなかつたのです？ 何しろ今のやうな有様ぢや、當時の相場の一割にも賣れないでせうに。」
彼はたゞ肩をすくめたばかりである。

「その事なら叔母に訊いて頂きたいものですね。——とにかく商人連がやつて来て、金をつきつけては、うるさく強請つたものですよ。」

「Mein Gott! Mein Gott! (あゝ、)とフォン・デル・コックは一足毎に叫んだ。「なんてイタツラだらう！ なんてイタツラだらう！」(獨逸人は多くロシア語の濁音を清音に發音するので、こゝでもそのために全く別の意味になつてしまつたのである。)

「何が悪戯だね？」

と隣人は微笑みながら云つた。

「つまり、その、なんて痛ましいと云ふつもりだつたんです。」

彼は地面に横倒しになつてゐる柵を見て、格別勿體なく思つたのである。全く粉屋だつたら水車の材料にと、高い金を出して買つたかも知れない。しかし小頭のアルヒーフは平然と落ちつき拂つて、一向に惜しさうな顔もせず、却つて多少面白さうな風で、倒れた樹を飛び越し、飛び越す拍子に鞭でびし／＼叩いてゐた。

私たちが伐り出し場へ辿りついた時、不意に轟然と樹の倒れる音がしたかと思ふと、續いて人の叫び聲や、がや／＼と騒ぐ聲が聞こえた。と、暫くして繁みの中から、蒼ざめて髪をふり亂した若い百姓が、私たちの方へ向けて飛び出した。

「何事だ？——どこへ駆け出して行くのだ？」

とアルダリオン・ミハイルイチは訊ねた。

百姓はすぐに足を止めた。

「あゝ、旦那さま、アルダリオン・ミハイルイチ、大變なことで！」

「どうしたと云ふんだ？」

「マクシムが、旦那、伐り樹に敷かれたんで。」

「どうしてそんな事が？：請負師のマクシムかい？」

「さうなんで、旦那。わつし等が秦皮木の樹を伐つてみると、あの人が立つてそれを見てゐたんです。暫くさうして立つてゐたが、やがて水を飲み井戸の方へ歩いて行きました。きつと咽喉が乾いたんでせう。その時、不意に秦皮木がめき／＼云ひ出して、いきなりあの人の眞上へ倒れて行くぢやありませんか。わつし等は、逃げる、逃げる、逃げる、つて喚いたんですが：脇の方へ避けなけりやならんところを、あわてて前へ眞つ直ぐに駆け出したんで：全く溜えてしまつたものとみえますよ。たうとう秦皮木の上枝がおつかぶさつちまつて。どうしてこんなに早く倒れた事やら——まるで合點が行きません：大方蕊が腐つてでもゐたんでせうよ。」

「え、それでマクシムは殺られちやつたのか？」

「さうなんで、旦那。」

「穢切れたのかい？」

「いんえ、旦那、まだ息は通つてゐますがね、何しろ手も足も折れちまつたもんですから。わつしはこれから醫者のセルエルストイチを呼びに一走り行つて來るところなんで。」

アルダリオン・ミハイルイチは小頭にも馬を走らして、セルエルストイチを迎ひに村へ行つて來るやうに云ひつけると、自分は伐り出し場の方へ馬を急がした：私はその後につゞいた。

行つて見ると、不運なマクシムは地べたに横はつてゐた。十人ばかりの百姓がその周りに佇んでゐる。私たちは馬を下りた。彼は殆んど唸り聲を立てないで、とき／＼眼を大きく見開き、びつくりしたやうに四邊を見廻しながら、紫色になつた唇を噛んでゐるばかり：頸はがたく／＼

と顔へ髪の毛は額に粘りつき、胸は不規則に波打つてゐた。まさに死に垂んとしてゐるのだ。若い菩提樹の淡い影が靜かに彼の顔を滑つてゐる。

私たちは屈みこんで見た。彼はアルダリオン・ミハイルイチの顔を見分けた。

「旦那、やうやく聞きとれるほどの聲で、彼は云ひ出した。「坊さんを：むけえに：やつてくませえ。：神さまが：罰をおあてになつたのだ。：足も、手も、すつかり滅茶苦茶に折れちやつた。：今日は日曜日なのに。：わしは：わしは：ほれ。：若いもんらに暇をやらなかつたもんだから。」

彼は云ひ止めた。息がつかつたのである。

「それから、わしの金は：女房に：女房に渡して下せえ。：誰に：：幾ら借りがあるか：：

そら、このオニシムが知つてるから。：それを差引いて。：」

「いま醫者を迎へにやつたよ、マクシム、」と私の隣人は云つた。「まだ死ぬとは限つてゐないからね。」

彼は眼を開けようとして、無理に眉と臉を吊り上げた。

「いゝや、もう駄目です。それ。：それ、やつて來る、死神が、それ。：皆の衆、もし何か悪い事があつたら、赦してくんろよ。：」

「神様が赦して下さるよ、マクシム・アンドレキッチ。」と百姓たちは曇つた聲で一齊に云つて、帽子をとつた。「お前さんもわし等を赦しておくんなせえ。」

彼は突然自棄に頭をふつて、惱まし氣に胸を突き上げたが、ぐつたりと背を落とした。

「それにしても、こゝでこのまゝ死なしちやいけない。」とアルダリオン・ミハイルイチは叫ん

だ。

「皆の者、あそこの馬車から箆を取つて来てくれ。病院へ擔ぎ込むんだ。」

「百姓が二人ばかり馬車の方へ飛んで行つた。」「わしは、スイチョーフカの……エフィームから……」と、死にかゝつてゐるマクシームが廻らぬ舌で呟き出した。「昨日、馬を買つて……手附だけ打つておいた……だから、あの馬はわしの物だ……あれもやはり……女房に……」

一同は彼を箆の上に移しはじめた……彼は傷を負つた鳥のやうに全身をびく／＼顫はせたとおふと、そのまゝまづ直ぐに伸びてしまつた。

「死んぢまつた。」と百姓らは呟いた。

私たちは無言のまゝ、馬に乗つてその場をはなれた。

不運なマクシームの死は私を物思ひに沈ませた。露西亞の百姓は驚くばかりの死に方をする！死に直面した彼らの心境は、無關心とか、鈍重とかいふ言葉では呼べない。彼らはまるで儀式でも行ふやうに、冷やかに、無造作に死んで行くのだ。

四五年前のこと、村のもう一人の隣人に抱へられてゐた百姓が、乾燥小屋で大火傷をした（もし通りかゝつた町の者が半死半生の彼を引つ張り出してやらなかつたら、そのまゝ小屋の中で焼け死んでしまつた事だらう。その町の男は水桶にぎんぷり浸つて、まつしぐらに走つた勢ひで、火を吹いてゐる庇の下の戸を突き破つたのである）。私はその百姓の家へ見舞ひに寄つて見た。小舎の中はうす暗くて、煙つぽく、息苦しかつた。私は「病人はどこにゐるのか。」と訊ねた。「ほれ、あそこの臥煖爐の上に居りますよ、旦那さま。」悄氣返つた女房が歌ふやうに節をつけて答へた。

傍へよつて見ると百姓は毛裘を引つ被つて、重々しく息をしながら臥てゐる。「どうだね、氣分は？」病人は煖爐の上でこそ／＼身を動かし、起き上がらうとした。しかも身體ぢゆう火傷をして、死に瀕してゐるのである。「そのまゝに、そのまゝに、ぢつと寝てゐなさい……で、どうだね？　どんな具合だね？」「そりや悪いにきまつとりますよ。」と云ふ。「痛むかね？」と訊くと黙つてゐる。「何か欲しいものはない？」やはり黙つてゐる。「茶でも届けてやらうかね？」「いりません。」私は側を離れて、床几に腰を下ろした。十五分、三十分と坐り續けてゐた。——小舎の中は墓場のやうに深い沈黙が閉ざしてゐる。片隅にかけてある聖像の下のテーブルでは、五つばかりの女の子が隠れるやうにしてパンを食べてゐると、時々母親が威かすやうな眞似をする。入口の廊下では、人の足音やかたこといふ物音や、話し聲などが聞こえる。兄嫁がキヤベツを刻んでゐるのだ。「おい、アクシニヤ！」たうとう、病人が口を切つた。「何だね？」「クワスをくれ。」「アクシニヤは、病人にクワスをやつた。又もや元の沈黙に返る。私はひそ／＼聲で訊ねた。「聖餐を頂かしてやつたのかね？」「やりました。」あゝ、してみると、何も彼も手順は出來て、今はもう死を待つよりほかないのである。私はたまらなくなつて、外へ出た……

それからもう一つ思ひ出されるのは、ある時赤山村の病院へ、熱心な銃獵家で醫者の助手をやつてゐるカピトンといふ知り合ひを訪ねて行つた時の事である。

この病院は、もと地主邸の離家なのであつた。これを病院にしたのは當の女地主で、それもただ入口の扉の上に「クラスノゴリエ病院」と白い文字で書いた空色の板を打ちつけさせ、入院患者の名を記入させる赤い名簿を、カピトンに手づから渡しただけの話である。この名簿の第一頁には、慈善家の女地主のところまで食客しながら何かの御用をも足してゐるやうな連中の一人が、

次のやうな詩を書き込んでみた。

„Dans ces beaux lieux, où règne l'allégresse
Ce temple fut ouvert par la Beauté;
De vos seigneurs admirez la tendresse,
Bons habitants de Krasnogorié!”

歡び宿るこの麗はしの里に

美し君この宮殿を造り給ひぬ

女あるじの優しき心を讃へかし

クラスノゴリエに住む善き人々よ!

その下に誰か他の人が書き添へて曰く——

„Et moi aussi j'aime la nature! Jean Kobylatnikoff”

われもまた自然を愛す!

ジャン・コブイリヤトニコフ

助手は自腹を切つて、寢臺を六つ買ひ込み、神の赤子である人々を治療してやらうと、心に念
じながら仕事にかゝつた。この男の外に、病院にはもう二人の男が働いてゐた。頭の變になつた
彫刻師のパーヴェルと、賄ひ役を勤めてゐるメリキトリーサといふ手の不自由な百姓女とであつ

た。この二人は藥を調合したり、藥草を乾したり、浸劑にしたりしたが、また疴性な病人を取り
しづめるのもやはり彼らの役であつた。頭の變な彫刻師は見たところ氣難かしさうな男で、口數
が少なかつた。毎晩のやうに『美しきヴィナスの歌』を歌つて、通り掛かりの人さへ見れば、疾
うの昔に死んでしまつたマラニヤとかいふ娘と夫婦にしてくれと、強請るのであつた。手の不自
由な百姓女は彼を打ち打擲して、七面鳥の番をさせた。さて或る時、私は助手のカピトンのとこ
ろへ訪ねて行つた。私達は最近つれ立つて行つた獵の話をしてゐたが、その時ふいに一臺の百姓
馬車が構内へ乗り込んで來た。車には粉挽場でなければ見られないやうな、馬鹿々々しく肥つた
葦毛の馬が駕けてある。乗つてゐるのは新しい外套を着込み、染め分けかと思える鬚を生や
した、肉付きのいゝ百姓であつた。『やあ、ワシリー・ドミートリッチ、さあ、どうぞ……』と
カピトンは窓の中から聲をかけて、『リュボシノの粉屋なんで、』と私に囁いた。百姓は唸りながら
馬車から降りて、助手の部屋へ入つて來ると、眼を走らせて聖像を探し、十字を切つた。『とき
に、どうです、ワシリー・ドミートリッチ、何か變つた話はありませんか?……だが、どうや
ら具合が悪いやうですな、顔色がよくない。』『さうなんで、カピトン・チモフェーイッチ、どう
もなんだか具合が悪くつて。』『一體どうしたんです。』『實はかういふわけなんで、カピトン・チ
モフェーイッチ。先だつて町で挽臼を買ひましてな、まあ、それを家へ持つて歸つたのはいゝ
が、さて車から下ろしに掛かつたところ、どうやら無理をしすぎたせゐるか、腹ん中がなんだか千切
れでもした様に、變にぎゆつとなりましてな……さあ、それからといふもの、どうも身體の調子
が悪い。今日などは格別變なんで。』『ふん』とカピトンは云つて、嗅ぎ煙草を嗅いだ。『してみる
と脱陽だな。して、それは、大分前のことかね?』『さやう、今日で十日目なんで。』『十日目?』

(助手は齒の間から息を吸ひ込んで首を捻つた。『一つ診せて貰はうかな。——さあ、ワシーリイ・ドミートリツチ、暫くたつてから口を切つた。』どうもお氣の毒だけれど、これは困つた事になつたもので、手輕な病氣ぢやありませんぞ。とにかく私の所へ入院しなさい。出来るだけの手は盡くして上げるから。尤も、お請け合ひは出来ませんがね。』はあ、そんなにまで悪いですかね?』と粉屋はびつくりして呟いた。『さやう、ワシーリイ・ドミートリツチ、よくないね。私の所へ來るのがもう二日も早かつたら、なんのことはない、跡かたもないやうになほして上げたんだが、今ぢや炎症を起こしちまつてるんでね。全く悪くしたら、丹毒にならんとも限らん。』まさか、そんな筈はねえですよ、カピトン・チモフェーイツチ。『嘘は云はないよ。』一體どうしてそんな事が?』助手はひよいと肩をすくめた。『こんなつまらん事で死ななけりやならねえのかね?』さうとは云はないけれど……とにかく入院しなさい。『百姓はとつおいつ考へ込んで、床板をちつと賸めてゐたが、やがて私達の顔を見上げて、頭を掻き、帽子に手をかけた。』お前さん、どこへ行くのかね、ワシーリイ・ドミートリツチ?』どこへつて? そりや分かりきつてゐる。まさか——それほど悪いんなら、家へ歸らなけりや。さうとしてみれば、ちやんと後の始末もしておかなけりやならねえし。』『そんな事したら、自分で自分の身體を滅茶々々にしてしまふやうなもんだよ、ワシーリイ・ドミートリツチ、とんでもない。どうして、こゝまでやつて來られたか、それさへ不思議に思つてゐる位なのに! 入院しなさい。』いや、あんた、カピトン・チモフェーイツチ、どうせ死ぬなら、家で死んだ方がましだからね。こんな所で死んぢまつたら、家の方はどんな事になるか分かつたもんぢやねえ。』『病氣がどんな風に進むか、そりやまだ分からないよ、ワシーリイ・ドミートリツチ……、無論、危い事は實に危い、そりや云ふまでもない

事だ……だからこそ、つまり入院しなくちやならないのさ。』(百姓は頭を振つた。『いんや、カピトン・チモフェーイツチ、入院なんかするこつちやねえ……まあ、處方でも書いておくんなさい。』)『藥だけぢやどうにもならないよ。』『入院なんかしないと云ふのに。』『ぢやまあ好きなやうに……たゞ、後で人を恨むのだけは御免だぜ!』

助手は手帳から紙を一枚千切つて、處方を書いて與へ、なほ色々養生の注意をしてやつた。百姓はその紙切れを受け取つて、カピトンに五十コペイカ銀貨を渡し、外へ出て馬車に乗り込んだ。『では、さよなら、カピトン・チモフェーイツチ、どうか悪くお思ひにならねえで、まさかの事があつたら、後に残つた子供らの事を、よろしく……。』『おい、ワシーリイ、入院しなよ!』百姓はたゞ頭を振りしただけで、馬を手綱でびしりと打ち、そのまゝ庭を出て行つた。私は通りまで出て、その後を見送つた。道はぬかつて、でこぼこだらけであつた。粉屋はゆつくりと用心深く巧者に馬を馱しながら、會ふ人毎に會釋してゐた……それから四日目に彼は、あの世の人となつた。

一體に露西亞人は驚くべき死に方をする。今は世になき多くの人々が私の心に浮かんで來る。アゼニール・ソロコウモフ、私はゆくりなく君のことを想ひ起こす。大學を途中で退學した私の古い友達、立派な氣高い心を持つた人物! 私は今更のやうに、君の縁がかつた肺病やみらし顔や、君のうすい亞麻色の髪や、君の愼ましい微笑み、君の感激に溢れた眼ざし、君のひよる長い手足を眼の當たり見るやうな氣がする。君の弱々しい、やさしい聲を耳に聴くやうな想ひがする。君は露西亞の地主グール・クルピャニコフの邸に住んで、その子のフォーファとジョージヤに露西亞語の讀み書きや地理歴史を教へ、主人グールの不快な洒落や、侍僕頭の人を馬鹿にし

たやうなお愛想や意地の悪い腕白どもの下品な悪戯をも、ちつと根氣よく我慢してゐた。無論苦い笑ひ位は洩らすけれど、不平がましい事も云はず、無聊に苦しんでゐる夫人の氣紛れな要求をも満たしてゐた。その代り、日が暮れて夕食が済むと、君はどんなに肩の荷を下ろして、のびのびとしたことだらう。やつとの事で、すべての義務や仕事から解放された君は、窓際に坐つても思はし氣にパイプをくゆらすか、でなければ、見る影もなく脂じみた厚い雑誌の頁を、貪るやうにめくつたものである。それは、君と同じやうに不仕合せな宿なしの測量師が、町から持つて来てくれたものだ！あの頃はあらゆる詩、あらゆる小説が、どんなに君の心を捕へたことか、どんなに易々と涙が君の眼に宿つたことか、どんなに満ち足りた様子で君は笑ひ興じたことか、どんなに純真な人間愛と、すべての善良なるものに對する氣高い同情の念が、君の幼兒の如く無垢な魂を満たしてゐたことか！本當の事を云へば、君は人並みすぐれた才智を持つてゐる方ではなかつた。天は君に優れた記憶力をも勤勉の精神をも恵みはしなかつた。大學時代の君は一番の劣等生と見做されてゐた。講義を聞きながら居眠りするし、試験の時には泰然と沈黙を守つてゐた。しかし、友だちの進歩や成功を見聞きすると、眼を喜びに輝かせ、息をはずませたのは誰であらう？——他ならぬアゼニールであつた。友だちの高遠なる使命を盲目的に信じてゐたのは誰であつたか、さも誇らしげに友を賞め讃へ、敢然として彼らを辯護したのは誰であつたか？羨望も自尊の念も知らず、虚私恬淡に己れを犠牲にし、彼の靴の紐を解くにも値ひしないやうな人々に喜んで服従したのは誰であつたか。それはすべて君なのだ、何も彼も君なのだ、なつかしき我がアゼニールよ！忘れもしない、君は「住み込み」の家庭教師として都を去る時、如何に斷腸の想ひを抱きながら、友だちに別れを告げたことか。恐らく不吉な豫感がそのとき、君を

苦しめてゐたのだらう。案の定、田舎住まいは思はしくなかつた。田舎に籠つてゐると、恭々しく耳を傾けて説を聞くべき人もなければ、驚嘆を捧げるべき人も、愛すべき人もなかつた。田舎地主も、教養のある貴族地主も、君をたゞの教師として取り扱ひ、ある者は不躰な、ある者は無視の態度をとつた。その上、君は風采で買はれるやうな人でもなかつた。臆氣づいて顔を赧らめ、汗を滲ませながら、吃りくもものを云ふ。そればかりか田舎の綺麗な空氣を吸つても、君の健康はよくならなかつた。何といふ傷ましき、君は蠟燭のやうに溶け細つて行つた！なるほど君の小部屋は庭に面して、野ざくら、林檎、菩提樹などが、君の卓や、インキ壺や、本の上に軽い花びらを散らしてゐた。壁には水色をした絹の時計入れが懸かつてゐた。それは、亞麻色の毛を渦卷かせ、青い眼をした人のよい多感な獨逸人の女家庭教師が、別れのしるしに君に贈つたものである。時折り昔ながらの親友がモスクワから訪ねて来て、他人の詩や自作の詩で、君を感激させはした。けれど、孤獨な身の上、教師といふ堪へ難い奴隷に等しい境遇、そこから脱れ出るよしもない侘びしき、果てしなく續く秋から冬の長さ、離れようともせぬ執拗な病ひ。あゝ、不幸なるアゼニールよ！

私はソロコウモフを、亡くなる少し前に訪ねて行つた。彼はもう殆んど歩けなかつた。地主のグール・クルピヤニコフは、別に追ひ出しもしなかつたが、もう給金は寄越さなくなつて、ジョージャのためには別な教師を雇ひ入れたのである。フォーファは幼年學校に入れられた。アゼニールは窓際に据ゑたヴォルテール型の眩椅子に腰をかけてゐた。麗かな日和で、輝かしい秋空は、葉を振るつた菩提樹竝木の濃い蒼色の梢高く、朗らかに蒼み渡つてゐた。そここゝに散り残つた輝かしい金色の葉が微かに揺れて、かさこそと囁いてゐる。朝の寒さに凍みた土は陽ざし

に溶けて、汗ばんだやうに見える。斜めに射して来る太陽の赤味を帯びた光線は、蒼ざめた草の上をすべつてゐる。空中には物の爆ぜるような音が微かに感じられ、庭の方では人夫たちの話し聲がはつきり澄んで聞こえて来る。アゼニールは大學時代のブハラ織の部屋着を着てゐた。緑いろの首巻きが、恐ろしいほど瘦せ衰へた彼の顔に、死人のやうな影を投げてゐた。私を見るとひどく喜んで、手をさしのべ、いきなり話しかけたが、すぐに咳込むのであつた。私は彼を落ちつかせてその傍に坐つた。アゼニールの膝の上には、コリツォフの詩を克明に寫しとつた手帖がのせられてゐた。彼は微笑を含みながら、その表紙を軽くこつくと叩いた。『これこそ詩人だね。』と漸く咳を抑へつけながら彼は呟いた。そして、やつと聴きとれる位の聲で朗讀をはじめた。

あゝ鷹は双の翼を

縛しめられしか?

行くべき道を悉く

閉ざされたるか?

私は彼を押しとめた。醫者は話を禁じてゐたのである。私はどうしたら彼を喜ばせることが出来るか、ちやんと呑み込んでゐた。ソロコウモフは、學術といふものに所謂「歩調を合はす」などといふことを曾てしなかつたが、現代の大學者たちがどういふところまで到達したか、といふことには興味を持つてゐた。以前もどこかの隅で友達を掴まへて、いろ／＼根掘り葉掘り始め

たものである。耳を傾けて、驚嘆しながら、相手の言葉を鵜呑みにして、後でそれを得々と吹聴するのであつた。とりわけ、彼は獨逸哲學に非常な興味を持つてゐた。私がヘーゲルの講義を始める時（これはお察しの通り、遠い昔の話である）、アゼニールは合點々々といふやうに頭を振つて、眉を上げ微笑を含み、『なるほど……あゝ！素敵だ、素敵だ……』と囁いたものである。死にかゝつてゐて、定まる宿もなく、人から見放された哀れた男の示す子供らしい好奇心は、涙の出るほど私を感動させた。ことわつておかなければならないが、アゼニールは普通の肺病患者と違つて、自分の病氣に瞞されるやうなことがなかつた……しかも、どうであらう? 彼は嘆息もしなければ、傷心もせず、たゞの一度なりとも自分の境涯について、愚痴らしい言葉を囁にも出したことがない……

やがて元氣を奮ひ立てながら、彼はモスクワのこと、友だちのこと、ブーシキンのこと、劇のこと、露西亞文學のことなどを語り始めた。學生時代の素朴な宴會、仲間同志の火の出るやうな論争などを思ひ浮かべて、この世を去つた二三の友だちの名を哀惜に堪へぬやうな調子で口にした。『ダーシャ覚えてゐる?』と彼は最後に云ひ添へた。『あれこそ美しい氣立ての人だつたね! あれこそ珠玉のやうな魂の持ち主だつた! あの人ほど僕を愛してくれただか!……今はどうしてゐるだらう? きつと、瘦せ衰へて、やつれ切つてゐるだらう、可哀さうな女!——私は病人の幻を破るに忍びなかつた。——實際のところ、彼の憧れてゐるダーシャは横ぶとり肥つて、商人のコンダチコフ兄弟などと付き合ひ、紅白粉をつけて、黄色い聲を立てたり、悪態をついたりしてゐるのだが、そんな事を彼が知つたつて、なんにもならないではないか。』

『それにしても、』と私は彼の病み呆けた顔を眺めながら考へた。『こゝからこの男を連れ出す事

は出来ないものかしら？ 事によつたら、まだ全治の見込みがあるかも知れない……」けれどもアエニールは、私の提案を皆まで云はせなかつた。

「いや、君、お志は有難いが、」と彼は答へた。「どうせどこで死ぬのも同じ事だよ。どつちみち冬まで生きられないんだからね……みすく、餘計な迷惑を人にかけてたつて始まらないぢやないか？ 僕はこの家に馴れてしまつたんでね。なる程、この主人夫婦は……」

「意地わるでもないふのかい？」と、私はすかさず問ひ返した。

「いや、意地わるぢやない！ たゞ木偶の坊みたいなのさ。もつとも、あの人たちの苦情は云へないよ。それから近所にもいろんな人がゐてね、カサートキンといふ地主に娘が一人ある、教育があつて、優しくつて、とても親切な娘さんなのだ……高ぶりもしないし……」

ソロコウモフはまた咳をした。

「しかし、何だつて構はないよ。」と彼は息を繼いで、かう言葉を續けた。「たゞ煙草さへ一服喫まして貰へたら……あゝ、一服やらない中は死なうにも死にきれない！」と彼は狡さうに片眼をしばたゝいて、附け足した。「有難いことには、もう可成り永生きしたよ。いゝ人たちとも付き合つたし……」

「だが、君、せめて身内の人に手紙でも書いたら。」と私は遮つた。

「身内の者に手紙をやつて何になるのだ？ 別段なんの力になつてくれるわけでもあるまいし、死んだら、やがて便りが届くだらうよ。まあ、こんな話をしたつて始まらないさ……それよか、君が外國で見て來た事でも話してくれないか？」

私は話を始めた。彼はまるで喰ひ入るやうに私の顔を覗めた。夕暮れに、私は彼の許を辭し去

つたが、十日ばかりして、クルピヤニコフ氏から次のやうな手紙を受け取つた。

『拜啓、陳れば兼ねて拙宅に寄留致し居り候貴下の友人、大學生アエニール・ソロコウモフ氏のこと、一昨々日午後二時永眠仕り候。本日、當村教區内の教會にて、費用小生持ちとして埋葬の式を営み申候。生前の遺言に依り、別封の書物及び手帖御手許まで御届申上候。所持の金子二十ルーブリ五十コペイカは、其他の遺品と共にそれ／＼親戚へ送達致すべく候。御友人は臨終の際まで意識明瞭にて、殆んど無情冷淡とすら申すべく、拙宅家族一同最後の別れを告げたる時すら、何ら哀惜の色を浮かべざりし程に御座候。荆妻クレオパトラ・アレクサンドロヴナよりも貴下へ宜敷と申し出候。御友人の逝去は、申す迄もなく荆妻に深甚なる感動を與へ申候。拙者は御蔭を以つて頑健に罷り在り候間、懾り乍ら御放念下され度候 頓首』

G・クルピヤニコフ

まだかういふ例はいくらでも頭に浮かんで來るけれど、皆がみな語り盡くせるものでない。もう一つだけでお終ひにしよう。

ある年とつた女地主が、私の居合はせたとこで息を引き取らうとしてゐた。僧がこの老婆に告別の祈禱を讀み始めた。すると不意に、病人が全く息を引きとつてゐるのに氣づいて、大急ぎで彼女に十字架を渡した。女地主は不満さうに身をひいた。『何をそんなにお急ぎなさる、お坊さま。』と彼女はこはばつた舌で云つた。『間に合ひますよ……』彼女は十字架に接吻して、枕の下へ手をさし込まうとしたが、そのまゝ最後の息を吐いた。枕の下には一ルーブリの銀貨が置いてあつた。彼女は自分の臨終の祈禱をしてくれた僧に、それをお布施に上げようと思つたのである……

いや、露西亞人は實に驚くべき死に方をする。

歌うたひ

コロトフカといふ小さな村は、曾てはしやき／＼した強かな性質のために近在で「因業屋」と綽名されてゐた（本名はもう忘れられてしまつた）女地主のものであつたが、今ではペテルブルグの或る獨逸人の所有に移つてゐる。村は赤裸の丘の斜面にあるが、恐ろしい谿がその丘を、頂きから麓まで二つに斷ち切つてゐる。雨風に掘り掘り洗ひ流されて、底知れぬ深淵のやうに大きな口をあけ、村の往來の眞ん中を廻り走つてゐるので、川よりもつと始末が悪く——川ならば幾らなんでも橋を架けることが出来る——貧しい村の兩側を、すつかり隔ててしまつてゐる。幾本かの瘦せひよろけた楊が臆病らしく左右の崖に生え下がり、黄色く乾き切つて眞鍮のやうな肌合ひをした一番の底には、粘土質の大きな平つたい岩が幾つも横たはつてゐる。云ふ迄もなく、あまり愉快な眺めではないが、それでも近在の人は誰でもコロトフカへ行く道をよく知つてゐて、みんなよく好んでこゝへやつて來るのである。

この谿が狭い裂け目から始まつて、だん／＼に擴がつて行かうといふ所から數歩離れたほとりに、小さい四角な小舎が立つてゐる。ほかの家とは懸け離れて、たつた一軒ぼつんと立つてゐるのだ。屋根は藁葺で、煙突が一本聳え、たつた一つきりの窓が、鋭い目のやうに谿の方へ向いてゐる。冬の夜など、内に灯の點つたこの窓は、どろりと凍つた霧の中に遠く見渡されて、通りかかる多くの百姓の眼に導きの星かとはかり明滅する。小舎の戸の上には水色の板が打ちつけられてゐる。この小舎は「愉快軒」といふ居酒屋なのである。この居酒屋の酒は恐らく定價より安い

譯ではあるまいが、界限のこれに類した家よりはずつと客足が多い。それといふのも亭主のニコライ・イワーヌイチの人徳によるのである。

ニコライ・イワーヌイチは、かつてはすらりとして、髪の毛の房々と紆つた、紅顔の若者であつたけれど、今では人並み外れて肥え太り、狡い中にも人の好きさうな小さい目をして、脂ぎつた額に絲のやうな皺を幾筋か引いてある白髪の老爺で、もう二十年以上もコロトフカに暮らしてゐる。ニコライ・イワーヌイチは居酒屋の亭主の御多分に洩れず、敏捷い目端のよく利く男であつた。別段、愛嬌があるわけでもなく、口まめな方でもないけれど、客を店へ引きつけて放さないだけの腕を持つてゐる。お客の方にしてみると、のつそりした亭主がちら／＼と油断のない眼を配つてはゐるものの、そこにまた落ちつきもあれば愛想も籠つてゐるので、この人の賣臺の前に坐るのが、何となく、氣持ちなのである。彼は中々常識があつて、地主の生活でも百姓や町人の暮らしでも、實によく知り抜いてゐる。面倒なことが持ち上がった時などは、相當に物の分かつた口添へも、すれば出来るのであるけれども、用心ぶかい利己主義な人間だけに、なるべく關り合ひになるまいとする。たゞ店のお客——それも自分の大事にしてゐるお客に限つて、何氣なく口から出たといつた風に遠廻しに匂はせて、取るべき道を教へてやる位が關の山である。彼はまたロシヤ人に取つて重要なことや興味のあることなら、何でも一通りの心得がある。馬のことであらうと、その他の家畜類のことであらうと、森林のこと、煉瓦のこと、瀬戸物、革製品、それから歌、踊り、何でも心得てゐる。客のない時には、大抵いつも小舎の戸口の前に細い足を組んで、綿袋然と坐つたまゝ、通りがかりの者と一々愛想よく言葉を投げ交はしてゐる。彼はこれまでの生涯に色々なことを見て來た。彼のところへ「清酒」を買ひに來た小地主で、今はこの

世になくなつた連中も、兩手の指を折つてもまだ足らぬ位である。百露里四方の間に起るることなら、何でも知らないことなしたが、決してそれを口から出さず、どんなに爛眼な駐在所の警部でさへ、夢にも知らぬことを承知しながらそんな様子を素振りにさへ見せない。一人で胸に疊んで、えへら／＼笑ひながら、賣臺のコップをあちこち動かしてゐるのである。近所の人たちも彼を尊敬して、郡内でも一番身分の高い地主で、文官ながら閣下と云はれるシチュルス・ベチュンコも、彼の家の前を通り過ぎる度に、いつも昂らずにお辭儀をする。ニコライ・イワーヌイチはなかなか勢力家で、名うての馬泥棒が知り合ひの家から馬を盗み出したとき、それを元へ返さしたり、隣り村の百姓たちが、新らしく來た支配人を受けつけないといふのを納得させたり、萬事さういつた風である。とはいふものの、彼がそのやうなことをしたのも、正義に對する愛だの、他人のために盡くさうとする眞心から出たものと考へてはならない——どうしてどうして！ 彼はたゞ自分の安寧を破る虞れのあるものを、何ごとによらず豫防しようとして一生懸命になつてゐるに過ぎない。ニコライ・イワーヌイチには女房もあり、子供もある。女房は口の毒者な、鼻の尖つた、油断のならない眼つきをした町女で、この頃は亭主と同じやうに幾らか身體がずつしりして來た。亭主は何事につけても女房を信じきつて、金藏の鍵まで任せてゐるのである。酔つ拂つて騒ぐ連中も、この女房には恐れをなしてゐるし、こつちもさういふ手合ひを好かない。あまり儲けにならないで、騒々しいばかりだからである。どちらかと云へば、氣むづかしさうに黙つてゐる連中の方が蟲が好く。ニコライ・イワーヌイチの子供たちはまだ小さい。上の子供らは次ぎ次ぎと死んで行つたが、残つたのは兩親にそつくりで、この丈夫な子供らの賢さうな顔は、見てゐてもこゝろ楽しい位である。

たまらないほど暑い七月の日であつた。私はのろ／＼と足を引きずりながら、犬をつれてコロトフカの谿つたひに「愉快軒」の方へ登つて行つた。太陽はます／＼猛威を逞しくしてやるぞといはんばかりに中空に燃え熾つて、執拗に燬きつけ、照りつけるのであつた。空気が萬遍なく埃を吸ひ込んでゐて息苦しい。日光に直射されて羽をつや／＼しく輝かしてゐる白嘴鴉や大鴉は、嘴を開けて、さながら隣れみを乞ふやうに、しよんぼりと、通行の人々を眺めてゐた。たゞ雀ばかりは悄氣もせず、身體中の羽を膨ませながら、前にも増して勢ひよく囀り立て、塀の上で喧嘩をしてゐるかと思ふと、埃つばい道から仲よく一齊に飛び立つて、灰色の雲かとばかり大麻畑の上を翔け廻る。私は咽喉が渴いて堪らなかつた。その近くには水がなかつたのである。曠野地方の村は大抵さうだが、コロトフカにも泉や井戸がないので、百姓たちは池から汲んで來た薄氣味の悪い濁り水を飲んでゐる……しかし、こんな胸の悪くなるやうな、牛馬の飲み代みたいなものを、誰が水だなどと云ふ者があらう？ 私はニコライ・イワーヌイチの所で、麥酒かクワスを一杯もらはうと思つてゐた。

正直に云ふと、コロトフカの村は年中どんな時でも、人の目を愉しませるやうな景色を現ずることがない。特に、半ば崩れかゝつた蒼色の屋根々々、この深い谿、瘠せた脚の長い雞が心細げにうろつき廻つてゐる焦けた埃だらけの牧場、地主邸の跡とは名ばかりで、蕁麻や高草や苦蓬などの茂みに包まれ、窓の代りに穴を幾つも明けてゐる灰色の泥楊材の骨組、半ば乾いた泥土と一方に傾いた堤に縁どられ、鷺鳥の羽を一面に泛かべた、眞つ黒い沸き立つてでもゐるやうな池、堤の畔りの細かく踏み碎かれて灰のやうになつた土の上で、息も絶え／＼に喘ぎ、暑さに噎をしながら、悲しげに互ひに身體をすり寄せて、遂にいつかこの堪へ難い暑さが過ぎて行くのを待ち

兼ねるやうに、しよんぼりと我慢しながら、出来るだけ低く首を垂れてゐる羊の群——すべてかういふものが、七月の白熱した太陽の光線を一樣に遠慮會釋なく浴びせかけられる時、この村の眺めは一しほ物悲しさをそよるのである。疲れた足をとぼ／＼と引き摺りながら、ニコライ・イワーヌイチの家へ近づくにつれて、私はいつもの如く村の子供らを驚かし、犬どもを憤慨させた。子供らは緊張しきつた無意味な眼つきでこちらを覗めてゐるし、犬は腸がすつかり千切れはせぬかと思はれるほど、嘎れた毒々しい聲で吠え立てたが、後で苦しさに咳をしたり、息を切らしたりしてゐた。と、不意に居酒屋の閨口のところへ、帽子も被らず、毛織の外套を着て、低いところに水色の帯をしめてゐる背の高い百姓が立ち現はれた。見たところ邸づとめの男らしいが、かさ／＼に萎びた顔の上に、濃い胡麻鹽の髪がだらしなく蓬々と立つてゐる。彼は忙しげに兩手を振りながら誰かを呼んでゐたが、どうやらその手は自分の思つたよりもずつと大きく振り廻されてゐるらしい。もう大分酒の入つてゐる様子があり／＼と見える。

「來いよ、來いつてば！」濃い眉を、やつとこきと吊り上げながら、呂律の廻らぬ調子で云ひ出した。

「おい、眼んぱち、(しきりに睨き)來ないか！ なんてお前はのろまだ、本當によ。駄目ぢやないか。みんなこゝで待つてゐるのに、お前はそんなにのろ／＼してやがる……來ないかよ。」

「あゝ、行くよ、行くよ。」といふ罅隙の入つたやうな聲が聞こえて、小舎の右手の蔭から背の低い肥つた、跛の男が現はれた。可成りさつぱりした羅紗の上衣を引っかけて、片袖だけ手を通してゐる。目深に被つてゐる高い先きの尖つた帽子は、この男の圓いふつくりした顔に、悪狡さうな、人を小馬鹿にしたやうな表情を添へてゐる。小さな黄色い眼はのべつ動いて、薄い唇には絶

えず無理に押へつけた苦しきうな微笑が漂ひ、尖つた長い鼻はまるで舵のやうに剽輕に前へ突き出してゐる。

「いま行くよ、お前。」と居酒屋の方へ跛を引いて來ながら、彼は言葉を續けた。「何でおれを呼ぶんだ？……誰がおれを待つてるい？」

「何で呼ぶかつて？」と毛織ワウリスの外套を着た男が咎めるやうに問ひ返した。「何てまあ、眼んばち、變ちきな奴だらう、え。酒屋へ來いつて呼んでるんぢやないか、それだのにお前は、まだ『何で呼ぶ？』なんて訊いてゐやがる。立派な御連中がみんなでお前を待つてらつしやるんだぞ。土耳其トルコのヤーシカ、それに暴れ旦那と、ジーズドラの請負師といふ譯さ。ヤーシカと請負師は賭けをしたんだぜ、麥酒一杯といふ決めてな……誰が勝つか、つまり、どつちが上手に歌ふかつていふんだ……分かつたかい？」

「ヤーシカが歌ふのか？」眼んばちと綽名されてゐる男が、急に元氣づいて云ひ出した。「お前はい加減なことを云つてるんぢやないか、ぼんつく？」

「いゝ加減なことなんか云ふもんか。」とぼんつくはきつとなつて答へた。「お前こそ世迷言を云つてるんぢやねえか。賭けをした以上歌ふに決まつてらあな。なんて聞拔けの根性曲がりだ、この眼んばちめ！」

「ぢや、行つて見よう、このお芽出た野郎。」と眼んばちはやり返した。

「なら、せめて俺に吻くちづけでもつけてくれる、この別嬪さん。」と、ぼんつくは大きく両手を擴げて挑みかかりながら、廻らぬ舌で云つた。

えゝつ、この厭らしいイソツプめが。」と眼んばちは肘で相手を突きのけながら、吐き出すやう

に答へた。かうして二人は頭を屈めて、低い戸口をくゞつて行つた。

私はこの話を小耳に挟んで、ひどく好奇心をそゝられた。土耳其トルコのヤーシカがこの界隈きつての歌うたひだといふ噂は、もう一度ならず私の耳に入つてゐたが、いま圖らずも、この男がもう一人の名人と競演するのを聞く巧たくまい機きに行き當つたのである。私は足を早めて、居酒屋へ入つて行つた。

恐らく私の愛讀者諸君の中で、居酒屋を覗いて見る機會を得られた人は、餘り多くないことと思ふ。しかし、私たち銃獵家仲間はどうな家へだつて寄つて見ない所はない！構造はごく簡單である。大抵は薄暗い入口の間と店の間の二つきりで、店の間は仕切り板で二分され、奥の方へは假令どんなお客でも踏み込む譯に行かない。この仕切り板には大きな縦長の口が、廣い櫛の卓の上あたりに切つてある。このテーブルが即ち賣臺で、こゝで酒を賣ることになつてゐる。仕切り板の口の眞向かひ邊に棚があつて、まだ封を切つてない大小さまゝの角壘かくりが並んでゐる。客席となつてゐる部屋の手前寄りには、幾つかの床几に、二つ三つの空き樽、それに隅テーブルがある。田舎の居酒屋は概ね中が極めてくらく、丸太組の壁に貼つてあるけばくしい彩色をした安物の木版畫も（これはどんな店にでも必ず附き物なので、殆んど見分けられない位である）。

私が「偷樂軒」に入つたとき、中にはもうかなり大勢の人が集まつてゐた。

賣臺の後ろには、いつもの如く、殆んど仕切り板の口をいつぱい寒ぐやうに、華美な更紗さらの襪は衣いを着たニコライ・イワーヌイチが立つてゐて、ふつくりした頬にだるさうな薄笑ひを浮べながら肥つた白い手で、今しがた入つて來た二人の仲よし、眼んばちとぼんつくに酒を注いでやつてゐた。その後ろの窓に近い片隅には、險のある眼つきをした女房の姿が見受けられる。部屋の眞

ん中には土耳古つぼのヤーシカが立つてゐる。裾の長い空色の南京木綿の長上衣を着た、二十二三の瘠せてすなりとした男である。狭な工場職人らしく、身體はすばぬけて丈夫といふわけには行かない風であつた。こけた頬、大きな落着きのない灰色の眼、薄い鼻の孔のびく／＼動く筋の通つた鼻、白い削いだやうな額、後ろへ撫で上げた明るい亜麻色の捲毛、大きいけれど美しい表情のある唇——かうした全體の顔だちは、この男が感じ易い熱情的な人間であることを語つてゐる。彼は恐ろしく興奮してゐた。眼を瞬き、不揃ひな息づかひで、両手を熱病やみのやうにわなわな慄はせてゐた。——なるほど、熱病に罹つてゐるのであつた。それは人の集まつてゐる前で話をしたり、歌つたりする人なら誰でも知つてゐる、あの唐突に襲つて來る不安な熱病なのである。

その脇には年の頃四十がらみの男が立つてゐた。廣い肩、秀でた顴骨、狭い額、鞆鞆風の細い眼、短く平たい鼻、四角な頤、黒くつや／＼した髪はブラシのやうに剛い。鉛色の底光を帯びた淺黒い顔や、とりわけ着白い唇の表情は、もし落ちついた物思はしげなところがなかつたら、殆んど獍猛と云つていゝ位であつたらう。彼は殆んど身じろぎもしないで、まるで軛をつけられた牡牛のやうに、のつそりと邊りを見廻すばかりであつた。模樣のない、つるりとした眞鍮釦をつけた、怪しげな、草臥れたらしいフロックを着て、古い黒の絹ハンカチを太い頸に巻きつけてゐた。この男は「暴れ旦那」と呼ばれてゐた。

その眞向かひに當たる聖像の下には、ヤーシカと競争の相手になるジースドラの請負師が腰かけてゐた。これは背の小さい、でつぶりした、三十恰好の、痘痕づらに縮れ毛の男で、圓い鼻の頭を上へ反らせ、活き／＼した蒼色の眼をして、うすい頤鬚を生やしてゐる。尻の下に両手を敷

いて無遠慮に四邊を見廻しながら、縁飾りのある粹な長靴を履いた足をぶら／＼させたり、こつこつ音を立てたりしてゐる。綿天鵞絨の襟のついた鼠羅紗の新しい薄地の外套を着てゐたが、頸の周りにきつちり釦を嵌めた眞紅の襯衣の端が、その襟もとからくつきり浮き出してゐる。

戸口の右手に當たる反對側の隅には、一人の百姓が肩に大きな穴のあいてゐる窮屈さうな古ぼけた上衣を着て、卓に向かつてゐた。陽の光りは、二つの小さな窓の埃だらけな硝子ごしに、淡い黄がかつた瀧のやうに流れ込んでゐたが、いつもこの部屋を罩めてゐる薄闇を追ひ拂ふ力はなかつた。すべての物がいかにも乏しい光りで、點々としみのやうに照らし出されるのだ。その代り、部屋の中は涼しいくらゐで、息づまるやうな暑さの感じは、この家の闕を跨ぐとともに、まるで重荷を肩から下ろしたやうに消えてしまつた。

私がやつて來たために——それは私の眼にもついた事だが——ニコライ・イワーヌイチのお客達は初め幾らか間諛つき氣味であつたが、亭主が馴染みらしく私に會釋したのを見ると、みんなひと安心して、もうそれ以上わたしたしなどに氣も止めなくなつた。私は麥酒を注文して、ぼろ／＼の上衣を着てゐる百姓のそば近く、片隅に腰をおろした。

「さあ、どうだい！」と、ぼんつくは一息にコップの麥酒を飲み干して、變に両手を振り廻しながら呶鳴つた。こんな風に両手を振り廻さなければ、一口も物が云へないらしかつた。「何をぐづぐづ待つてるんだい？ やるんなら早くやらうぢやないか。え？ ヤーシカ？」

「始めた、始めた。」とニコライ・イワーヌイチは、我が意を得たりといふやうに引き取つた。

「なら、始めるかな。」と、請負師は如何にも自信ありげな微笑を浮かべて、冷やかにかう口を切

つた。

「俺はいゝぜ。」

「俺もいゝよ。」とヤークフは興奮の體で云つた。

「さあ、始めた、二人とも始めた。」と眼んぱちが黄色い聲で喚いた。

けれど、みんな口を揃へて賛成の意を表してゐるのに、どちらも一向に始めようとしなかつた、請負師などは床几から腰を持ち上げようとしもない。——二人ながら、何やら待つてゐるらしかつた。

「始めろ！」と暴れ旦那が氣むづかしげな聲でぶつきら棒に云つた。

ヤークフはぎくつとした。請負師は起ち上がつて、帯を引き下げ、咳拂ひをした。

「だが、どつちが先きに始めるんだね？」と、彼は暴れ旦那に向かつて、やゝ聲の調子を變へながら尋ねた。こちらは太い足を踏んぱり、だぶ／＼したズボンの衣囊に逞ましい両手を肘の邊まで突つ込んで、相變らずちつと部屋の眞ん中に突つ立つてゐた。

「お前だよ、お前だよ、親方。」と、ほんつくが舌を纏らしながら口を出した。「お前の方が先きだあね。」

暴れ旦那は上目づかひにその方を見やつた。ほんつくは、細い鼠のやうな聲を立てると、どこか天井のあたりを眺めて、ひよいと肩を動かし、口を噤んだ。

「籤引きだ。」と暴れ旦那は「ことごとく句ぎりながら、「それから、賣臺の上へ壘を置いとくんだぜ。」

ニコライ・イワーヌイチは背を屈めて、ふう／＼云ひながら、床の上から壘を取り上げ、卓の

上に載せた。

暴れ旦那はじろりとヤークフを見やつて云つた。「さあ！」

ヤークフは方々の衣囊を探り廻して、ニコペイカ銅貨を取り出すと、齒でしるしを附けた。請負師は長上衣の裾をまくつて新しい革の財布を引き出し、悠々と急がずに紐をほどいて、ざらざらと小錢を掌にあけて、その中から小新らしいニコペイカ銅貨を選り出した。ほんつくは目庇が折れて取れかゝつてゐる古ぼけた帽子を差し出した。ヤークフがその中へ自分の銅錢を抛り込めば、請負師もそれに續いた。

「お前、そんな中から一つだけ取るんだ。」と暴れ旦那は眼んぱちの方を向いて云つた。

眼んぱちはさも得意さうにやりと笑つて、兩の手で帽子を受け取り、それを振り始めた。

一瞬間、深い沈黙が一座を領した。銅錢は互ひにぶつ突かり合ひながら、微かにちや／＼と鳴つた。私は注意ぶかく四邊を見廻した。誰の顔にも緊張した期待の色が泛かんでゐる。御大の暴れ旦那は軽く眼を細めてゐる。私の隣りに坐つてゐる上衣の百姓までが、物珍らしさうに頸をさし伸べてゐる。眼んぱちは帽子へ手を差し入れて、請負師の銅錢を取り出した。みんなほつと息をついた。ヤークフは顔を赤らめた。請負師は髪の毛をひと撫でした。

「ほら、俺が前から云つた通りだらう。」と、ほんつくは叫んだ。「な、俺の云つた通りだらう！」

「おい、おい、ぎやあく／＼騒ぐんでねえ！」と暴れ旦那は嚙んで吐き出すやうに云つた。「始めろ。」と請負師の方へ一つ頭を振つて言葉を續けた。

「一體どんな歌をうたつたらいいんだい？」と請負師はだん／＼興奮して來ながら訊ねた。

「何でも好きなのをやるさ。」と眼んぱちは答へた。「何でも思ひついたのを歌つたらいいわさ。」

「さうとも、好きなのをやるんだ。」とニコライ・イワーヌイチはゆつくり腕組みしながら口を添へた。「こんな時にや何も指圖を受けることはない。何でもやりたい奴をやつたらいいんだ。ただ上手に歌はなくちや駄目だぞ。後でみんなが依怙最眞のないうところを決めてやるから。」

「そりやあ、依怙最眞なんかねえとも。」と、ぼんつくは引き取つて、空になつたコップの縁を舐めた。

「皆の衆、ちよつとばかり咽喉を清めさせてくんない。」と請負師は長上衣の襟を指で弄りながら、かう云ひ出した。

「さあ、さあ、呑氣なことを云つてゐないで、始めろよ。」と暴れ旦那はきつぱり云つて、眼を伏せた。

請負師はちよつと考へてから、頭をひと振りして、前へ進み出た。ヤーコフは食ひ入るやうに彼を見つめた。

けれど、私はいよ／＼競技の描寫に取りかゝる前に、この物語の登場人物の一人々々について二三言葉を費すのも、あなたがち無益の業でもあるまいと思ふ。彼らのうちの或る者の身の上は、私が「愉快軒」で出會つた時にもう分かつてゐたし、その他の連中のことは、後でいろいろ話を聞き集めたのである。

まづ、ぼんつくから始めよう。この男の本名はエヴグラフ・イワノフといふのであるが、この界限一體にかけて「ぼんつく」としか云ふ者がいない。御當人までがこの綽名を名乗つて得々としてゐた。それ程、この名はうつりがよかつた。全くそれは、この男の安つばい、年中きよとんとしたやうな顔だちに打つてつけなのであつた。彼は放蕩に身を持ち崩した獨身者の下男であつた

が、肝腎の主人達も疾うの昔にこの男から手を引いてしまつたので、今は何一つ仕事もなく、鏝一文給金を貰つてゐなかつたけれど、それでも毎日負んぶで飲んだり騒いだりする手を知つてゐた。彼には酒や茶を振舞つてくれる知り合ひが大勢あつた。さういふ連中は何のためにそのやうなことをするのやら、自分でも分からないのであつた。といふのは、この男は決して座興になるどころか、却つて譯の分からぬことを喋り立てたり、やり切れないほど執拗く付き纏つたり、熱病やみ染みた身振り手真似をしたり、のべつ故意とらしい高笑ひを立てたりするので、みんな惱まされてゐたくらゐである。彼は歌も踊りも出来なかつた。生まれてこの方、氣の利いたことはおろか、筋道の通つたこと一つ云つた例がない。いつも「べちやくちや」喋り立てて、口から出まかせの法螺を吹く——眞正銘のぼんつくである！ そのくせ、四十露里四方どこでどんな酒盛りが開かれても、この男のひよる長い姿が、客の間をちよこまか動き廻つてゐなかつた例がない。——こんな風で、みんなが彼に馴れつこになり、どうにも仕様のない男だと諦めて、この男と一座するのを我慢してゐた。みんな彼を馬鹿扱ひにしてゐたのは云ふまでもないが、しかしこの男の突拍子もない振舞ひを抑へつけることが出来るのは、暴れ旦那一人きりであつた。

眼んばちは、ぼんつくにはまるで似ても似つかなかつた。別に人より餘計に瞬きするわけでもなかつたけれど、この眼んばちといふ綽名も、やはり彼にうつりがよかつた。周知の如く、ロシヤの農民は綽名にかけては名人なのである。私はこの男の過去をもつと詳しく知らうと骨折つてみたにも拘らず、彼の生涯には、私にとつて——恐らく他の多數の人々にとつても同様だらうが——いろいろと曖昧な節、學者風の言葉を藉りて云へば「未知の闇に没した」點があつた。彼は曾て年とつた子供の無い女地主の所で馭者を勤めてゐたが、預かつてゐた三頭立ての馬を引つば

つて逐電し、まる一年のあひだ姿を晦ましてゐたが、おほかた萍のやうな生活の詰まらなさ苦しさが性根に染みたまものと見え、自分の方から舞ひ戻つて來たけれど、もうその時に跛になつてゐた。彼は女主人の足もとに身を投げて泣きを入れ、それから幾年かといふもの、申し分のない奉公ぶり、自分の間違ひを帳消しにして貰ひ、段々と女あるじのお氣に入りとなり、遂にはすつかり信用を恢復して支配人にまで出世した。女地主の死後、どういた按配だつたかはつきりしないが、自由の身となり町人の仲間に入つて、近所の百姓達から瓜畑を借りて、したま金を拵へ、今では呑氣な暮らしになつてゐる。苦勞人で腹に一物があるけれど、悪人でもなければ善人でもなく、どちらかと云へば勘定づくで動く方、つまり人間といふものを知つて、それを利用することを心得てゐる海千山千なのである。狐のやうに狡猾で、それと同時に企業心があり、年増女のやうにお喋りのくせに、うつかり泥を吐くやうなことがなく、それでゐる他の者には必ず本音を吹かせる。尤も、かういつた質の狡い男がよくやるやうに、お芽出たい人好しの振りなどしない。それに、この男は恐らく假面など被ることが出来なかつたらう。私は今まで曾てこの男の小さな狡さうな「眼」ほど、腹の中まで見透すやうな賢さうな目を見たことがない。この目はいつだつてたゞ何げなく見てゐるのではなく、必ずそれとなくと見かう見してゐるのである。眼んぱちはその時によると二週間も三週間も、見たところ下らない仕事を考へに考へ抜いてゐるかと思へば、また時によると突然やけに思ひ切つた仕事をやつてのける。今度こそ奴め煮え湯を飲まされろぞと思つて見てゐると、案外なにもかも、とん／＼拍子に巧く行くのである。彼は幸運兒で、自分でも自分の運勢を信じ、前兆などといふものを喧ましく云ふ。一體がなか／＼の擔ぎやである。彼は誰のことであらうと屁とも思つてゐないので、人に好かれこそしないけれど、尊敬は

されてゐる。家族は天にも地にも息子がたつた一人きりで、これがまた眼に入れても痛くないほど可愛いのである。かういふ父親の仕つけを受けた子だから、行く／＼は大したものになるだらう。『眼んぱちの子は親父生き寫しだ。』と、今からもう年寄り達は夏の夕方など築土(雪よけのため小屋の周りに盛り上げた土)の上に坐つて、四方山の話をしながら、小聲にこんな噂をしてゐるほどである。みんなもその意味を呑み込んで、もうそれ以上は一言も附け足さうとしない。

土耳其つぼのヤシカと請負人のことは、何もくだ／＼しく述べ立てるがものはない。本當に倅虜になつた土耳其女の腹から生まれたがために、土耳其人と綽名されてゐるヤシコフは、この言葉の完全な意味での藝術家魂を持つてゐたが、職業から云へば、ある商人の經營してゐる紙漉工場の汲み出し人夫であつた。さて請負人はどうかといふと、この男の身の上は、正直なところ頭分からずじまひである。私の睨んだところでは、抜け目のない凄腕の市の町人らしい。ところで、暴れ旦那のことは、もう少し詳しく物語る値打ちがある。

この男の様子を見て最初に受ける印象は、何となく粗野で、重苦しい、壓倒的な力に充ちてゐるといふ感じであつた。身體つきは無細工で、この邊で俗に云ふ「ひん曲がり」であつたか、それでも彼の姿からは、殺しても死なぬやうな健康の氣が發散してゐた。そして、不思議な事ではあるが——その熊のやうな様子には一種特別な優美さがなくてもなかつた。それは自分の偉力を信じ切つてゐる、この上もない冷靜さから出でゐるのかも知れない。最初の一週こつきりでは、このヘラクレス然とした男がどういふ階段に屬してゐるか決めにくかつた。邸勤めの百姓にも似てゐなければ町人らしくもなし、落ちぶれた退職の小役人でもなければ、身代限りをした小地主の成れの果ての獵犬番や遊び人とも見えない。彼はまさに獨自の人間であつた。どこからこ

の郡へ流れ込んだのやら、誰も知らない、取り沙汰によると郷土出で、どこかで勤めに就いてゐたともいふが、それも確かなことは皆目わからない。それに誰からも聞きやうがない——まさか當人から聞く譯にも行かないではないか。これほど無口な氣むづかしい男は類がないのだ。それに、何をして暮らしを立ててゐるのか、それも誰一人として確かなことが云へる者はなかつた。何の手職もしてゐないし、誰のところへ出入りするでもなし、人と交際をするわけでもなかつたが、金はいつも持合せがあつた。むろん大した金目ではなかつたけれど、とにかくあつた。態度振舞ひは敢てつまましいといふ譯でもなかつたけれど——一體が彼にはつまましい所など少しもないのだ——しかし静かなのである。彼はまるで周りの人などに氣もつかないし、誰の厄介にも一切ならぬといふやうな暮らし方をしてゐた。暴れ旦那（これは人からつけられた綽名で、本名はペレヴレーソフといふのであつた）は、この界限で大變な勢力を持つてゐた。誰にもせよ他人に命令をする權利などまるでないのだし、彼自身もたま／＼打つ突かつた相手に服従を強ひるやうな素振りは毛ほども見せなかつたけれど、誰も彼もが直ぐに喜んでこの男の云ふことを聴くのであつた。彼が何かと云へば唯々としてそれに従ふ。つまり、力といふものは何時でもちやんと物を云ふものである。彼は殆んど酒を飲まず、女を相手にせず、たゞ無性に歌が好きなのであつた。この男には謎めいたところが多い。彼の内部には何かしら、素晴らしく大きな力が潜んでゐて、そいつが一たん頭を擡げ、鎖を切つて暴れ出したが最後、自分自身は云ふまでもなく、觸れるものを悉く破壊しなければ止まないと云ふことを承知してゐるので、ことさら氣むづかしく蟲を殺してゐるやうな按配であつた。この男も過去にさういつた様な爆發が起つて、危く身の破壊を遁れたために、彼はこの經驗に教へられて、いま頑として嚴重に自分を抑へつけてゐるに相違ない。もしさうでないとしたら、彼は甚だしく思ひ違ひをしてゐるわけだ。わけても私を驚かしたのは、彼の身體の中で或る生まれつきの兇暴性と、同じく生まれつきの高潔心が混じり合つてゐることである——これはほかの誰にも見受けたことのないやうなものである。

さて、請負師は前へ進み出て、半ば眼を閉ぢると、思ひ切り高い裏聲でうたひ出した。少し澁みがかつてゐるけれど、かなり氣持ちのよい綺麗な聲であつた。まるで獨樂でも廻すやうに、聲を轉がし揺り立てて、絶えず歌を引きながら高いところから低いところへ落とし、すぐに高い調子へ戻しては、特別力を入れてその調子を崩さないやうに引く。ぷつりと切つたと思ふと、またもや勇み肌の狭な氣負ひ調子で前の節を取り戻す。彼の節廻しの變化は時にはかなり大膽だし、時にはかなり可笑しかつた。それは聞き巧者な人には大いに喜ばれたことだらうが、獨逸人はこれを聞いたら憤慨したに相違ない。これはロシアの優美中音であり、輕快中音であつた。彼は陽氣な踊り歌をうたつた。果てしのない裝飾や、餘計な附け足りの音や、囃し言葉などの間から、やつと聞き取れたところによると、歌の文句は次のやうなものである。

可愛いお前のためならば

畑を少々耕して見せう

可愛いお前のそのために

眞つ赤な花の種子をも蒔から

彼は歌つた。一同はちつと耳を傾けて聞いてゐた。彼は打ち見たところ、歌の分かる連中を相

手にしてゐるのだと感じたらしく、それこそ俗に云ふ「四苦八苦」の努力をしてゐたのである。また實際、この地方の人たちは歌にかけたら通人で、オリョール街道筋のセルギエフスコエ村などは、特に氣持ちのいゝきれいな歌ひぶりだ、ロシア全國に名を知られてゐたのも、敢て不思議はないわけである。請負師は永いこと歌つてゐたが、かくべつ聴き手に強い共鳴を喚び起こすでもなかつた。合唱の加勢がないのが原因である。しかし最後に、特別うまい節の變り目に來ると、暴れ旦那さへも思はず微笑みを洩らすし、ぼんつくなどは堪らなくなつて會心の叫びを上げた。一同は感に打たれて身顫ひした。ぼんつくと眼んぱちは小聲に後をつけて、節を引つぱつたり、間々に叫びを入れたりし始めた！『凄いなぞ……もつと上げろ、畜生！……もつと高くして引つぱれ、悪黨！ うんと引つぱれ！ もつと突つ込んだ、この胴慾者め、人殺し！ 一と思ひに殺してくれ！』等々。ニコライ・イワーヌイチは賣臺の向かうで、我が意を得たりといふやうに首を左右に振つてゐる。ぼんつくはたうとう足拍子を取つて、細かく兩脚を刻み、肩をひく／＼動かし出した。——ヤコフの眼は炭火のやうに燃え出した。彼は木の葉のやうに全身を慄はせ、そは／＼と落ちつかぬ微笑みを泛かべてゐた。たゞ一人暴れ旦那だけは顔色も變へず、ぢつと一と所に立つたまま、動かうともしなかつた。それでも請負師の方に注がれた視線は、いくらか柔らいでは來たけれど、唇の表情は相變らず蔑むやうであつた。満座が感嘆を洩らしてゐるのに勢づいた請負師は、すつかり破目を外してしまつて、妙な飾りや色をつけたり、舌打ちで拍子を取つたり、舌を續けさまに鳴らしたりして、こゝを先途と咽喉を轉がしたので、たうとう疲れはてて、眞つ蒼な顔になり、熱い汗を瀧のやうに流しながら、ぐつと後ろへ全身を反らして、最後の一と節を次第々々に消しながら歌ひ終つたとき、一座は一齊に割れるやうな喝采を浴びせかけ

た。ぼんつくはその首つ玉に取りついて、例の長い骨ばつた兩腕で締め殺さないばかりであつた。ニコライ・イワーヌイチの脂ぎつた顔はぼつと紅みを帯びて、まるで若返つたやう。ヤコフは氣でもちがつたやうに、『豪いもんだ、豪いもんだ！』と叫んだ。私の隣りに坐つてゐる破れた上衣の百姓までが我慢しきれないで、卓を拳固でどんと叩いて、『なあるほど！ うめえ、どうもはや畜生、うめえもんだ！』と叫んで、やけに勢ひよくわきの方へべつと唾を吐いた。

「いや、兄弟、お庇でいゝ慰みをした！」と、ぼんつくはくつたりした請負師を抱きしめたまゝ、放さうとしないで、から喚き立てた。「いゝ慰みをしたよ、云ふがもなあねえ！ 勝ちだぞ、お前の勝ちだぞ！ お芽出たう、小墾一本はお前のもんだ！ ヤーシカなんぞお前にや遙か及ぶこつてねえ……そりや、もう俺がちやんと云つとくが、及びもつかねえ……ぼんのこつたよ！」と彼はまたもや請負師を胸に抱きしめた。

「まあ、放してやれよ、放して、執拗いやつだ……」と眼んぱちは忌々しさうに口を入れた。「床几に腰でもかけさせてやれ、なあ、疲れてるんぢやないか……お前なんて聞抜けだ、全く聞抜けだあ！ 飴ぢやあるまいし、何だつてべた／＼くつ附くんか？」

「いや、なあに、そんなら掛けさせてやらう。そこで俺はお祝ひに一杯やるとしべえ。」と、ぼんつくは云つて、賣臺の方へ行つた。「勘定はお前もちだせ、兄弟。」と請負師の方へ向きながら云ひ添へた。

こちらは頷いて、床几に腰をおろし、帽子の中から手拭ひを出して、顔を拭きにかゝつた。ぼんつくは大急ぎでがぶ／＼とコップに一杯呷ると、大酒飲みのよくやる癖で、咽喉を鳴らしながら、沈んだ物思はしげな顔つきになつた。

「よく歌ふなあ、お前、巧いもんだ。」とニコライ・イワーヌイチは愛想よく云つた。「そこで今度はお前の番だ、ヤーシャ。いゝかい、びくつくんぢやないよ。どつちがどつちを負かすか、見てみよう。一つ拜見しよう。何しろ親方はよく歌ふなあ、ほんとによく歌ふ。」

「滅法うまいねえ。」とニコライ・イワーヌイチの女房がかう云つて、にっこり笑ひながらヤーコフを見やつた。

「うまいもんだ、ひやあ！」と私の隣りの百姓が小さな聲でその尾についた。

「はゝあ、山家猿(ボルホフ郡とジズドラ郡の境から南の方へ長く續いてある森林地帯の住民は山家猿と呼ばれてゐる)の木偶の坊(彼らは疑ひ深い偏屈な性質のため)だ(生活様式、言語、風習なども特異な點が多い。言葉尻に「ひやあ」と付ける。原著者註。)だ(原著者註。)だ(原著者註。)な！」と出しぬけに、ほんつくが聲を筒抜けさせた。

そして外套の肩に穴のあいてゐる百姓の傍へ行つて、無遠慮に指さししながら、びよん／＼跳び上がつて、ひゞの入つたやうな高笑ひを立てた。「山家猿！ 山家猿！ ひやあ、と來たぞ。木偶の坊！ 何しに御座らつしやつた、木偶の坊？」と笑ひこけながら、その間々に囁し立てた。

可哀さうに、百姓はれてしまひ、席を立つてそこ／＼に出て行かうとしたが、そのとき不意に暴れ旦那の銅羅聲が響き渡つた。

「ちよつ、こいつ何て仕様のねえ畜生だ？」と齒をぎり／＼鳴らしながら云つた。

「俺、なにも、」と、ぼんつくは口の中でもぐ／＼云つた。「俺、なにも……俺はたゞ……」

「まあ、いゝから、黙れつてことよ！」と暴れ旦那は遮つた。「ヤーコフ、始めたり！」

ヤーコフは咽喉のところへ手をやつた。

「なんだ、お前、その……どうも……ふむ、何だか知らないが、全く、どうもその……」

「まあ、いゝつてことよ、びく／＼するな。含羞(はにか)むことはない……何をまご／＼してゐるんだ？」

……さあ、潔く尋常に歌つた。

かう云つて、暴れ旦那は待ち設けるやうに眼を伏せた。

ヤーコフは暫く黙つてゐたが、あたりを見廻して、片手で顔を蔽つた。一同の眼は食ひ入るやうに彼に注がれた。取り分け請負師の顔には、いつもの自信に充ちた勝ち誇つたやうな表情の蔭から微かな不安が我ともなしに差し覗くのであつた。彼は壁に身を凭せて、再び兩手を尻の下に敷いたけれど、もう足をぶら／＼させなかつた。遂にヤーコフは顔から手を放したが、その顔は死人のやうに蒼ざめて、眼は伏せた睫の間から僅かに覺束なく光つてゐた。彼は深い溜め息をついて歌ひ始めた……最初の聲は弱々しく調子が不揃ひで、何となく胸の中から出るのはなく、どこか遠くの方から運ばれて來て、たま／＼この部屋の中へ流れ込んだもののやうに思はれた。この顫へ勝ちな繊細(かほ)く響く聲は、一座の人々に不思議な感銘を與へた。私たちは互ひに顔を見合せた。ニコライ・イワーヌイチの女房はつと身を反らしたほどである。この最初の音に續く次の音は、前よりしつかりして息もよく續いたけれど、強く指先きで撥(は)かれた絃が不意に高らかに鳴り渡つたまゝ、忽ち衰へて名残りの響きをたゆたはしてゐるやうに、あり／＼と慄へが感じられた。第二の音に續いて第三の音、かうして次第々々に熱を帯び幅を増しながら、もの悲しい歌の調べが滾々と溢れ出した。

「野を走る道は一筋のみならで」と彼は歌つた。私たちは誰も甘い氣持ちになると同時に、胸苦しきも覺え始めた。私は正直なところ、かういふ聲を滅多に聞いたことがなかつた。それはやゝ割れ氣味で、何となく罅隙(ひび)の入つたやうな響きを立て、初めは一種病的なところさへあつた。けれど、そこには拵へものでない深い情熱もあれば、若々しさも、力も、甘さも、聴く人を惹き入

れねばやまぬやうな、ひた向きの哀愁も籠つてゐた。ロシヤ人の眞實な、燃えるやうな魂がその中に響き、息づいてゐて、聴く人の心を否應なく鷲掴みにし、ロシヤ人の胸の琴線を掻き鳴らさずには措かなかつた。歌の調べは力を増し、あたりに漲つて行く。ヤーコフは見るからに法悦感に包まれて行つた。今はもう臆する様もなく、身も心も自らの幸福に浸りつくしてゐた。その聲はもう戦いてはゐなかつた。慄へを帯びてはゐたが、それは聴く人の魂を矢のやうに刺し貫く情熱の、漸くそれと知られる程の、内部から發する慄へであつた。聲は一刻一刻力をまし、強まり、幅を擴げてゆく。思ひ起せば、ある夕ぐれ、私は退き潮どきに、遠く轟々と重々しげに鳴る潮騒の砂濱で、一羽の大きな鷗を見たことがある。絹のやうな胸を眞紅の夕映えに曝して、ちつと身動きもせず立ちつくし、たゞ時々馴染み深い海を迎へるやうに、沈み行く血紅色の太陽を迎へるやうに、ゆつくりとその長い翼を擴げてゐた。私はヤーコフの歌を聞きながら、圖らずこの鷗を思ひ出したのである。彼は競争者のことも、私たち一同のことも忘れて歌つた。しかし、波に揺り動かされる泳ぎ手のやうに、うち見たところ、私たちの熱心のこもつた無言の共鳴に勵まされてゐるらしかつた。彼は歌ひつゞけた。その聲の一つ／＼の音は、まるで涯なき遠方へ霞みつゝ消えて行く舊知の曠野が眼の前へ展けたかのやうに、何かしら懐かしい、眼も及ばぬほど廣々とした感じを發散するのであつた。私は涙が胸に煮え沸り、眼がしらに湧き上がつて來るのを覺えた。と、低い押し殺したやうな咽び泣きの聲が私の耳を打つた。振り返つて見ると、酒屋の女房が胸を窓に押し當てて泣いてゐるのであつた。ヤーコフはちらとその方に視線を投げる。と、また前よりも更に聲を張つて、更に／＼と歌ひ出した。ニコライ・イワーヌイチは首を垂れ、眼んばちは顔を反けた。ぼんつくは、すつかり溶けたやうになつて、愚かしく口をほかん

と開けて立つてゐた。見すばらしい百姓は、悲しさうに呟きながら頭を振つて、片隅で忍び泣きに啜り上げてゐた。暴れ旦那の鐵のやうな顔にさへ、すつかり八の字に寄せてしまつた肩の蔭から、重々しさうな涙の露がぼろ／＼と流れ落ちた。請負師は握りしめた拳を額に當て、たま／＼身動きもしなかつた。もしヤーコフが、並外れて細く高い調子のところで、まるで聲がぶつりと切れたやうに、突然うたひ熄めなかつたら、一座の惱ましいほどの感激はどういふ風に爆發したか分らない。誰ひとり聲を立てるものもなければ、身動きするものもなかつた。みんな彼がまだ歌ひ出すかと待ち設けてゐるやうな具合であつた。けれども、彼は私たちの沈黙にはつとしたやうに眼を開けて、物問ひたげな目つきで邊りを見廻した。そして、勝利は自分のものだと思つた。

「ヤーシャ、」と暴れ旦那は云つて、彼の肩に手を載せたが——そのまゝ口を噤んでしまつた。私たちはみんな麻痺したやうに立つてゐた。請負師は靜かに起ち上がつて、ヤーコフの傍へ寄つた。

「お前だ：賭けはお前のものだ：お前が勝つたんだ。」やつとのことでこれだけ云ふと、彼はそのまゝ部屋から飛び出してしまつた。そのまゝ、部屋から飛び出した動作が、一座の恍惚境を破つたかのやうに、誰もが急にがや／＼と喜ばしげに喋り出した。ぼんつくはひよい／＼と跳び上つて、取り留めのないことを口走りながら、風車の翼のやうに兩手を振り廻した。眼んばちは跛をひき／＼ヤーコフのそばへ行つて、接吻を始めた。ニコライ・イワーヌイチは身を起こして、自分も寄進について麥酒を一本追加しようとして、もの／＼しく觸れ出した。暴れ旦那は何かから特別な人の好い笑ひ聲を立てたが、私は彼

にこんな笑顔が見られようとは夢にも思ひ寄らなかつた。例の片隅に坐つてゐた見すばらしい百姓は、兩の袖で眼や頬や鼻や鬚を すりながら、のべつ『いや巧え、本當に巧え、なあに、これが分からなかつたら、俺、畜生だ、巧えもんだあ！』と繰り返してゐた。ニコライ・イワーヌイチの女房は顔ちゆう眞つ赤にして、奥へ引つこんでしまつた。ヤーコフは子供のやうに自分の勝利を享樂してゐた。その顔はまるで見ちがへるやうになつて、殊に眼はさも幸福さうに輝き出した。彼は賣臺のそばへ引つばつて行かれた。そこで、手放して泣き出した見すばらしい百姓を呼び寄せた上、請負師を捜しに、この店の小さい息子を使ひにやつた。けれど、息子は手を空しくして歸つて來た。かうして酒もりが始まつた。『お前、まだ歌つて聞かしてくれな？ 晩までも歌ひ通さなくちやなんねえぞ。』と、ぼんつくは高く兩手を差し上げながら、繰り返しく云ふのであつた。

私はもう一度ヤーコフをちらと眺めて、外へ出た。私は居残りたくなかつた——折角の印象を傷つけるのが氣づかされたからである。けれど、暑さは依然として堪へ難いほどで、どろつとした重い層をなして地上に蔽ひかぶさつてゐるやうであつた。濃い紺碧の空には、小さい明るい火のやうなものが、殆んど黒く見える細かな埃を透して、くるくると廻つてゐるかのやう。萬物が闊と静まり返つてゐる。この疲憊しきつた自然の深い沈黙の中には、何かしら頼りない、壓しつけられたやうなものがあつた。私は乾草小舎まで辿りつき、刈り取つたばかりではあるけれど、もう殆んど乾き切つた草の上に身を横へた。永いこと私は眠りつけなかつた。強い迫力を持つたヤーコフの聲が、いつまでも耳の中に響いてゐたのである……けれど、遂に暑さと疲労の方が勝つて、私はぐつすり死んだやうに寢入つてしまつた。ふと眼を醒ましてみると——あたりはもう

暗くなつてゐた。そこいら中に撒き散らされた乾草が心持ち濡り氣を帯びて強い薫りを放ち、半ば裸になつてゐる屋根の細い垂木や棧の間から、蒼白い星が弱々しく瞬いてゐる。私は外へ出た。夕焼けはもう疾くに消え果てて、覺束ない名残りが天涯に白んでゐた。しかし、つい先ほどまで赤熱されてゐた空氣は、涼しい夜氣の流れる間にもまだ温かみを含んでゐて、胸は未だに冷やりしたそよぎを戀ひ求める。けれど風はなく、雨雲の影もなかつた。空はどこ迄も一面に澄み渡つて、透き通るやうな黒みを帯び、數しれぬ、漸くそれと見分けられる程の星が、靜かに明滅してゐる。村には灯火の影がちらほらして、程遠からぬ所に明々と燈影を洩らしてゐる居酒屋からは、入り亂れた歌聲がぼやけたやうに聞こえて來る。その中に、どうやらヤーコフらしい聲を聞き分けられるやうな氣がした。時々どつと烈しく笑ひ崩れる聲が聞こえる。私は小窓のそばへ歩み寄つて、顔を硝子へ押し當てた。私の目に入つたのは、賑かで景氣はよいけれど、不愉快な光景であつた。誰も彼もが酔ひ痴れてゐた——ヤーコフを始めとして、誰も彼も一人のこさず。ヤーコフは胸を剥き出しにして床几に腰をかけ、嗚れ聲で俗な踊り歌をうたひながら、大儀さうにギターギターの絃を探り探り掻き鳴らしてゐた。汗に濡れた髪は恐ろしく蒼褪めた顔の上に、幾つかの束になつて垂れ下がつてゐる。酒場のまん中には、すつかり「羽目をはづした」ぼんつくが長上衣カも脱ぎ棄てて、鼠がかつた外套カを着た百姓の前で、ひよこ／＼飛び上がりながら踊つてゐた。百姓も負けてはゐず、覺束なげに足踏みをしたり、ふら／＼する足を摺り合せたりして、蓬蓬の間から意味のないた／＼笑ひを洩らしながら、時折「え、どうともなれ！」とでもいふやうに片手を振つてゐた。その顔を見てゐると、これより以上に滑稽なものはないと思はれるほどであつた。どんなに眉をひく／＼吊り上げて、重くなつた臉は上がらうとしない

で、漸くそれと見分けられる位な、とろんこの、さもお芽出たさうな眼の上に、他愛なく被さつてしまふのであつた。彼はすつかり酔ひが廻つて、いゝ御機嫌になり、通りすがりの人が誰でも一目見て、「おい、大將、いゝさまだな！」と云はずにみられないやうな體たらくであつた。眼んばちは蝦のやうに眞つ赤な顔をして、大きく鼻の孔を膨まし、隅の方から毒々しい笑ひを投げた。たゞニコライ・イワーヌイチは、本當の居酒屋の主人らしい態度を崩さず、いつもに變らぬ冷靜さを保つてゐた。部屋の中には新顔も澤山あつまつてゐたけれど、暴れ旦那の姿はそこに見當たらなかつた。

私は顔をそむけて、コロトフカの村を頂いてゐる丘を下り始めた。この丘の麓には廣い坦らな野が展げてゐる。夕霧の渺茫たる波に包まれて、野は一層はてしない感じを増し、動ずんだ空と溶け合つたかのやうに思はれた。私は谿沿ひの道を大腿に下りて行つた。と、不意にどこか遙か野の彼方から、よく透る男の子の聲が聞こえて來た。「アントロブカ！ アントロブカーアアア……」と最後の一音を長く／＼引きながら、片意地らしい、今にも泣き出しさうな、自暴半分の聲で叫んでゐる。

子供は暫く黙つてゐたが、またやがて叫び出した。その聲はちつと静まり返つてうつら／＼假睡んでゐる空氣の中に、はつきりと響くのであつた。ものの三十遍くらゐアントロブカの名が呼び続けられた。すると、不意に野原の違つた方角から、やつと聞き取れる位な聲が、まるで別の世界からでも來たもののやうに傳はつて來た。

「なんだーあーあーあーい？」
男の子の聲はすぐに應じて、嬉しい中にも竊に觸るやうな調子で呶鳴つた。

「こつちい來やがれ、畜生、狐憑きいーい！」

「なぜにやあーあーあ？」と、向かうは大分しばらく経つて答へた。

「なぜも糞も、阿父が手前を打ちのめしてくれとようーう。」と初めの聲が急いで喚き返した。

向かうの聲はもうそれきり應へなかつた。で、男の子は又もやアントロブカを呼びはじめた。

もうすつかり暗くなつてしまふまで、その叫び聲はだん／＼間遠に、だん／＼微かになりながら

も、やはり私の耳に聞こえて來た。やがて私は、コロトフカから四露里はなれた所で、自分の持ち

ち村を取り巻いてゐる森の端れを廻つた……

「アントロブカーアアア！」夜の影に充たされてゐる空氣の中に、尙もかう云ふ聲が聞こえるやうに思はれた。

ピョートル・ペトロギッチ・カラターエフ

五年ばかり前の秋のこと、モスクワからトゥラへ行く途中で、替へ馬がないために殆んどまる一日、驛遞で餘儀なく過ごしたことがある。獵の歸り道に、私はついうっかり自分の三頭立てを忘りに歸してしまつたのである。驛長といふのは、もう年のいつた氣難かしさうな男で、髪の毛の眞上まで垂らし、眠さうな小さな眼をしてゐたが、私がどんなに口説いても頼んでも、返事の代りに口の中でぶつきら棒にぶつ／＼云ふばかり、結局自分の務めを呪ひでもするやうに、中つ腹で戸をびつしやりと叩きつけた。そして上り段の所へ出ながら、馭者たちを叱りつけるのであつた。馭者たちは三四貫目もありさうな鞭を兩手に持つて、泥濘の中をのろ／＼と歩いてゐるのもあれば、床几に腰かけて欠伸をしたり、身體をぼり／＼搔いてゐるものもあり、お頭の嘸鳴り聲などは大して氣にも留めないであつた。私はもう三度ばかり茶を飲んでもみだし、幾度か晝寢をしようと力めてもみだが、物にならなかつた。窓や壁に貼つてある掲示もすつかり讀んで了つた。私はやり切れない程の無聊に苦しんだ。寒々とした、やる瀬ない絶望を抱きながら、私は自分の旅行馬車の仰向きになつた轅を眺めてゐた。と、不意に鈴の音が響いて來て、疲れ切つた三頭立てを駕けた小さな馬車が、上り段の前に停まつた。新來の客は車から跳び降りると、『早速馬を頼むよ!』と嘸鳴りながら、部屋の中へ入つて來た。馬は無いといふ驛長の答へを、彼は誰でもよくやる奇妙な呆れた表情で聞いてゐた。その間に、私は退屈してゐる人間に持ち前の烈しい好奇心を以つて、この新しい仲間を頭から足の先きまで早くも一目で見たとつた。見受けた

ところ彼はまだ三十前らしかつたが、かさ／＼した黄色つばい厭な銅光りのする顔には、消すよしもない天然痘の痕が残つてゐる。青味がかつた黒い長髪は、後ろ襟のところで細かく渦を巻き、前の方は兩の顚顚で物凄く捲き上がつてゐる。小さな腫れぼつたい眼は、ぼんやりと前を眺めてゐるが、それはたゞ眼を開いてゐると云ふだけ。上唇には疎らに鬚が生えてゐる。服装と云へば、馬市などへやつて來るだらしない地主よろしく、可成り脂じみた短上衣を着て、薄紫色のさめた絹のネクタイをしめ、眞鍮釦のついたチョッキを着こみ、裾の恐ろしく開いた鼠色のズボンを穿いて、その下から磨かない長靴の先きを僅かに覗かせてゐる。その身體からは煙草とワートカの匂ひがぶん／＼してゐる。短上衣の袖に大方隠れた赤くて太い指には、銀指環やトゥラ出來の指環が箆めてあつた。かういふ風體の男なら、露西亞には何十人どころか、何百人となくざらに出會ふので、こんな連中と近附きになるのは、正直な話、一向に有難くないものである。私は新來の客を見て、かういふ先入見を持つてしまつたにも拘らず、しかし、彼の顔ののんびりした、人の好い、しかも情熱的な表情を見逃がすわけにゆかなかつた。

「現にこのお方だつて、こゝで一時間の餘も待つておいでなさるんですからね。」と驛長は私を指しながら云つた。

一時間の餘だつて! 悪黨め、人を馬鹿扱ひにしてゐやがる。

「そりや、このお方はそれ程お急ぎぢやないかも知れないさ。」と新來の客は答へた。

「さういふ事になりますと、もう私共には分かり兼ねます。」と驛長は氣むづかしげに答へた。

「ぢやあ、どうしても駄目なんだね? 馬は金輪際ないと云ふんだね?」

「駄目なんで。馬は一匹も居りません。」

「ふん、それぢやサモワールでも持つて來さしてくれ。少し待つとしよう、仕方がない。」
 新來の客は床几に腰を下ろし、帽子を卓の上に放り出して、髪のを一撫でした。
 「あなたはもうお喫りになりましたか？」と彼は私に問ひかけた。
 「ええ。」

「もう一度、お付き合ひに如何です？」

私は同意した。胴の太い、赤ちやけたサモワールがこれでもう四度目に卓の上へ見參に及んだ。私はラムの瓶を取り出した。果たして想像に違はず、この新らしい話し相手は、小さな領地を持つてゐる貴族であつた。その名はピョートル・ペトローギッチ・カラターエフといふ。

私たちはいろ／＼話し込んだ。やつて來てから三十分と経たない中に、彼はもう如何にも好人物らしく隔てのない調子で、私に自分の身の上話をして聞かせるのであつた。

「これから私はモスクワへ行くところなんです。」と彼は四杯目のコップを飲み乾しながら云つた。

「今さら田舎にゐたつて、どうにも仕様がありませんのでね。」

「なぜ仕様がなんでしょう？」

「いや、どうしてもかうしてありません。——全く仕様がなんでしょう。家の經濟は滅茶々になつてしまふし、百姓たちまで無一物にさせちまひましてね。正直な話、厄年が續いて、作物の出來が悪かつたり、その他お察しもつきませうが、いろんな不仕合せが重なつて……尤も、」彼はしよんぼりと眼を脇へそらして、かう付け加へた。「私なんか領地の經營をやる資格はないんですからね！」

「それはまた、何故です？」

「いや、お話になりませんよ。」と彼は私の言葉を遮つた。「こんな風な領地の經營をする奴つてあるもんですか！ ねえ、いゝですか。」と首を横にかしげて、しきりにパイプを喫ひながら、彼は言葉を續けた。「あなたはかうして私を御覽になれば、恐らくその……とお考へになるでせうが、實は、正直に白状しますけれど、私は中どころの教育しか受けてゐないんです。學資が充分でなかつたものですから。どうかお赦しを願ひます。私はどうもあけすけな人間でしてね、おまけに……」

彼は終ひまで云ひ切らずに、片手を振つた。私は彼に向かつて、「それはあなたの思ひ違ひで、かうして偶然出會つたことを心から嬉しく思つてゐる。」などと熱心に云ひ譯し、領地を管理して行くには、さして深い教養など要らない筈だが、と付け足した。

「同感です。」と彼は答へた。「私もお説に賛成です。しかし、なんといつても、かう一種特別な氣分の持ち方が必要なんです。世間には、まるでわけの分からない事をやつて行きながら、それで無事に通る人もあります！ と、ところが私は……失禮ながら伺ひますが、あなたはピーテル(ペテルブルグの俗稱)からいらつしやいましたか、それともモスクワからですか？」

「ペテルブルグからです。」

彼は兩方の鼻の孔から長々と煙を吹いた。

「私はモスクワへ就職に行くところなんです。」

「どんな方面に入るおつもりですか？」

「さあ、そりや分かりません。あちらへ行つて見てから出たとこ勝負です。正直なところ、私

はお役所勤めが怖いんです。すぐ責任問題を引き起こしますからね。ずつと田舎にはかり住んでゐたので、田舎暮らしに馴れちまひましてね、全く……が、もう仕方がありません、必要に迫られたわけなんです！ いやはや、この必要といふ奴には參つちまひますよ！」

「そのかはり、都住まひといふことになるぢやありませんか。」

「都住まひ……、さあ、その都にどんなにいゝ事が待つてゐますやら、まあ、行つてみませう。全くいゝかも知れません……それにしても、田舎ほどこいゝ處は又と無いやうな氣がしますよ。」

「一體、なんですか、どうしても田舎ではやつて行けないんですか？」

「駄目なんです。今ではもう領地も殆んど私の物ではないんですからね。」

「それは又どうして？」

「なに、實は親切な人があましてね——新らしく越して來た近處の人なんですが……この人に手形を振り出したところ……」不仕合せなピョートル・ペトローギッチは顔を一撫でして、暫く考へてゐたが、やがてさつと頭を振つた。

「まあ、今更とやかく云つたつて始まらない……それに正直な話が、暫く無言の後に彼はかう云ひ足した。「誰も人を責めることはない、自分が悪いんですよ。見得を切るのが好きだつたもんですから……柄にもない、見得を切ることが好きな性質で。」

「田舎では愉快にお暮らしでしたか？」と私は訊ねた。

「自家にはね、あなた、私の顔をまともに瞋め、一句々々區切りながら彼は答へた。「十二番からの獵犬がゐりましたよ。しかもそれが一寸類の少ないやうな奴なんです（この最後の言葉を歌でも

唄ふやうに節をつけて云つた。)兎なんか雑作なく參らしてしまふし、狐や狼などにかゝつて行く時は、まるで蛇のやうでしたよ、まるで毒蛇でしたね。ボルゾイ種の犬も自慢の出來るやうなのを飼つてゐましたよ。もう昔話になつてしまつたので、嘘をついてみたところで始まりません。それから私は銃獵もやりました。コンテスカといふ犬を連れて歩きましたが、これが獲物を見つけることにかけては稀なる名犬で、鼻のよく利くのが無二の武器でしたよ。よく沼の傍へ行くと、普通、探せ！ と云ひますね。ところで、此奴が探さうとしなければ、よしんば十匹からの犬を連れて行つて、狩り立ててみたところで、骨折り損の疲れ儲けで、何一つ見つかりつてありません。けれど、奴がいざ探しにかゝつたら、それこそもう命がけです……それでゐて、家中にゐる時はまことに行儀がいゝ。左の手でパンを突き出しながら、「猶太人の食ひさしだ」と云ふと決して取らうとしません。ところが右手で出して、「お嬢さまのお下がりで」と云へば直ぐに取つて食べるぢやありませんか。この犬の腹から生まれた仔がゐましたが、これがまた素敵な犬で、私はモスクワへ連れて行かうかと思つたんですけれど、友人に鐵砲と一緒に強請り取られてしまひましたよ。「モスクワへ行つたら、犬どころの騒ぎぢやないよ。向かうへ行つたら、君、萬事がまるで違つてしまふさ。」といふので、私はその男に仔犬もやり、序に鐵砲をやつてしまひました。かういふわけで、そんなものはみんな彼方へ残つてゐるので。」

「だつて、あなた、モスクワだつて獵はお出來になつたでせうに。」

「なんの、なんの、そんな事をして見たつて始まりませんよ。ちやんと一家を支へることも出來なかつた人間なんですから、今となつたら、それ位の辛抱はしなけりやなりません。まあ、それより一つ伺ひますが、モスクワの暮らしはどんなものでせう。諸式が高いでせうね？」

「いや、左程でもありません。」

「左程でもない？……ときに、もう一つ伺ひますが、モスクワにもヂプシイがあるでせうね？」

「ヂプシイといふと？」

「ほら、あの市なんかを廻つて歩く？」

「ええ、そりやあます、モスクワにも……」

「は、あ、それなら結構だ。私はヂプシイが好きでしてね、實に堪らないほど好きなんです。」

ピョートル・ペトロギッチの眼ははれぐと楽しげに輝いた。けれど突然、床几の上でそくさ身を動かしたと思ふと、やがてもの思ひに沈んだやうに首を垂れ、空のコップを私の方へさしのべた。

「あなたのラム酒を頂戴出来ませんか。」と彼は云つた。

「でも、茶はすつかり無くなつてしまひました。」

「大丈夫、茶はなくつても、生のまゝで……あゝ！」

カラターエフは両手に頭を抱へて、テーブルの上に肘をついた。私は無言のまゝ彼を見つめながら、一杯機嫌の人がふんだんに洩らす感傷的な叫びを聞かされ、悪くしたら涙まで見せられるものと内々覺悟してゐた。けれど、彼が頭を上げた時、その顔に浮かんでゐた深い悲しみの色に、正直一驚を喫したのである。

「どうなすつた？」

「別段どうも……昔のことを思ひ出してね、ほんのちよつとした事なんです……お話しま

せうかな、でも、御迷惑になつては相済みませんが……」

「どう致しまして！」

「さやう。」と彼は溜め息まじりに言葉を續けた。「世の中には妙なことがあるもので……早い話が私なんかでもさうです。そこで、もしなんでしたら、その顛末をお話しませう。でも、どうですかな……」

「まあ、聞かして頂きます、ピョートル・ペトロギッチ。」

「では、さういふことにしますかな、尤も大した話ぢやありませんが……さて、實は、」と彼は話し始めた。「しかし、全く、どうかなあ……」

「さあ、そんな御遠慮は澤山ですよ、ピョートル・ペトロギッチ。」

「さう、それもさうですね。さて、なんと云ひますか、かういふことが私の身の上に持ち上がったんです。私は田舎に暮らして居りましたが、ふと或る娘を見初めてしまつたんです。あゝ、その娘の素晴らしいことといつたら……縹緞よしで伶俐で、それはそれは氣立てのいゝ娘でした。名はマトリヨーナと云ひました。平民の出で、つまりお分かりでせうね、農奴の娘で、手つ取り早く云へば下女しもよんななんです。おまけに我家の娘ぢやなくて、よその抱へるんで、そこが困りものだつたんです。まあ、かういふわけで、私はその娘を可愛く思ふやうになるし……いや全く、他愛のない話ですが、まあ、むかうも憎からず思つてゐたんですね。やがてそのうちにマトリヨーナは、自分を女主人から身請けして自由な身體にしてくれと云ひ出しました。私にしてもその事は折々考へないでもありませんでした……この女主人といふのは金持ちで、恐ろしい因業婆で、私の所から十五露里ばかり離れたところに住んでゐました。さあ、そこで、所謂天氣晴朗なる一

日、私は三頭立ての馬車を支度させました。——中馬には跑足の逸物を使つてみました。——重産の一寸類のない奴で名前もそれらしくランブルドスと付けてみました。——私もりゆうとした服装をして、マトリョーナの御主人のところへ出かけた譯です。先方へ着いてみると、大きな屋敷で、離れが幾つかあり、庭も大したものですよ。マトリョーナは道の曲り角で私を待ち受けてゐて、何やら話しかけようとしたが、たゞ手を接吻しただけで傍の方へそれてしまつた。さて、私は玄關へ入つて、『奥様は御在宅ですか?』と訊ねました。すると恐ろしく背の高い従僕が、『なんとお取次ぎ申し上げます?』と來ました。私は『地主のカラターエフが用談でまゐりましたと、さう取次いでくれ。』と云ひました。従僕が奥へ行つた後で、私はぼんやり待ちながら、『さあ、なんと出て來るかな?』きつとあの因業婆め、目玉の飛び出るやうな値を吹つかけることだらうな、腐るほど金を持つてゐやがるくせに。悪くしたら五百ルーブリくらゐ寄越せと云ふだらう。』とこんな風に考へてゐました。やがて漸く従僕が引つ返して來て、『どうぞお通りを。』と云ふ。私はその後について客間に入りました。入つてみると、萎びた黄色い顔の婆さんが舷椅子に坐つてゐて、眼をぱちくりさせてゐる。

『なに御用で!』と訊かれて、私は先づ初對面の挨拶を述べるのが順當だらうと思つた。ところが、『貴方はお思ひ違ひをしていらつしやいます。私はこの家の主人ではございません、身内の者として。』どういふ御用向きでせうか?』と云ふ。私は直ぐに折り返して、御主人様とちぎく御相談したい事があると申し入れました。『マリヤ・イリーニチナは今日、お目にかゝれません。氣分が勝れませんので。一體どういふ御用向きで。』私は何とも仕方がないと腹の中で考へて、事情をすつかり打ち明けてしまひました。老婆は私の話を聞き終つた後、『マトリョーナです

つて?』どのマトリョーナでせう?』マトリョーナ・フォードロワ、クリツクの娘です。』『フォードル・クリツクの娘。』でも、貴方はどうして彼女を御存じなんです?』『ふとした事で。』『貴方のお氣持ちはあれにも分かつて居りますでせうか?』『そりや、分かつて居りますとも。』老婆は暫く黙つて居りましたが、『本當にあいつ、仕様のない不届き者だ!』と來たぢやありませんか。私は正直なところ、吃驚りしてしまひました。『何だつてそんな事を、とんでもない!』私にはあれの身代として相當のお金を差し上げようと思つてゐるんですから、たゞ額さへ決めて頂ければ。』すると老いぼれ婆、いきなり口を尖らせて、『まあ、そんな事で私たちの度臆を抜かうといふお心算なんですか。貴方のお金なんかちつとも欲しくはありませんよ!』いまにあいつをうんと懲らしめてやる、うんと。性根を入れ替へてやらなくちや。』婆さんは餘り腹を立て過ぎて、ごほん／＼咳き込んでしまつたくらゐです。『あの娘はこの家が居辛いとしても云ふのかえ?』『え、あの鬼娘め、ああ、神さま、こんな罪なことを口走つて、どうぞお赦し下さいまし!』私は白状しますが、思はずかつとなつた。『何だつてあなたは不合せな娘を威すんです?』一體あの娘にどんな罪があるんでせう?』婆さんは十字を切つて、『あ、情けない話だ、全體わたしが。』『だつて、あれはあなたのものぢやないでせう!』『まあ、それはマリヤ・イリーニチナがちやんと自分で心得てゐますよ。あなたなんかの知つた事ぢやありません。さあ、私がこれからマトリョーナを呼んで、一體あれが誰に抱へられてゐる人間か、よく思ひ知らせてやりませう。』私は白状しますが、すんでの事にこの因業婆に掴みかゝるところでしたが、不圖マトリョーナの事を思ひ出すと、振り上げた手も自づと下がる次第。私はもう言葉に盡くせないほど慌ててしまつて、金は幾らでもさし上げますからと、婆さんに泣き附いて見ました。『あなたはあんな娘をどう

なさるお心算です？『氣に入つたものは仕方がないぢやありませんか。あなた、どうか私の身にもなつてみて下さい。失禮ですが、お手を一つ接吻させて頂きます。』と云ふなり、本當にこの鬼婆の手を接吻したものです！『そんなら』と業つくばりは口をもぐ／＼させながら云ひました。『マリヤ・イリーニチナに話をしてみませう。何と申しますかね、あなた二日ばかりしてまた来て下さい。』私はひどく不安な氣持ちで家へ歸りました。私は自分の遺口の拙かつたのに氣がついて、こつちの氣持ちを曝け出してしまつたのを、そろ／＼後悔するやうになりましたが、もう後の祭りでした。二日ばかり経つて私は女主人の處へ出かけて行きました。案内されたのは居間でした。花が無闇と澤山あつて、部屋の飾りつけは大したものです。當の主人は恐ろしく手のこんだ肱椅子に構へ込んで、頭を後ろのクッションに凭せておりました。先日出た身内の女もそこに腰を掛けてゐるし、それに緑いろの着物を着た、眉や睫毛の白っぽい、いやに口をひん曲げた、どうやらお話し相手らしい、お嬢さん風の女が控へておりました。婆さんは鼻にかゝつた聲で、『どうぞおかけ下さい。』と云ふ。私は腰をかけた。やがて私の年は幾つだの、どこに勤めてゐるかの、何をするつもりだの、根掘り葉掘り訊ね出したが、それが如何にも高飛車な調子なので。私は詳しく應答しました。婆さんは卓の上からハンカチを取つて、せつせと自分の顔を煽ぎながら、『あなたのお考へはカチエリーナ・カルボヴナから承りましたが、』と云ふのです。『けれども、私は奉公人を一切よそ様へは出さないことに家法として決めて居りますので。さういふ事は不體裁な話でもありませんし、歴とした家ではどうも感心しないこととしてね。そんな法はありません。私はもうちゃんど處置を申しつけましたから、あなたもどうかこの上氣をお揉みにならないやうに。』とかういふ挨拶なんです。『どう致しまして氣を揉むなんて、とんでもない……そ

れにしても、お宅ではマトリョーナ・フョードロヴナがお入り用なんでせうか？『いゝえ、入り用はございません。』と云ふ。『では、なぜ私に譲つて下さらないんです？』『氣が向かないからです、氣が向かない、たゞそれだけの事です。わたしはもう處分方を云ひつけましたから、あの娘は曠野の村へやられる筈です。』私はまるで雷にでも打たれたやうな氣がしました。婆さんは佛蘭西語で一言二言、緑いろの着物を着た娘に耳打ちしました。すると娘は出て行きました。『わたしは』と婆さんはまた云ひ出しました。『萬事につけて規則を嚴重に守る人間でして、それに身體も弱い方ですから、面倒なことが我慢でき兼ねますのです。あなたはまだお若いし、私はもう年寄りですから、御忠告申し上げても構はないと思ひますが、如何でせう、あなたもそろ／＼身を固めて結婚なすつたら、いゝお配偶をお求めになります。持參金を持つたお嫁さんはさう矢鱈には有りませんけれど、貧しいながら品行の良い娘さんなら、見附からないものでもありませんよ。』私はかう、ちつと婆さんの顔を見つめながら、相手がどんな御託を並らべてゐるのやら、まるつきり譯が分からなかつた。何やら結婚の話をしてゐるな、とは感じたながらも、私の耳には曠野の村といふ言葉だけが絶えず響いてゐるのでした。結婚なんて……何を馬鹿な……。こゝで彼は不意に話を止めて、ちつと私を見た。

「あなたは奥さんをお持ちぢやないでせう？」
「まだです。」

「えゝ、そりや勿論、分かり切つたことです。そこで、私は我慢し切れなくなりましたね。『冗談ぢやありませんよ、奥さん、なんて馬鹿氣たことを仰つしやるんです？』この場合、結婚なんて問題ぢやないぢやありませんか？ 私はたゞお宅の女中のマトリョーナを譲つて下さるかどう

か、それを伺ひたいだけなんです。『婆さんは溜め息をつきながら、『あゝ厄介な人だ！ あゝ、早く歸るやうに云つておくれ！ あゝ！』例の身内の婆さんがその傍へ駈けつけて、がみ／＼と私を呪鳴りつけるのです。主人の方は何時までも唸つてゐる。『なんだつて、私はこんな目に遭ふんだらう？』してみると、私はもうこの家の主人ぢやないんだらうか？ あゝ、あゝ。私は帽子を引つ擲んで、氣狂ひのやうに外へ駈け出しました。』

「ことによつたら、」と彼は言葉を續けた。「あなたは、私が身分の低い娘にかうまで血道を上げるのを、怪しからんとお思ひになるかも知れませんがね。私も自分からして、その、辯解がましいことを申し上げる心算はありません。たゞもうこんな風になつてしまつたのですからね！ 正直なところ、私は晝も夜も心の落ちつく暇がありませんでした。全く苦しみましたね！ 『なんだつてあの不仕合せな娘を臺なしにしたんだらう！』と思ひましてね。あの娘が粗末な上つ張りを着て、鶯鳥を追ひまはしたり、御主人の云ひつけで、ひどい取り扱ひを受けたり、樹脂を塗つた長靴を穿いた百姓頭に、口汚なく罵られてゐるやうな有様を思ひ浮かべると——忽ち冷たい汗が身體中に滲み出すのでした。さて、如何にも我慢がしきれなくなつたので、私は娘の潰られた村を探し出して、馬に乗つてそちらへ出かけました。やつとその村へ乗りつけたのは翌日の夕方でした。まさか私がこんな思ひ切つた事を仕出かさうとは思像もしなかつたと見えて、先方の主人も私のことについては何一つ手配がしてなかつたのです。私は近所の者のやうな振りをして、眞つ直ぐに百姓頭の所へ行きました。背戸へ入つてみると、マトリヨナが上り段の所に躓んで、頼杖をついてゐます。私を見ると、思はず叫び聲を立てましたが、私は身振りで靜かにしろといふ心を持たせ、裏の方に續いてゐる畑を指さして見せました。それから家の中へ入つて、百姓頭

と一と喋りして、嘘八百を並らべ立て、機を見てマトリヨナの所へ出て行きました。可哀さうに娘はいきなり私の頸筋にしがみついてしまひました。いぢらしいほど顔色が悪くなつて、寝れてゐるのです。そこで私はかう云ひました。『大丈夫だよマトリヨナ、大丈夫だから泣くのをお止し。』かういふ私の眼からも涙が止め度なく流れるのです。しかしまあ、しまひには私もきまりが悪くなつて来て、『マトリヨナ、泣いたところでどうにもなりやしない。それよりね、よく云ふ奴で、一か八かやつてのけなけりやならん、俺と一緒に逃げ出すんだ、これより他に手はないんだよ。』マトリヨナはこれを聞くと、氣が遠くなつてしまひました。『まあ滅相な！ それこそ私はお終ひになつてしまひます、みんなに苛め殺されてしまひます！』馬鹿だね、お前は、誰に見つけ出せるものか。『見つかります、きつと見つかりますとも、有難うございます。ピョートル・ペトロギッチ、あなたのお情けは一生忘れません。けれど、もう今は私のことなんか構はないで下さいな。どうやらこれが私の持つて生まれた運なんぞせうよ。』『何を云ふんだ、マトリヨナ。マトリヨナ、俺はお前のことをもつと意地のある娘かと思つてゐたのに。』全くあの娘は随分意地がありました。あの心根、實に見上げた心根です！ 『こんな所に残つて、どうするんだ？ どうせ同じ事ぢやないか、これより悪くはなりつこないさ。さあ、一つ正直に云つて御覽、百姓頭の拳固の味を知つてゐるだらう、え？』マトリヨナはかつと赧くなつて、唇まで慄へ出しました。『だつてそんな事したら、わたしの爲めに家の人達まで立つ瀬がなくなるんですもの。』『ふむ、そんなもの、家の者なんか……どこか邊鄙な所へでもやられるのかい？』『やられますとも。兄さんなんか、間違ひなくやられますわ。』『ちや親父さんは？』『さうね、お父さんはやられないでせう。村でたつた一人しかない腕つこきの仕立屋なんですから。』『ね、ほら御

覽。それに、兄さんだつて、そんな事で一生を棒に振りやしないよ。『全くお察しを願ひますが、私はやつとの事で娘を説き伏せたのです。何しろその上に『そんな事したら、あなただつてただちや濟まされませんか。』』などと云ひ出す始末でしてね。『なに、』と私は云つたものです。『それこそお前の知つた事ぢやないよ。』といふやうなわけで、とにかく私は娘を連れ出してしまひました。その時ぢやなく、折りを改めて、夜、百姓馬車に乗つて行つて——連れ出したんです。」

「連れ出したんですつて？」

「さうです。……さて、かういふ譯で、娘は私の家に落ち着きました。私の家は小ぢんまりしてゐて、下女下男も人数が少ない。召使ひ達は、あけすけに申しますが、私を敬つてくれましてね、どんなうまい餌で釣られても、私の祕密を洩らす氣遣ひはなかつたのです。私はのどかなその日その日を送ることとなりました。マトリヨーナもほつと一息ついて、顔の曇れも直りました。そこで私はいよ／＼離れ難ない思ひがして来る。……それに全くなんといふ娘だつたでせう！ どういふところからあれだけの藝が備はつたのか知りませんが、歌も唄へれば、踊りも上手だし、ギターも弾けるし。……近所の人達には見せないやうにしてゐました。うっかり喋られては大變ですからね。ところが、私に一人友達がありました。パンテレイ・ゴルノスターエフといつて、無二の親友なのです。御存じありませんか？ この男がああ娘にすつかり參つてしまひましてね、まるで奥様なみにあれの手を接吻するといふ有様でしたよ、本當に。正直に申し上げますが、このゴルノスターエフは私なんかと同目の談ぢやない、教育のある男でしてね、プーシキンなど全部讀んでゐました。よくマトリヨーナや私などを相手に話を始めると、こちらは思はず聞

き惚れてしまふ位でした。これが物好きにも、あの娘に讀み書きを仕込んでくれました！ また私は私で一生懸命にマトリヨーナを着飾らしてやりました。……それこそ縣知事夫人も叶はない位。毛皮の縁をとつた緋天鵝絨の毛皮外套を作つてやりましたが。……いや、その外套のうつりのよいこと！ この外套はモスクワのマダムが新型で仕立てたもので、腰のところがぎゆつと締まつてゐるんです。ところで、マトリヨーナは實に風變りな女でしてね！ どうかするとちつと考へ込んだまゝ、何時間も何時間も坐つて、床を腫めたつきり、眉一つ動かさうとしない。私も同じやうに坐つて、その顔を眺めてゐるのですが、いくら視ても見飽きるといふ事がない、まるで初めて見るやうな氣持ちなんです。……その中に、あれがにつこり笑ふと、私の心臓は誰かに櫟られてもしたやうに思はず躍り出すのです。かと思ふとだしぬけに笑ひ出して、巫山戯たり、踊つたり、烈しい愛情を籠めてぎゆつと私を抱き締めたりするので、思はず頭がぐら／＼とする程でした。朝から晩まで、私はどうしたらあれを喜ばす事が出来るかと、たゞそればかり考へてゐました。お察しでもありませんが、私があるに物を買つてやるのは、たゞ可愛いあの娘がどんなに喜ぶか、それが見たいばかりなのでした。嬉しさの餘りに顔を赧らめて、私の贈ものを身體に合はせてみたり、新しい衣裳を着て、傍へ寄りながら私を接吻する、さういふ様子を見たい一念からしてね。その中に、どういふ筋を辿つて来たのか知りませんが、娘の親爺のクリックが、一切の様子を嗅ぎつけたのです。親爺はやつて来て私たちを見ると、いきなりおい／＼泣き出すぢやありませんか。……こんな風にして、五ヶ月ばかり暮らしました。まだ／＼一生涯でも、あの娘と一緒に暮らし兼ねない勢ひだつたのですが、しかし、私はよく／＼廻り合せの悪い男なんですわね！」

ピョートル・ペトロギッチは言葉を切つた。
 「一體どんな事が持ち上がったんです？」と私は思ひ遣り深い調子で訊ねた。
 彼は片手を振つた。

「何も彼も滅茶苦茶になつてしまつたんです。しかも、私が自分であの娘を臺なしにしたんですからね。マトリヨーナは霧を乗り廻すのが滅法好きで、時には自分で手綱を取つたものでした。例の毛皮外套を着て、刺繡のあるトルジョーク皮の手袋をはめて、澄んだ聲で馬を追ふのです。私達は何時も夕景になつてから出掛けました。ね、お分かりでせう、誰かに出會すといけなからです。さて或る時、雲晴らしいうつてつけの日に當りました。寒さが冴え返つて、空は晴れ渡り、風もなく、二人は乗り出しました。マトリヨーナが手綱をとつたわけです、ふと、私は一體どこらへ向けてゐるのか氣になりました。元の御主人の持ち村のククエフカではあるまいか、と思つて見ると、紛れもない、ククエフカに向いてゐる。私は『お前、氣でも狂つたのか、どこへ行かうといふのだ？』と聲をかけますと、あれは肩越しに振り返つて、にっこり笑ふのです。『一寸景氣よくやらして頂戴な。』とでも云ひたさうな按配なのです。『は、あ！』と私は考へた。『一つ無鐵砲にやつてのけるか！ 元の主人の家の前を走らせて見るのも面白からう？』ね、面白いでせう——さうぢやありませんか？ そこで、どん／＼馬を走らせました。眞ん中につけた秘藏の跑足はまるで遊ぶやう。脇馬はまるで、あなた旋風のやうな勢ひで走るのでした。そのうちに、もうやがてククエフカの教會が見えて來ました。その時ふと見ると、古風な緑色の馬車が街道傳ひのろ／＼とやつて來て、後ろの別當臺に従僕が突つ立つてゐるのまで見える。奥様だ、奥様がやつて來る！ 私は流石にたち／＼となつたものですが、マトリヨーナはいきなり馬

に手綱を當てて、まつしぐらに向かうの馬車をめがけて遮二無二に飛ばせて行くのです。向かうの馭者は、その、なんですよ、アルキメレス(アルキメデスの訛り、何の意味も、ない罵言として用ひられてゐる)のやつめ、どこかの車が出會ひしに飛んで來るのを見て、少し脇へ避けようとしたんですね、ところが、あまり急にやり過ぎたものだから馬車を雪の吹き溜まりに引つ繰り返してしまつたのです。硝子はこぼれるし、奥さんは『あれ、あれ、あれ！ あれ、あれ、あれ！』とばかり悲鳴をあげるし、お話し相手の娘は『捕まへて！ あいつを捕まへて！』と金切り聲を出す。私たちはまつしぐらにその傍を駆け抜けました。逃げて行きながらも、私は心の中で『こいつは困つた事になるぞ、ククエフかなぞへ來させなけりや好かつた。』と考へました。ところで、それからどうなつたと思ひます？ 奥様はマトリヨーナに氣がついたのです。それに私の顔もちやんと見分けて、意地悪る婆あ、私を訴へたわけなのです。『私の手許から逃げた女中が地主のカラターエフの所に居ります。』といふ譯で、早速いつもの傳で袖の下を使ひました。私は何も知らないであると、警察署長がやつて來るぢやありませんか。署長は私と知り合ひの間柄でしてね、ステパン・セルゲエキッチ・クゾフキンといふいゝ男です。いや、實のところは、別にいゝ男でもなかつたのです。さて、この男がやつて來て、『かく／＼の次第ですが、ピョートル・ペトロギッチ、一體どうしてそんな事をなすつたんです？ …責任重大な事柄で、これに對しては、ちやんと法律の明文があるんですからね。』と云ふ。私はそれに答へて、『いや、その事は勿論ゆつくりお話しなくちやならないけれど、まあ、道中の疲れやすめに一口やりませんか？』先方は一口やるのは、二つ返事で承知したけれど、それでも『司直の義務といふ奴がありますからね、ピョートル・ペトロギッチ、よろしくお察しを願ひます。』と來た。そこで私は、『司直の義務、そりやその通りです。そりや勿

論……ところで噂に聞くと、あなたは黒毛の馬を一頭持つてゐられるさうですね、一つそれを私のランブルドスと取り換へませんか……それにしても、マトリヨナ・フォードロヴナなんていふ娘は家にゐないから。」と云ひました。「なあに、ピョートル・ペトロギッチ、娘はお宅に居ますよ。何しろこゝは瑞西やなんかとは譯が違ひますからね……尤もうちの馬とランブルドスと取り替へるのは構ひませんよ、なんなら直ぐ貰つて行つてもいい。」といふ返事。でも、その時はどうやら追ひ歸しました。ところが、お婆さんはいよく躍起になつて、何萬ルーブリかゝつても金に糸目につけないと云ふ。實のところ、初めて私に會つた時、急に例の青い着物を着た話し相手の娘を私に娶せようといふ量見を起したんです。これは後から分かつた事なんですが、つまり、これがためにお婆さん、かん／＼になつて怒つた譯なんです。かういふ奥さん連は全く何を考へ出すか知れやしない……！ 退屈まぎれでせうよ、きつと。私はだん／＼苦しい破目になつて來ました。こつちも金を惜しまないでマトリヨナを隠したものです——結局は駄目でした。みんなから食ひ物にされて、ひどい目に遭はされた揚句、借金は出来る、身體は悪くなる、といふ有様……ある時、私は床の中に横になつて、「あゝ、情けない、なんの因果でこんな目に遭ふんだらう？ でも、あれのことを思ひ切れない以上、どうも仕方がないぢやないか？……いや、思ひ切れない、これはどうにもならない事だ！」こんなことを考へてゐると、出し抜けにマトリヨナが部屋へ入つて來ました。その頃、私は邸から二露里ばかりある農場にこの女を隠まつて置いたのです。私は吃驚りして、「どうしたのだ？ あそこでもやつぱり見附かつたのか？」といふえ、ピョートル・ペトロギッチ、ブノフに居れば、誰も私などにかまふ者はありません。けれど、こんな事が何時まで續くのでせう？ わたしは胸が張り裂けさうですわ、ピョートル・ペト

ローギッチ。わたしはね、あなたがお氣の毒で堪りませんの、あなたのお情けは 生忘れません。ピョートル・ペトロギッチ、でも今夜はお別れに參りましたの。」と云ふぢやありませんか。「なに、何を云ふのだ、氣でも違つたのか？……別れるつて？ 別れるとは何事だ？……何でもありませんわ……わたし自分で行つて、正直に名乗つて出ますから。」そんな事をさせるものか、この氣狂ひ、俺はお前を屋根裏に閉ぢ込めてしまふぞ……それとも、お前は俺を臺無しにしちまふ積りか？ 生殺しにする積りか？」娘はちつと黙り込んだまゝ、床を踏めてゐるのです。「さあ、返事を聞かしてくれ、返事を！」わたし、この上あなたに御迷惑をかけたくありませんの、ピョートル・ペトロギッチ。さあ、かうなつたら、なんといつても人の言葉を聞く事ぢやありません……！ だが、お前自身でも合點が行きさうなものだが、馬鹿だな、一體これが分からないのか、き……きちがひ……！」

かう云ひさして、ピョートル・ペトロギッチは烈しく歎息り上げて泣き出した。「それで、どうなつたと思ひです？」と彼は拳でテーブルをとんと叩いて言葉を續けた。眉をしかめようと努めたけれど、涙は熱した頬を傳はつて絶えず流れ續けるのであつた。「娘は本當に我と我が身を渡してしまつたのです——自分で名乗つて出て、身を渡してしまつたのです——」

「馬の用意ができました！」驛長が部屋へ入りながら、物々し氣に叫んだ。私たちは二人とも立ち上がった。

「で、マトリヨナはどうなりました？」と私は訊いてみた。カラターエフはたゞ片手を振つたばかりである。

カラターエフに逢つてから一年ばかり経つて、私は偶々モスクワに行つた事がある。ある時、食事の前に私は獵師横町の向かうにあるカフェーに寄つた。——それは風變りなモスクワ風の店なのである。玉突き部屋では、浪のやうに漂ふ煙草の煙の間から、眞つ赤になつた顔や口髭や、高く梳き上げた髪の毛や、時代おくれのハンガリイ式の上着や、最新流行のスラヴ型の上着などが、目まぐるしくちらつてゐる。質素なフロックを着た、小柄な瘦せた老人達は、露西亞新聞などを讀んでゐる。給仕が盆を持つて、緑色の絨毯の上を柔かに歩きながら、元氣のいゝ姿をちら／＼させてゐる。商人達は、呼吸がつまりさうなほど緊張した顔付きで茶を飲んでゐる。ふいに玉突き部屋から少し髪を亂して、足許のやゝ覺束ない男が出て來た。兩手をポケットへ入れ、首を垂れ、無意味に四邊を見廻した。

「やあ、これはこれは……ピョートル・ペトローギッチ！……お變りありませんか？」

ピョートル・ペトローギッチは殆んど私の首にぶら下らないばかりにして、幾つか身體をふらつかせながら、小さな別室へ私を引つ張つて行つた。

「さあ、こちらへ、」こまめに私を舷椅子に掛けさせながら、彼はかう云つた。「こゝが具合がよろしいでせう。給仕、ビールだ！ いや、違ふ。三鞭酒にしよう！ でも正直なところ、思ひがけなかつたですね、全く思ひがけませんでしたよ……こちらには大分前から？ 暫く御滞在で？ これこそ所謂、神さまのお引き合せですね……」

「さう、お覺えでせうが……」

「覺えてゐますとも、覺えてゐますとも。」と性急に私の言葉を遮つた。「あれも昔のことになつてしまひましたよ……昔の事に……」

「さて、こちらでは何をしています、ピョートル・ペトローギッチ？」

「どうにかからにかやつてゐますよ、御覽の通りだね、こゝの暮らしは氣持ちが好いですよ。土地の人たちもみんな愛想がよくつて。こゝで、私もどうやら落ちつきましたよ。」

かう云つて、彼は溜め息をつき、眼を上に向けた。

「お勤めの方でも？」

「いや、まだ勤めては居りませんが、近々就職しようと思つてゐます。然し、勤めなんて始まりませんよ……人間同志のつき合ひ——こいつが一番肝心なこととしてね、私もこゝで随分面白い連中と近附きになりましたよ……」

少年が三鞭酒の壺を益に載せて持つて來た。

「それ、この子だつてなかくいゝ人間ですよ……さうぢやないか、ワーシヤ、お前はいゝ人間だらう？ お前の健康を祝して乾盃だ！」

少年は暫くそこに佇んで、行儀よく一揖すると、につこり微笑んで出て行つた。

「さやう、この土地の人は氣立てがいゝですよ。」とピョートル・ペトローギッチは言葉を續けた。

「人情もあれば、眞ごゝろもあつて。なんなら御紹介しませうか？ 實に氣持ちのいゝ連中ですよ……あなたが見えたら、みんな喜びますよ。私はちやんと申し上げておきますが……ときにボブロフが死にましてね、實にがっかりしましたよ。」

「ボブロフつて誰のことです？」

「セルゲイ・ボブロフ。いゝ男でしたつて、私のやうな野育ちの、無教育な人間をよく面倒を

見てくれました。それから、パンテレイ・ゴルノスターエフも亡くなりましたよ。みんな死ん
ちまひました。みんな！

「あなたはずつとモスクワにお暮らしてしたか？ 田舎の方へはお出向きになりませんか
た？」

「田舎ですつて……私の村は賣られてしまひました。」

「賣られた？」

「競賣になつたので……さう／＼、あなたにでも買つて頂くと好かつたんですがなあ！」

「これから何をして食つて行くつもりです。ピョートル・ペトローギッチ？」

「まさか餓死もしやしますまい。なんとかなりますよ！ 金はなくとも、友達がありますから
ね、それに金なんか何でせう？——塵芥だ！ 黄金なんて——芥みたいなもんだ！」

彼は眼を細めて、ポケットの中を探つてみたが、やがて掌の上に十五コペイカの銀貨二枚と十
コペイカの銀貨一枚を載せて、私の方へ突き出した。

「これが何でせう？ 塵芥ぢやありませんか？（金子は床の上にけし飛んだ。）まあ、それより一
つお訊ね致しますが、あなたはポレジャーエフをお讀みになりましたか？」

「讀みました。」

「モチャーロフのハムレットを御覽になりましたか？」

「いや、見ません。」

「御覽にならない、御覽にならないですつて……（カラターエフの顔はさつと蒼くなつて眼は
不安げにきよと／＼動き出した。彼はつと顔をそむけた。軽い痙攣が唇の上を走つた。）あゝ、モ
チャーロフ、モチャーロフ、『この世を終るは眠りに入るのぢや』と彼は響きのない聲で云つた。

たゞそれだけぢや……この眠りが
生命をも、生きとし生ける人の運命なる

幾百千の苦難をも絶つてくれよう……かゝる最後こそ
心から底から願はしい！ 死ぬるのは……眠りに入るのぢや……

「眠りに入るのぢや、眠りに入るのぢや！」と彼は幾度か獨り言のやうに繰り返した。

「ちよつと伺ひますが、」と私は云ひかけた。けれど、彼は熱を帯びた調子で白を續けた。

誰か俗世の笞や嘲りや

掟の無力、暴君の壓制

誇れる者の凌辱、棄てられし戀

功業を蔑しむ衆愚の笑ひに耐へ得よう、

あゝ何時の日に死のひと打ちが

安ひを齎らすことか……おゝ、そちの聖い祈りに

わが罪の消滅をも念じ添へてたもれ！

かう云つたと思ふと、彼は卓の上に頭を落とした。彼は吃り／＼管を巻き出した。

「それから一と月たつて！」と、更に新らしい力を籠めながら云ひ出した。

早くも過ぎし短い一と月！

涙に暮れて我が父の哀しき骸に

従ひたまひしその沓さへも

いまだ破れぬその暇に！

あゝ神よ！ 辨へもない物云はぬ黙すら

今しばらくは哭かうものを……

彼は三鞭酒の盃を唇へ持つて行つたが、皆まで飲み乾さずに、なほも續けるのであつた。

へキューバゆゑに？

彼はへキューバにとつて、又へキューバは彼にとつて何者ぞ！

何しに彼はへキューバの上を哭くのだや？……

然るにわしは……小心翼々の賤しい奴隷で……

臆病ものぢや！ わしをやくざと呼ぶは誰？

わしを嘘つきと云ふのは誰ぢや？

わしは侮辱をも忍ぶであらう……さうぢや！

わしは意氣地のない男で、癩といふものがない。

凌辱もわしに取つては苦うないのぢや……

カラターエフは盃を落として、両手で頭を抱へた。私は彼の心持ちが分かつたやうな氣がした。

「まあ、どうなるものか。」と彼は最後にかう云つた。「昔のことを云ひ出す者は鬼になれだ……さうぢやありませんか？（といつて彼は笑ひ出した。）さて、あなたの御健康を祝して、一杯やりませう！」

「あなたはこのまゝずっとモスクワにおいでになりますか？」と私は訊ねた。

「こゝを死場所と心得てゐます！」

「カラターエフ！」といふ聲が隣りの部屋から聞こえた。「カラターエフ、どこにあるんだい？こつちへ來ないか、親愛なる我が友よ！」

「私を呼んでゐますから、重々しく椅子から身を起こしながら、彼は云つた。「失禮します。およろしかつたら遊びにいらして下さい。私は***に住んでゐますから。」

けれども、思ひ設けない事情のために、私は翌日モスクワを發たなければならなかつた。それ以來、ピョートル・ペトロギッチ・カラターエフには二度とめぐり逢はなかつた。

あひびき

秋は九月半ばの頃、私は白樺の林に坐つてゐた。朝早くから小雨がぱらついて、時折りは生暖かい日かげが差し覗く、愚圖ついた天氣模様であつた。空は一面に頼りない白雲で隠されるかと思ふと、不意にまたちよつとの間、ところ／＼雲ぎれがして、押し分けられた叢雲の間から、見るからに懐かしい澄みきつた蒼空が、美しい眼のやうに差し覗く。私は坐つたまゝ、あたりを見廻し、耳を澄ましてゐた。木の葉は頭上で微かなざわめきの音を立ててゐたが、その音を聞いたばかりで季節が知れる。それは、樂しげに笑ふがやうな春のさゞめきでもなければ、夏のもの柔かな囁きや、長話しめいた聲でもなく、晩秋のおど／＼した薄寒さうな呟きでもなくて、やうやく聞き取れるか聞き取れないほどの眠さうなお喋りなのであつた。弱々しい風が忍び音に梢を渡る。雨に濡れた林の中は、太陽の照り曇りにつれて絶えず趣きを變へてゐた。時には、そこにあるほどのものが急に微笑んだかと思はれるほど、ぱつと一面に照り映えて、さして茂り合つてもゐない白樺の白い幹が、忽ち白絹のやうな織りらしい反射を受け、地に散り敷いてゐる細かい樹の葉には俄かに濃淡が出来、ぱつと金色に燃え立つ。高く伸びておどろの髪を振り亂し、早くも熟れ過ぎた葡萄の色に染められた羊歯の美しい莖は、果てしもなく纏れつ絡みついて遠く透いて見える。かと思ふと、不意にまたあたりのものみなが微かに青みがかつて来て、鮮かな色は瞬く間に消えてしまひ、白樺はみな白々と光澤もなく立つてゐる。その白さは、まだ寒々／＼とちらつく冬の日の光りに觸れぬ、降りたての雪のやう。——やがて、こつそりと人を出し抜き顔に、細かい霧

雨が篩で濾したやうに落ちて来て、ささやきの音を立てる。白樺の葉は目に見えて色あせてはゐるものの、まだとにかく緑色をしてゐたが、たゞそこ／＼に若木のすつかり赤く染まつたのや、金色になつたのが一本づつ交じつてゐて、雨に洗はれたばかりの細い枝のこまかい網目ごしに、日光がちら／＼と滑りながら洩れて來るとき、その紅葉が一面に華やかに燃え立つのは見ものであつた。一羽の鳥の聲も聞こえない。みなそれ／＼隠れがに落ちついて、鳴りを潜めてゐるのである。たゞ時々、あざみ笑ふやうな四十雀の聲が、鋼の鈴のやうに響き渡るばかりである。私はこの白樺の林に足を止める前に、高い泥楊の林を犬をつれて通つて來た。私は正直なところ、あまりこの泥楊といふ木を好まない。薄く紫がかつた幹をして、鼠っぽい、緑色の金屬性を帯びた葉を出来るだけ高々と上げ、慄へ動く扇のやうに空へ擴げてゐる恰好も厭なら、長い葉柄に不恰好にくつつけたやうな、圓いだらしない葉も好きでない。この木が好ましいのは、低い藪の中に高く聳えて、赤々とした落日の光りを眞正面に受け、根もとから頂きまで同じ黄がかつた茜色に染まつて、輝きつ慄へつしてゐる夏の夕べか、さもなくて、風のある晴れた日にざわ／＼と騒がしく一方に吹き靡かさされ、青空に言葉を投げちらし、一枚々の葉が揉み立てられて、遠く千切れて飛んで行かうとでもしてゐるやうな時である。けれども、私は大體がこの木を好かないので、泥楊の林に足を止めて休まうとせず、この白樺の林まで辿りつき、地上わづか離れたところから下枝が差し出て、従つて雨凌ぎの用にも立ちさうな一もとの木蔭にうまく腰を据ゑ、あたりを景色を一わたり眺めて、銃獵家でなければ味の分からない、例の靜かに圓やかな眠りに落ちたのである。

どのくらゐ眠つたか分からないが、私が眼を開けて見ると、林の中は日が一ぱい漲つてゐて、

どちらを見ても、嬉しさうに騒ぐ葉叢を透かして鮮やかな蒼空がさし覗き、閃々と輝いてゐる。雲は急に吹き起こつた風に追はれて姿を隠し、からりとした日和になつた。空氣の中には、何となく人の心を引き立たせるやうな爽かさが感じられた。これは大抵いつも、一日鬱陶しい天氣が續いた後で、静かな澄み渡つた夕暮れの前ぶれとなるものである。私は起き上がつて、もう一度獵運をためて見ようと思つた。と、不意にちつとして動かぬ人影が眼に映つた。よく見るとそれは若い百姓娘である。私から二十歩ばかり離れたところで、物思はしげに俛首れ、兩手を膝の上に落として坐つてゐる。半ば開かれた片方の手には、太く束ねた野の花を載せてゐたが、娘が息をする度に少しづつづつて、格子縞のスカートへ落ちて行く。喉と手首のところにきちんと鈕をかけた、小ざつぱりした白い襦衣は、短い柔かな髪を方々に見せながら娘の身體を包み、大粒な黄色い飾り玉が、二重に頸から胸もとへ垂れてゐる。娘は中々の縹緞よしであつた。美しい、灰色をした、白つぼい房々とした髪を丁寧に梳かして左右に分け、象牙のやうに白い額へ深々と被せた眞つ赤な幅の狭い布の下から、二つの半圓を描いて覗かしてゐる。顔のその他のところは黄金いろに焦けてゐたが、それは皮膚の薄い者にしか見られない焦け方である。さし俯向いてゐるので、目は見えなかつたが、細く秀でた眉と睫毛だけは見分けられた。睫毛は沾んでゐて、片頬からやゝ蒼ざめた唇のわきへかけて涙の跡の乾いたのが、太陽に光つて見える。娘の頸から上はどこを取つて見ても變くるしかつた。少し大きくて圓みのある鼻までが疵にはならない。とりわけ氣に入つたのは顔の表情である。少しも氣取つたところがなく、慎ましやかで、さも／＼悲しさうであるが、その悲しみがよく合點のゆかないやうな、子供らしい頼りなさ一杯に溢れてゐる。娘は誰やら待つてゐるらしかつた。林の中で何かちよつと微かな物音がすると、すぐに首

を上げて、四邊を見廻すのであつた。その度に目の前の透きとほるやうな木蔭に、牝鹿みたいにおど／＼した大きな明るい眼がちらりと素早く光る。娘は暫くの間、微かな物音のした方へ大きく見開いた眼をそ／＼と、一心に聞き耳を立ててゐたが、やがて溜め息をついて、しづかに頭を轉じ、前より一そう低く俛首れて、ゆる／＼と花を爪繰り始めた。臉は赤らみ、唇は悲しさうに慄へる。またもや涙が一しづく濃い睫毛の下から流れ出して、頬の邊で止まり、きら／＼と輝いた。かうしてかなり長い時が過ぎた。可哀さうな娘は身じろぎもしない——たゞ時折り惱ましげに手を動かして、ただひたすらに耳を傾けてゐた。また林の中で何やらざわ／＼といつた——娘はびくりとした。物音は小止みなく續いて、次第にはつきり聞き分けられ、近づいて来る。遂にしつかりした、忙がしさうな足音が聞こえるやうになつた。娘はきつと身を反らしたが、何となく怖氣づいたやうな風である。その注意を籠めた眼ざしは、待ち遠しさの思ひで慄へてゐるやう。繁みの間から一人の男の姿が忙しなくちら／＼して來た。娘はちつと見透かすと、忽ち顔を赧らめて、さも嬉しげに仕合せらしく微笑んだ。立ち上がらうとしたけれど、直きに又ぐたりとなつて、色蒼ざめどぎまぎしてしまつた——そして、男が來て並らんで足を止めた時、やうやくおど／＼した、祈るやうな目を上げたばかりである。

私は好奇の念を抱きながら、物蔭から男を覗いて見た。正直なところ、私はこの男から好い印象を受けなかつた。これはどこから見ても、若い金持ちの地主に使はれてゐる小生意氣な従僕であつた。着物はいやに粹がつて、伊達者らしい無頓着なところを見せようとしてゐる。まづ御主人のお下がりの青銅色の短い外套を着て、鈕を上から下まできちんとかけ、先きの方を薄紫に染めた薔薇色のネクタイを締め、金筋入りの黒天鵞絨の縁なし帽を肩の隠れるほどに被つてゐ

る。白い襦衣の赤い襟は容赦なく兩耳を突きあげて、頬に食ひ込んであるし、しこたま糊の利いたカフスは、勿忘草を象どつた土耳古玉入りの金指環や銀指環を嵌めた赤い曲がつた指の見えないほど、手首ぜんたいを隠してある。紅みがさして生き／＼した人を人とも思はぬ顔は、私の觀察したところによると、男には殆んど例外なしに反感を起こさせるのであるが、女には残念ながら大抵の場あひ氣に入られる、さういつた種類のものに屬してゐた。男は下品な顔つきに人を馬鹿にしたやうな、退屈さうな表情を浮かべようとしてゐるらしく、それでなくても小さい灰がかつた乳色の眼を細めたり顔を顰めたり、唇の兩隅を下げたり、わざとらしく欠伸をしたり、無頓着を装ひながら、餘りすつきりしない狭／＼で勇ましく捲き上がつてゐる赤ちやけた揉み上げを直してみたり、厚い上唇にびん／＼立つてゐる黄色い鬚を引つばつてみたり——と口に云へば、蟲唾が走るほどに氣取り散らすのである。自分を待つてゐる若い百姓娘の姿を見るなり、男はさつそく氣取り出した。のつし／＼とした足取りで娘に近づくと、ちよつと立ち止まつて、兩肩を一つ揺すぶり、哀れな娘にちらと氣のない一瞥をお情けにくれて、地べたへ腰を落ちつけた。

「え、どうだい、」と、相變らず何處かそつぽを見ながら、片方の足をぶら／＼させ、欠伸まじりから訊ねた。「前つからこゝにゐるのかい？」

娘はすぐには返事が出なかつた。

「え、前から、ギクトル・アレクサンドルイチ。」娘はやつとこのことで、聞きとれるかとれないほどの聲で云つた。

「は、ん！」彼は帽子をぬぎ、殆んど眉のそばから生えてゐる細かく縮らした濃い髪の手き、ものしげにひと撫でして、大様にあたりを見廻した後、また丁寧に帽子を被つて大切な顔を隠してしまつた。「俺はすっかり忘れかけてゐたよ。おまけに、それ、この雨でな！（彼はまた欠伸をした。）用事は山ほどあるし、いち／＼眼が届くもんぢやない。それに、うつかりしたらお目玉を食ふからな。ときに、俺たちは明日發つんだぜ……」

「明日？」と娘は云つて、おびえたやうな眼ざしを男に向けた。

「明日さ……おい、おい、おい、頼むぜ。」娘が全身を慄はして、聲もなく差し俯向いたのを見て、こちらは急ぎ込んで忌々しげに押し被せた。「お願ひだから、アクリーナ、泣くのだけは止してくれ。そいつが俺、大嫌ひなのは、お前も知つてるだらう。（かう云つて、先きの圓い鼻に皺を寄せた。）やめなきや今すぐ歸るよ……何て馬鹿な、めそ／＼するなんて！」

「え、もう泣かないわ、泣かないわ。」とアクリーナは無理に涙を呑みながら、慌てて云つた。

「ぢや、明日お發ちなんですか？」暫く黙つてゐた後で、かう云ひ足した。「本當にいつまたお會ひ出来ることやら、ギクトル・アレクサンドルイチ？」

「會へるよ、會へるよ。來年でなけりや、またその後でも。旦那はペテルブルグでお勤めでも始めたいやうな御様子だ。」と、彼は無造作な調子で、少し聲を鼻にかけながら云つた。「もしかしたら外國へでも旅立つか知れないぜ。」

「あなた私のことなんか忘れておしまひになるでせうね、ギクトル・アレクサンドルイチ。」とアクリーナは悲しげに云つた。

「いや、なかに、俺がお前のことを忘れてなるもんか。だが、お前もいゝ年をして、つまらん眞似をするんぢやないよ、親父さんの云ふことをちやんと聽くんだぜ……俺は忘れやしないさ——

「どうして。」(かう云ひながら平氣でのびをして、それからまた欠伸。)
 「忘れないでね、ギクトル・アレクサンドルイチ。」と娘は祈るやうな聲で言葉を續けた。「わたし、どうしてからもあなたが好きになつたんでせう、何もかもあなたがあればこそ、といふ氣がするんですもの……ギクトル・アレクサンドルイチ、あなたはお父つあんの云ふことを聽けと仰つしやるけれど……だつて、わたしどうしてお父つあんの云ふことなんか聽けると思つて……」
 「なんだつて?」男は仰向けに臥そべつて、両手を頭の下に支ひながら、吐の中から押し出すやうな聲でかう云つた。

「だつてギクトル・アレクサンドルイチ、あなただつて分かつてらつしやるでせう……」
 娘は口を噤んだ。ギクトルは時計の鋼鐵の鎖を玩弄にし出した。

「なあ、アクリーナ、お前もまんざら馬鹿な娘ぢやないんだから、」たうとう男は云ひ出した。「わけの分からないことを云ふもんじゃないやねえ。俺は、お前のためを思へばこそ云つてるんだ、それが分からないのかい? 勿論、お前は馬鹿ぢやない、云はばずぶの百姓ぢやないんだ。お前のお母親だつて、いつも百姓ばかりしてゐたわけぢやない。が、さうは云つても、お前はとにかく教育を受けてゐない——だから、人が教へてくれたら、ちやんと聽くもんだよ。」

「でも、怖いんですもの、ギクトル・アレクサンドルイチ。」

「ちよつ、何てつまらない事を云ふ娘だ。一體なにが怖いんだい! そりや何だね。」と傍へすり寄つて云ひ足した。「花かい?」

「え、花。」とアクリーナは沈んだ聲で答へた。「これはね、わたし野原で鋸草を摘んで來たの。」と娘はやく元氣づいて言葉を續けた。「これは牛の仔に食べさせるといふの。それから、これがほら

狼狽葉——瘰癧に利くんですよ。ほら御覽なさい、何て綺麗な花でせう。こんな綺麗な花、わたし生まれで見はじめだわ。これ勿忘草、それから、これは匂ひ堇……それから、これはわたし、あなたに上げようと思つて。」と、黄色い鋸草の下から細い草で縛つた空色の矢車菊の小さな束を取り出して娘はかう云ひ足した。「おいや?」

ギクトルは大儀さうに手を伸ばして、花を受け取ると、無造作に匂ひを嗅いで、氣取つた物思はしげな様子で空を見上げながら、指先きでくる／＼花束を廻し始めた。アクリーナはちつと男を見つめてゐる……その沈んだ眼眸には、身も心も男に捧げ盡くして、神様のやうに崇めつゝその意に従はうとする、千萬無量の愛情が溢れてゐた。娘は男を恐れてもゐたので、思ひ切つて泣くことも出來ず、心の中で別れを告げながら、これを名残りとその男に見慌れてゐたのである。ところが、男はまるでサルタンのやうにふんぞり返つて、厭でたまらないけれど、格別のお慈悲で我慢してやるといふやうに、娘が崇めるやうな眼つきで見入るのを差し許して置いた。私は白状するが、義憤を感じながら、その赤ら顔をつくつく眺めた。そこにはいかにも作りものらしい人を小馬鹿にした平氣さうな表情の蔭から、自惚れきつて脂さがつてゐる様子が覗いてゐるのであつた。アクリーナはこの時もやはり美しかった。その心はすつかり信じきつたやうに、熱く燃え立ちながら、男の前に底の底まで打ち開き、憧れ渡りながら、懐かしく寄り添はうとしてゐるのに、こちらは……こちらは矢車菊を草の上に落としてしまつて、外套の脇かくしから青銅縁の圓い片眼鏡を取り出して眼の凹みへ嵌め込みにかゝつた。けれど、どんなに眉を蹙め、頬や鼻まで持ち上げて保たせようと苦心して見ても、眼鏡はのべつ外れて、掌へ落ちて來るのであつた。

「それ。なに？」吃驚りしたアクリーナが到頭から訊いた。

「片眼鏡さ。」と男は勿體ぶつて答へた。

「なんにするもの？」

「よく見えるからさ。」

「借して頂戴。」

ギクトルは顔をしかめたが、それでも眼鏡を渡した。

「毀すんじゃないよ、いゝかい。」

「大丈夫、毀しやしないから。」（娘はおづ／＼と眼鏡を眼のところへ持つて行つた。）「なんにも見えない。」とあどけなく云つた。

「お前、眼を細くするんだよ。」機嫌の悪い先生といった調子で男はきめつけた。（娘は眼鏡を當てがつてゐる方の眼を細めた。）「いや、そつちぢやない、そつちぢやない、馬鹿だな！こつちの方だよ！」とギクトルは聲を擗すらせて、娘がその間違ひを直す暇もなく、眼鏡を取り上げてしまつた。

アクリーナは顔を赧らめて、ほんの心もち笑ひながらわきを向いてしまつた。

「どうやら、わたしたちの持つもんぢやないと見えるわ。」

「當たりまへよ！」

可哀さうに娘は黙り込んで、ほつと深い溜め息をついた。

「あゝ、ギクトル・アレクサンドルイチ、あなたがいらつしやらなくなつたら、わたし、どうなるでせう！」と娘は不意に云ひ出した。

ギクトルは服の裾で眼鏡を拭いて、再びもとのポケットへ藏ひ込んだ。

「あゝ、あゝ。彼はやつとのことであう答へた。」お前も初めの間は辛いだらう、そりやさうだとも。」（と、お情けに娘の肩を軽く叩いてやつた。娘はそつと自分の肩からその手を取つて、おづおづと接吻した。）「あゝ、さうとも、さうとも、お前、本當にいゝ娘だよ。」と獨りよがりの微笑を浮かべて、男は續けた。「だけど、どうにも仕様がなないぢやないか？自分でもよく考へて見るがいゝ！俺も旦那も、こゝに便々としてゐられないぢやないか。やがてもう冬になるが、田舎の冬と來たら——お前、自分でも分かつてゐるだらうが——全くやり切れたもんぢやありやしない。ところが、ペテルベルグとなると、まるで話が違ふさ！あつちへ行きや、それこそ目を廻すやうなことばかりで、お前のやうな田舎女は夢にも見たことがない位だぜ。家並みは素晴らしいもんで、通りの立派なこと、それに上流社會の人達、その教育のある立派な應對ぶり——いや、もう吃驚りする位だ！……（アクリーナは子供のやうに少し口を開けて、一心不亂に聞き入つてゐた。）「尤も、」と、男は地べたで寝返りを打つて云ひ添へた。「こんなことをお前に云つて聞かせたつて、何の足そくにもなりやしない。どうせ分かる氣づかひはないんだからな！」

「どうしてなの、ギクトル・アレクサンドルイチ？わたし分かつたわ、すつかり分かつたわ。」

「へえ、そりや大したもんだ！」

アクリーナは目を伏せた。

「もとはあなた、そんな話しぶりをなさらなかつたわ、ギクトル・アレクサンドルイチ。」と娘は目も上げないで云つた。

「もと？……もとだつて！ちよつ、お前は！もとだつて！」と、男はむつとしたやうに云つ

た。二人とも暫く黙つてゐた。

「それにしても俺はもう行かなくちや。」とギクトルは云つて、竝を立て、起き上がらうとした。

「もう少し待つて頂戴。」とアクリーナは祈るやうな聲で云つた。

「何を待つんだい？……もうお別れは済んだぢやないか。」

「待つて頂戴つてば。」とアクリーナは繰り返した。

ギクトルは又ごろりと横になつて、口笛を吹き出した。アクリーナはいつまでもその顔から目を放さなかつた。娘が少しづつ興奮して行く様子は、私の目にも見分けられた。唇がひく／＼と引き吊つて、蒼ざめた頬は微かに紅みを射して來た……

「ギクトル・アレクサンドルイチ。」たうとう娘は途切れ途切れな聲で云ひ出した。「あなた罪だわ……罪だわ、ギクトル・アレクサンドルイチ、ほんとに！」

「何が罪だい？」とこちらは眉を蹙めて問ひ返しながら、少し頭を待ち上げて、娘の方へ振り向けた。

「罪だわ、ギクトル・アレクサンドルイチ。せめてお別れに何か一言、やさしい言葉をかけてくれたつていゝぢやないの。何でもいゝから、たつた一言聞かせてくれたら、頼りのない心細い身の上にならうといふわたしに……。」

「だつて、一體なにを云ふんだい？」

「わたしを知るもんですか。そんなこと、あんたの方でちやんと分かてるぢやないの、ギクトル・アレクサンドルイチ。これから遠くへ行つてしまはうといふのに、せめてほんの一言くらゐ……何だつて、わたしこんな目に遭ふのか知ら？」

「お前も奇怪しなやつだな！ 俺に何を云ふことがあるんだい？」

「何とか一言くらゐ……。」

「ちよつ、一つことばか云つてやがら。」と男は忌々しげに云つて、起ち上つた。

「怒らないで頂戴、ギクトル・アレクサンドルイチ。」やつと涙を抑へながら娘は慌ててかう云つた。

「俺あ怒つちやゐないよ、たゞお前が分からねえもんだから……一體どうしてほしいんだ！ だつて俺、お前と夫婦になる譯にやいかないぢやないか？ え、さうだらう？ さあ、それならどうしてほしいと云ふんだ？ おい？」と、返事を待つてゐるといふやうに、顔を突きつけて、指を擴げた。

「私なんにも……なんにも要らないわ。」と娘は慄へる兩手を恐る／＼差し伸べながら、口籠り勝ちに答へた。「たゞね、お別れにせめて一言だけでも……。」

涙が瀧のやうに流れ出した。

「そうら案の定、泣き出した。」とギクトルは帽子をずらして目深に被りながら、冷然とした調子で云つた。

「わたし、なんにも望みはないの。」兩手で顔を蔽ひ、しゃくり上げながら、娘は言葉をつゞけた。

「でもわたし、これからうちにあたらどんな氣がすると思つて、わたしの氣持ちはどんなだと思つて？ わたしの身はどうなるでせう、どんなことになるでせう？ わたしみたいな不仕合せな者はないわ！ 氣に染まぬ人のとこへ嫁にやられるにきまつてる……なんて情けない身の上だら

う？」

「愚痴るがい、たんと愚痴るがい。」とギクトルは足を踏み變へながら、小さな聲で呟いた。「この人つたら、せめて一言くらゐ、たつた一言でも、『アクリーナ、おれは……』とか、なんとか……」

不意に胸を掻き捲るやうなしゃくり泣きが込み上げて來たので、しまひまで云ひ終へることが出来なかつた——娘は草の上に顔を伏せて、さも／＼切なさうに泣き出した……身體が痙攣でもするやうに波うつて、うしろ頭がひく／＼と持ち上がるほどであつた……慄へに慄へてゐた悲しみが遂に堰を切つて迸り出たのである。ギクトルは暫く立つて見下ろしてゐたが、ひよいと肩を疎めて踵を轉じ、大股に歩いて行つてしまつた。

しばらく経つた……娘は泣きやめて、頭を上げると、矢庭に跳ね起きて、あたりを見廻し、はたとばかり兩の手を打ち鳴らした。後を追つて駆け出さうとしたが、足ががく／＼して、娘はぱつたり膝を突いてしまつた……私は堪りかねて、娘のそばへ飛んで行つた。けれど、娘は私の姿を見るが早いか——どこからそんな力が出たものやら——弱々しい叫び聲を立てて起き上がり、地面に草花を投げ散らしたまゝ、木立ちの中に隠れてしまつた。

私は暫く立つてゐたが、やがて矢車菊の花束を拾ひ上げて、林の中から野原へ出た。太陽は淡く澄んだ空に低くかゝり、その日ざしさへも何となく薄れて、寒々として來たやうに思はれた。それはもう輝いてゐるのではなくて、濃淡のない水のやうな光りを漲らしてゐるばかりであつた。日暮れまでもう半時くらゐしかないので、夕焼けは微かに色づき始めたばかりである。烈しい風が、黄色く乾いた刈り入れ後の畑を渡つて、どつと眞正面に吹きつけて來る。小さなひぞ

つた木の葉が風を受けて忙しなげに舞ひ上がり、私のそばを掠めて、道を横ぎり、林の縁に沿つて飛んで行く。壁のやうに野の方へ向かつた林の片側は、一樣に慄へて、細かな光りをちら／＼させてゐる。はつきりとはしてゐるが、輝きがない。赤みがかつた草の上にも、細い芝の葉先きにも、藁しべの上にも、到るところに數しれぬ秋の蜘蛛の絲が光つて、波うつてゐる。私は足を止めた……私は侘びしい氣持ちになつて來た。凋れ行く自然のうそ寒い、けれど樂しげな微笑みの蔭から、間近い冬の陰慘な恐怖が忍び寄つてゐるやうな氣がした。用心ぶかく一羽の大鴉が翼で重々しく鋭く風を切りながら、頭上高く飛んで來たが、首を曲げて私を横目に見ると、さつと舞ひ上がつて、引き千切つたやうにかあ／＼と啼きながら、林の向かうに隠れてしまつた。夥しい鳩の群れが穀打場の方から勢ひよく飛んで來て、不意に柱のやうに圓を描いて振れ合つたと思ふと、ばら／＼と慌だしく野面に下り立つた——秋の徴である！ 誰やら空車の音を高らかに響かせながら、裸の丘の向かうを通つて行く……

私は家へ歸つた。けれども、哀れなアクリーナの傍は長いあひだ頭を離れなかつた。あの矢車菊は疾くに凋れたまゝで、今もなほ手もとに藏つてある……

シチグロフ郡のハムレット

あるとき遠出の獵のをり、私は金持ちの地主で銃獵家のアレクサンドル・ミハイリイチ・Gといふ人から食事の招待を受けた。その村は、當時私のゐた小村から五露里ばかり離れたところにあつた。私は燕尾服を着込んで、アレクサンドル・ミハイリイチの所へ出かけた。この燕尾服といふやつは、外出の場合、たとひ獵に出る時でさへ、必ず用意するやうに御忠告申し上げたい。食事は六時始まりといふことになつてゐた。私が着いたのは五時であつたけれど、もう制服や略服や、その他はつきりした名で呼び難いやうな服装をした貴族たちが、吃驚りするほど大勢集まつてゐた。主人は慇懃に私を出迎へたが、すぐさま侍僕部屋へ飛んで行つた。それはさる顯官の到着を待つてゐたので、彼ほどの押しも押されぬ社會上の地位と富には凡そ相應しくない位、それは／＼してゐたのである。アレクサンドル・ミハイリイチは今まで一度も結婚したことがなく、女を愛したこともなかつた。で、彼の家に集まる連中も獨身者ばかりであつた。彼は豪奢な暮らしをしてゐて、祖父傳來の邸を増築したり、華々しく裝飾したり、年々モスクワから一萬五千ルーブリからの酒を取り寄せなどして、廣く世間から絶大の尊敬を受けてゐた。アレクサンドル・ミハイリイチは疾くの昔官職を退いて、名譽ある肩書などは一向に欲しがらなかつた。それが一體どういふ譯で、晴れの晩餐會の當日、顯官の來訪を求めたり、朝早くからそは／＼してゐるのだらう？ この點は『未知の闇』に葬られてゐる。それは私の知人に當たる辯護士が、有志の人からの贈賄を受け取るかと聞かれた時、いつも持ち出す十八番の文句なので。

主人に別れてから、私は部屋から部屋をぶらつき始めた。客は殆んど誰も彼もが私の知らない顔ばかりであつた。二十人ばかりの人はもう歌留多のテーブルに向かつてゐた。この歌留多好きの連中には、品はあるけれど幾らか古ぼけたやうな感じの顔をした軍人が二人と、幅の狭い高く盛り上がったネクタイをつけて、てきばきはしてはゐるものの穩健主義の人にのみ見られるやうな、垂れ氣味の髭を染めた文官が幾人かゐた（かういふ穩健主義の連中は、さも勿體らしく歌留多をとり上げ、首を振り向けようともせず、近寄つて來る人たちにちらと流眄をくれるのであつた。）小さな丸つこい腹を突き出して、ぶよ／＼した手を汗ばませ、控へ目に足を動かさないでゐる郡役所の役人も五六人ゐ合せた（これらの諸君はもの柔かな聲で話し、四方八方へ優しい微笑を振り撒き、自分の持ち札を襯衣の胸もとへ押し附けるやうにして、切り札で切る時にも、卓をどん／＼叩くやうな眞似をしないどころか、却つてしとやかに、綠色の羅紗の上にふわつと札を落とす。そして、自分の取つた札を集める時にも、極めて慇懃な嗜み深い態度で、かるく卓をこするやうにしてゐた。）そのほかの貴族たちは、長椅子に腰をかけてゐるものもあれば、戸口や窓際に窮屈らしく塊まつてゐるものもあつた。その中で一人、もう年は若くないけれど女のやうな顔付をさせた地主が、片隅に佇んで誰もその方に氣を止めるものもないのに、びく／＼慄へたり、顔を根らめてもぢ／＼したり、時計の飾りにつけた印形を腹の上でいぢり廻したりしてゐた。先祖代々名を知られたモスクワの仕立屋でフィルス・クリューヒンといふ腕こぎが作つた丸味のある燕尾服に碁盤縞のズボンを穿いた別の紳士たちは、脂ぎつた禿げ頭を遠慮會釋もなく振り立てながら、恐ろしく磊落な調子で元氣に議論を闘はしてゐた。頭から足の爪先きまで黒ずくめの扮装をした、しよぼ／＼眼の、白つばい髪をした二十歳ばかりの青年は、眼に見えて怖氣づいてゐる

くせに、何やら毒のある微笑を洩らしてゐる……

それにしても、私はいくらか退屈になつて來た。その時ふいにダイニーツイン某といふ、大學を中途退學した若い男が私の話し相手になつてくれた。アレクサンドル・ミハイルイチの邸に暮らしてゐたが、その家庭内の位置は……どんなものとも一口には云ひ兼ねる。彼は射撃の名手で犬を馴らすこともうまかつた。私はまだモスクワにゐる時からこの男を知つてゐた。彼は試験の度に「直立不動の藝當」を演じる方の仲間であつた。つまり教授の質問に一口も答へなかつたのである。かういふ連中は云ひ廻しを面白可笑しくするために「髭書生」とも呼ばれてゐた（何分お察しもつくことと思ふが、これは遠い昔の話である）。さて、その藝當の實況はと云ふと、例へばダイニーツインが呼び出されたとする。それまでは自席で身動きもせず、鯁こばつてゐたダイニーツインは、頭から足の先きまで熱い汗でびっしょりになり、のろ／＼と無意味に四邊を見廻しながら立ち上がつて、制服の釦を上まで一つ残さずそ／＼と掛け、試験官の卓を指さして横むきのやうな恰好で歩いて行く。「さあ、試験票を取りなさい。」と教授は朗らかに云ふ。ダイニーツインは手を伸ばし、慄へる指先で幾つかに積まれた試験票に觸つて見る。「いや、そんなに選らないで。」と傍に控へてゐた疝癩らしい老人が、ひゞの入つたやうな聲で注意する。これは別の科の教授なのであるが、この惨めな髭書生を見て、急にむら／＼と憎らしくなつたのである。ダイニーツインは、運を天に任せて試験票を一枚取ると、自分の番號を見せて、先番の者が問題に答へてゐる間、窓際へ行つて腰を下ろす。窓際に陣取つたダイニーツインは、試験票から眼を放さうともせず、たゞほんの時々前からの癖でのろ／＼と邊りを見廻す位のものであつたが、それでも、手足一つ動かさない。が、その中に先番の試験が済んで、「結構、もう行つてよろしい。」と

か、「結構です、大變結構です。」とか、出來榮えに應じてそれ／＼言葉をかけて貰ふ。いよ／＼ダイニーツインの名が呼び上げられる。ダイニーツインは立ち上がつて、しつかりした足取りで卓に近づく。「問題を讀みなさい。」と聲がかゝる、ダイニーツインは試験票を両手に取つて、鼻の傍まで持つて行き、のろ／＼と讀み上げて、のろ／＼と手を下ろす。「さあ、答へて貰ひませう。」と例の教授が身體をぐつと後ろへ反らし、兩腕を胸に組みながら、大儀さうにかう云ふ。あたりは墓場のやうに森然と静まり返る。「どうしたんです、君？」ダイニーツインは黙つてゐる。立會ひの老教授はびり／＼して來る。「さあ何とか云つたらどうだね。」我がダイニーツインは氣でも遠くなつたやうに、やはり黙りこくつてゐる。短く刈り上げたその後ろ頭は、同級生一同の物好きに視線を集めながら、突兀として動かないのである。立會ひの老教授の眼は今にも飛び出さなばかり、老人はすつかりダイニーツインを憎み切つてゐる。「それにしても、どうも奇妙だね。」と、もう一人の試験官が云ひ出す。「何だつて君は啞のやうに黙つて突つ立つてゐるんです、さあ、分らないんですか。え？ それならさうと云つたらいい。」もう一枚試験票を取らして下さいますか。」と不仕合せな青年はかすれた聲で申し出る。教授たちは眼と眼を見合せる。「まあ、さうしたらよからう。」と主任の試験官が愛想をつかしたやうに片手を振つて答へる。ダイニーツインはまた問題の紙をとつて、また窓際へ行き、又ぞろ卓の所へ引つ返し、又々、死人のやうに黙り込んでゐる。立會ひの老教授は、彼を生きたまゝ取つて食ひもし兼ねましき形相になる。結局、彼は追ひ返されて零點をつけられる。そこで諸君はもうかうなつたら仕方がないから歸つて行くだらう、と思はれるに相違ない。ところが、どういたしまして！ 彼は自分の席に歸つて、相變らず身動きもせず、試験が済むまで坐り込んでゐる。そして歸り際に、「いやはや、すつか

り脂を絞られちやつた！ 何たる情けないこつたらう！」と叫ぶ。それからまる一日モスクワ中を歩き廻りながら、時々、頭を抱へて自分の悲運をつくつくつと呪ふのである。本などは勿論手に取らうともしない。そして翌朝になると、同じやうな始末が繰り返される。

さて、このダイニーツインが私の話し相手になつたわけである。私たちはモスクワのことや、獵のことなど話し合つた。

「もしなんでしたら。」と不意に彼は囁いた。「この土地いちばんの警句家を御紹介しませうか？」
「どうぞ。」

ダイニーツインが私を引つ張つて行つたのは、肉桂色の燕尾服に染め分けのネクタイをつけ、額の上に髪を高くかき上げて、口髭を生やした、小柄な男の傍であつた。その膽汁質らしい落ちつきのない顔立ちには、なるほど機智と皮肉を發散してゐる。浮かんでは消える辛辣な微笑は絶えずその唇を歪め、やゝ細めた黒い眼は不揃ひな睫の蔭から不敵な光りを放つてゐる。その傍には一人の地主が立つてゐたが、ゆつたりとして柔かみがあり、甘つたるい感じのする——正真正銘の砂糖屋蜜兵衛で——しかも眼つかちである。小柄な男の警句を皆まで聞かないうちから笑ひ興じて、溶けさうな程うれしがつてゐる。ダイニーツインは私をこの警句屋に紹介してくれたが、その名はピョートル・ペトロヴィッチ・ルビーヒンと云つた。私たちは名乗り合つて、初対面の挨拶を交はした。

「ときに、私の無二の親友を紹介させて頂きませう。」突然ルビーヒンは甘ちゃん地主の腕をとつて險のある聲で云ひ出した。「まあ強情を張らなくても好いですよ、キリーラ・セリファアーヌイチ。」と彼は言葉を

續けたが、その間にキリーラ・セリファアーヌイチはもち／＼しながら、まるで腹がぺちゃんこになつたやうな不器用らしいお辭儀をしてゐる。「そこで御紹介しますが、この人は寔に申し分のない貴族で、五十の年まで壯健無比に渡らせられました。どうしたものか不意に眼の療治を思ひ立たれ、その結果、隻眼せきがんとなられました。それからといふもの、領地の百姓どもを治療してをられますが、その成績も似たり寄つたりで……さて、百姓どもは申すまでもなく、それにふさはしいだけの心服の念を捧げて……。」

「いや、どうも困つた男だ。」とキリーラ・セリファアーヌイチは口の中でもぐ／＼云つて——そのまゝ笑ひ崩れた。

「しまひまで云ひ給へ、君、さあ、しまひまで。」とルビーヒンはすかさず云つた。「何しろ君はひよつとしたら、裁判官に選舉されるかも知れないんだから。いや、選舉されるとも、見てゐたまへ。さて、さうなつたら無論、君の代りに陪審員の連中が頭を働かしてくるにきまつてゐる。

それはさうとしても、だが、萬一の用心にたとへ他人様の考へにもせよ、とにかく自分で喋ることだけは稽古をしなけりやならないよ。もし運悪く知事でもやつて来て、『どうして、この判事は吃るのか？』と訊かれたら、まあその時は『中風に罹りました。』と返事をするわけだ。『それなら古血を出してやるがいゝ。』と来るだらう。ところがそんな事は、ねえ、考へても見たまへ、君の地位からいつて不様ぢやないか。」

甘ちゃん地主はもう堪らず笑ひ轉げた。

「あれまあ、あんなに笑つてる。」とルビーヒンは、波打つてゐるキリーラ・セリファアーヌイチの腹を毒々しげに見やりながら、言葉を續けた。「尤も、笑はずにはゐられる筈がない。」と私の方に

振り向いて云ひ足した。「お腹は何時ウツクもくちくつて、身體は丈夫だし、子供はなし、百姓たちは抵當にも入れてないし、自分でその百姓たちを療治までして——細君は少し頭が變だと來てゐる。(キリーラ・セリフアーヌイチはよく聴きとれなかつたやうな振りをして、ちよつと脇の方をむきながら、相變らず笑ひ續けてゐる)。私も同様に笑つとりますが、私は實のところ、女房に駆け落ちされたんで、測量師と手に手を取つてね(彼はにやりと笑つた)。あなたはそれを御存じなかつた? さうなんですとも! いきなり出し抜けに家出をしまつて、私にはこんな置手紙をして行きましたよ。『御なつかしきビョートル・ペトローギツ様、何卒お赦しを。戀路の闇に迷ひて心の友とこの地を去り行きます。』とね。その測量師は爪を切らないで、細いきち／＼のズボンあまを穿いてゐるといふ、たゞそれだけで女をものにしやがつたんで。あなたは『何とまあ、あけすけに喋る男だ!』と呆れていらつしやるんでせう? いやはや、とんでもない! 私ども野育ちの人間は、有りのまゝをぶか／＼云つてしまふんでね。それにしても、少し脇へ退きませう、未來の裁判官の傍につゝ立つてゐるのもなんですからね……』

彼は私の腕をとつて、窓の方へ引つぱつて行つた。

「私はこの土地では洒落の巧い人間といふ評判をとつてゐますが、」と、彼は話の進むにつれてこんな事を云つた。「これは本當になさらないやうに、私はたゞ物事が癪たがに障る性質で、あけすけに人の悪態を吐くんです。だから、こんなにぎつ／＼ばらんにやつて行けるんです、何も儀式張ることなんかないぢやありませんか、全く? 私は誰の云ふ事だつて三文の値打ちもないと思ふから、何一つ強ひて求めようともしない。私は人が悪い。——しかし、それがどうしたと云ふんでせう。人の悪い人間には、少くとも智慧が要らない。人の悪いといふ事がどんなにさば／＼した

ものか、とても想像がおつきにならんでせうよ……まあ、早い話が、ほら、ね、この家の主人公を御覽なさい! ねえ、何だつてあゝ駈けずり廻つてゐるんでせう、全く冗談ぢやない——のべつ時計と睨めつこをして、にこ／＼笑つたり、汗をかいたり、勿體ぶつた様子をしたりしながら、私たちに空腹むしい目をさせてゐるんですからね。へん、格別珍らしくもない——何が顯官のお方だ! そらそら、また駈け出した——跛まで引き出してさ、御覽なさい。」

ルビーヒンはきい／＼聲で笑ひ出した。

「たゞ困つたことには、御婦人方がゐない。」と彼は深い溜め息を吐きながら喋り續ける。「まるで獨身倶楽部の宴會みたいだ——でも兎に角、我々仲間あは御馳走あにありつける譯です。あゝ、御覽なさい、御覽なさい。」と彼はだしぬけに叫んだ。「コゼーリスキイ公爵がやつて來た——ほれ、あの顎鬚を生やして、黄色い手袋をはめた背の高い人です。外國住ひをして來たつて事が、ちやんと見えてます……いつも決まつてうんと遅刻する人なんでね。構はず云ひますが、馬鹿も馬鹿、ひどい棒鱈あなんですよ。あの人が我々風情にさも恩がましく言葉をかけたり、物欲しさうな母親や娘達のお世辭を聞いて鷹揚らしくにつこり笑つてみせる、あの様子をお目にとめて御覽下さい……この町にはほんの通りすがりの御滞在あなだけけど、御自分でも時折りは洒落をとばすんです。——その代り、どうも大變な洒落なんです! なんの事はない、切れない庖丁で太綱を鋸引きにするやうなもんでさ。あの人は私が厭あでたまらないだけだ……それにしても、一つ挨拶して來るか。」

かう云つて、ルビーヒンは公爵の方をさして駈け出した。

「さあ、あすこに私の仇敵がやつて來た。」私の所へ引つ返して、彼はだしぬけにかう云つた。「あ

の赤つちやけた顔をして、髪の毛のはくした肥大漢が見えるでせう——ほら、帽子を鷲掴みにして壁傳ひに歩いて行きながら、狼みたい、四方八方に眼を配つてゐる。あいつに私は千ルイブリもする馬を四百ルーブリで賣つてやつたのに、あの畜生、今では大威張りで私を輕蔑してゐるやがる。そのくせ御自分はまるつきり分別といふものがない。とりわけ、朝お茶を飲む前とか食事のすぐ後などには殊にひどくつて、こつちから『今日は、』と云ふと、先生、『何用だね?』と來ます。あれ、あすこに閣下がやつて來る。』とルビーヒンは言葉を續けた。「退職の勅任文官で、微碌した閣下なんですか。あの人の娘はビート糖で出來てゐて、工場は癩癩に罹つてゐるといふ始末……いや失禮、これは云ひ間違ひで……なに、それでも分かつて下さるでせう。おや……建築技師もこんなところへ來てゐるぞ! 獨逸人のくせに鬚なんか生やしてござるが、自分の仕事は一向に分からない——珍無類な奴ですよ!——尤も、あんな奴、仕事なんか分かつたつて仕方がない、たゞ賄賂をとつて、柱だの圓柱だのを——つまり、國家の柱石たる我が國の貴族連に、出來るだけ澤山建ててやればいゝんでせう!」

ルビーヒンは又、から／＼と笑ひ出した——けれど、不意に慌だしいざわめきが家中に擴つた。顯官の客が乗り込んだのである。主人は取るものも取り敢ず玄關へ駆け出した。その後から忠勤を擢んでる召使ひと、お節介な客の誰れ彼れが飛んで行つた……今までの騒々しい話し聲は、生まれた巢の中に蠢く蜜蜂の春の唸りにも似た、物柔かな快い囁きに變つた。たゞ一匹の不馴な黄蜂のルビーヒンと、堂々たる雄蜂のやうなコゼーリスキイ公爵だけは、聲を低めようとしなかつた……やがていよいよ女王蜂格の顯官が入つて來た。一同は心をときめかして歓迎の意を表し、坐つてゐる人々も身體を持ち上げた。ルビーヒンから馬を安く買つた例の地主、この地主

すらも頸を胸につけて會釋した。顯官は申し分のない堂々たる態度で品位を保つてゐた。會釋するやうな恰好に見せて頭を後ろに振りながら、二言三言お世辭らしい言葉を述べたが、その言葉がどれも『あゝ』の音で始まつて、鼻にかゝつて長く尾を引くのであつた。空腹感と入れ交じつた憤慨の色を現はしながらコゼーリスキイ公爵の頸鬚を睨み、例の工場と娘を持つた勅任文官に左手の人差指を突き出した。それから顯官は四五分間に、宴會に遅刻しなかつたのは甚だ欣快だと二度まで口にしたが、とかくするうちに、一同は名士連を先頭に食堂へ移つた。

くだ／＼しく述べ立てるまでもない事だが、顯官は一番の上座に据ゑられ、勅任文官と縣の貴族團長の間に陣取つた。貴族團長は鷹揚な威のある顔付きをした人で、糊の利いたワイシャツの胸、偉大なチョッキ、佛蘭西煙草を入れた丸い煙草入れなど、凡てがびつたりとその表情に相應してゐた——主人は斡旋これ努めて、あちこち駆けずり廻つたり、何かと氣を揉んだり、客に御馳走をすゝめたり、顯官の傍を通り過ぎる度にその背中に微笑みかけたり、まるで小學生のやうに部屋の間隅に突つ立つたまま、慌だしくスープ入りの皿や牛肉の料理を給仕の手から引つたのであつた。——侍僕頭は、長さ三尺もありさうな、口に花束を啜へた魚を食卓にさし出す。仕着せを着た佛頂面の下男たちは、マラガ産の葡萄酒やドライマデーラ酒の壘を、一人々々の客に氣難かしさうに突きつけてゐた。殆んど凡ての貴族たち、殊に年配の連中は、お義理でいやいやおつき合ひをするといつたやうに、一杯二杯と盃を重ねてゐた。かうして、遂に三鞭酒の壘がぼん／＼抜かれて、次々と祝盃が上げられた。——こんな事は、恐らく讀者諸君にとつて分かり過ぎるくらゐ分かつてゐることと思ふ。けれど、一同がさも喜ばしげに謹聽してゐる中で、顯官が親しく物語つた逸話こそ、特に注意すべきもののやうに思はれる。誰であつたか、例の微碌し

た勅任文官だつたと思ふが、最近の文學に接した印象を述べて、一般に女性の影響といふこと、特に青年に對する女性の影響といふことを持ち出した。すると、顯官は早速それを引き取つて、『さう、さう、それは全くだ。しかし若い連中は、嚴重に服従といふ習慣をつけておかなければならぬ。さもなくばや女の腰巻さへ見ると、夢中になつてしまふでな。』(子供じみた愉快さうな微笑が凡ゆる客の顔を傳はつて流れた。一人の地主などは眼に、さつと感激の光りさへ漲らした。『何分、若い者は智慧が足らんからな。』(顯官は恐らく勿體をつけるためであらうが、時々普通とは違つた所に抑揚をつける癖があつた。『まあ自分のことを例へて云つて見れば、私にはイワンといふ息子があるが』と彼は言葉を續けた。『この馬鹿息子もつて二十歳になつた、ところが、だしぬけに私の所へやつて来て、『お父さん結婚を許して下さい。』と云ふぢやありませんか。そこで私は『この阿呆め、先づ勤めにでも出ろ。』と云つてやりました。さあ、悲觀して泣き出すといふ騒ぎ……しかし私には……その……』顯官はこの『その』といふ言葉を唇よりも寧ろ腹で云つた。それから暫く口を噤んで、隣りに坐つてゐる勅任文官をいとも鷹揚に見やつたが、そのとたんに突拍子もなく眉を吊り上げたものである。勅任文官はちよつと横向きに氣持ちよく頭を下げ、顯官の方へむいた片目を素晴らしい速力でばちつかせた。『すると、どうでせう。』と顯官はまた話し出した。『今ではあいつが自分の方から手紙を寄越して、お父さん、馬鹿者に性根を入れて下すつて有難う、と書いて居りますよ……つまり、あゝいふ風にやらなくちや駄目です。』勿論、客はみんな頭からこの話に感服してしまつて、そこから汲み取つた興味と教訓のために生き／＼として來たやうな具合であつた。食後、一同は席を立つて、いくらか騒々しくはあつたけれど、作法を亂さないやうにして、かういふ場合にのみ許されたかのやうなざわめきを立てながら、客間の方へ移つて行く……歌留多が始まつた。

私はやつとのことで晩まで辛抱した。馭者には明朝五時に馬車の支度をするやうに頼んで置いて、あてがはれた部屋へ休みに行つた。けれど、尙その日のうちにもう一人注目すべき人物と相識る廻り合はせになつてゐた。

來客が多かつたために、誰も一人ひと部屋で眠るわけにはゆかなかつた。アレクサンドル・ミハイリイチの侍僕に案内されて入つた小さな緑いろがかつた濕つぽい部屋の内には、もうすつかり着物を脱いでしまつた先客が一人ゐた。私を見ると素早く毛布の下へ潜りこんで、鼻のところまで顔をかくし、柔かい羽根ぶとんの上で暫くこそ／＼動いてゐたが、やがてひつそり靜まり返つて、木綿の夜帽子ナイトキャップの丸い縁のかけから目慧く様子を窺つてゐた。私は別の寢臺に近づき(この部屋には寢臺が二つしかなかつたので)、着物を脱いで、しめつぽい敷布の上に身を横へた。同室の男は自分の寢床でしきりに寢返りを打つてゐる……私は「お休みなさい」と聲を掛けた。三十分ばかり経つた。どんなに苦心してみても、私はどうしても眠れなかつた。何の役にも立たない、取り止めのない妄想が後から後からと、水揚げ機械の桶のやうに執念く單調に、果てしもなく續くのであつた。

「あなたは、どうやら眠つていらつしやらないやうですね?」と同室の男が聲をかけた。

「御覽の通りの始末で、」と私は答へた。「あなたもお休みになれない風ですね?」

「私はいつもの事なんですから。」

「それは又どうして?」

「別にどうつて事もないんです。どういふ具合だか、自分でも分からないんですが、それでも寢

つくには寝つきます。ちつと根氣よく横になつてみると、どうやら寝入つてしまひますよ。」

「なぜ眠くもないのに床にお入りになるんでせう？」

「ぢや、どうしろと仰しやるんです？」

私は同室の男の問ひには答へなかつた。

「奇態ですね、」暫く黙つてゐてから、彼は言葉を續けた。「どうして此處には蚤がゐないんでせう？ 此處にゐなくてどこに居どころがあるかと思はれるのに？」

「まるで蚤のゐないのが残念さうな口吻ですね。」と私は云つた。

「いえ、別に残念がりもしませんが、たゞ物事に筋道の立つてるのが好きでしてね。」

『おや／＼』と私は考へた。『變つた云ひ方をするな。』

同室の男はまた暫く黙つてゐた。

「一つ私と賭けをしませんか？」と不意に彼は、かなり高い聲で云ひ出した。

「何の賭けを？」

私はこの同室の男が面白くなつて來た。

「ふむ……何にするかな？ あゝ、さうだ、かうませう。あなたは私を馬鹿だと思つていらつしやるでせう、私はさう確信してゐますが。」

「とんでもない。」と私は呆れて口ごもつた。

「野育ちの、物識らずだとね……白状なさい……」

「私はまるであなたといふ人を存じ上げないんですから。」と私は云ひ返した。「どうしてさう獨り決めにきめておしまひになるんでせう？……」

「どうしてつて？ そりやあなたの聲を聞いただけで分かりますよ。あなたはいやに氣のない調子で受け答へをしていらつしやる……ところが、私はお考へのやうな人間とはまるで違ふんで……」

「失禮ですが……」

「いや、こちらこそ失禮ですが、第一に、私は佛蘭西語をあなたに負けない位話せるし、獨逸語ならあなたより上手い位です。第二に、私は外國で三年も暮らしましてね、伯林だけでも八箇月おました、ヘーゲルを研究しましてね、あなた。ゲーテなどは語で知つてゐますよ。おまけに、長いあひだ獨逸人の教授の娘に戀ひこがれてゐましたが、國へ歸つてから肺病やみのお嬢さんと結婚してしまひました。頭は禿げてゐるけれど、中々えらい女でしたよ。かういふ次第ですから、私も結局あなた等と同類で、内々考へていらつしやるやうな野育ちぢやありません……。私も反省といふ奴に蝕はれた人間で、衝動的なところがまるで無いんです。」

私は頭をあげて前よりも尙注意を緊張させながら、この變り者を瞞めたが、有明燈のほの暗い光りでは、その顔立ちをはつきり見分けることが出来なかつた。

「そらね、あなたは今私を見ていらつしやるでせう。」と彼は夜帽子をちよつと直して、語り續けた。

「そして恐らく、なぜ今日この男に氣がつかなかつたらうと、我ながら不思議に思つていらつしやるんでせう？ なぜあなたが私に氣がおつきにならなかつたか、それを私がお聞かせ致しますせう。——ほかでもない、私が大きな聲を立てないからです。他人のかけに隠れて、戸の後ろに立つたまゝ誰とも話をしないからです。侍僕が盆を持つて傍を通りかゝる時には、肘を私の胸と同

じ高さに張つて、ちゃんと用意してゐるからですよ。……では、何故こんな事になるのかといふと、それには二つの理由があるんです。第一には私が貧乏だといふこと、第二には私が自分から諦めたといふことなので……どうか本當の事を云つて下さい。あなたは私に氣がつかなくなつたんでせう？」

「全くのところ、ついお見それしまして……」

「や、まあ、まあ、」と彼は遮つた。「それは分かつてゐますよ。」

彼は起き直つて腕組みした。夜帽子の長い影が壁から天井へかけて曲がつて映つた。

「ときに、正直なところを聞かせて下さい。」不意に横目でちらと私を見て、彼はかう云ひ出した。「私はきつとあなたの眼には大の變人、所謂變り種に見えたでせう。いや、ひよつとしたら、それよりもつと悪い位かも知れない。あなたは、あいつわざと變人ぶつてる、とお思ひかも知れませんね？」

「いつも同じことを云ふやうですが、私はあなたを存じ上げないんで……」

彼はちらと眼を伏せた。

「どういふわけであなを掴まへて——まるで見ず知らずの相手に、こんなに思ひがけなく話し込んでしまつたのか、實に、實に、不思議でたまらない！（彼はほつと溜息をついた）何もお互ひ同志氣が合つたからといふわけでもないでせうし！ あなたにしろ私にしろ、どちらも歴とした人間です。云ひ換へれば、エゴイストなんです。だから、あなたも私に用がなければ、私もあなたにこれつから先きの用もない。さうぢやありませんか？　ところが、今二人とも眠られない……だから、一と喋りしてはならんといふ法はないでせう？　私はお調子にのつてゐますが、こ

んなのは、私として珍らしいことなんです。私は實のところ、臆病なんでしてね。臆病といつても、それは私が田舎者だからとか、何の官等もない貧乏人だから、とかいふためぢやなくて、恐ろしく自尊心が強いせゐなんです。ところが、どうかすると、いつどんな時とはつきり云へもしないし、前から見通しもつきませんが、何かの拍子に臆病な氣持ちがすつかり消し飛んでしまふことがある。例へば、今夜のやうな具合にね。今なら達賴喇嘛と顔を突き合せて立たされても、平氣で嗅ぎ煙草を一服頂戴と出ますよ。しかし若しかしたら、あなたはお睡いのぢやありませんか？」

「それどころか、」と私は急いで打ち消した。「あなたとお話してゐるのが大變愉快なんです。」

「つまり、私の話が氣晴らしになる、と、仰つしやりたいとこんなでせう……それなら結構……さて、改めて申しますが、私はこゝで變り者といふ評判を取つてゐます。いや、評判を取るといふより、くだらない世間話の合間に、何かの拍子で私のことでも出ると、つい噂に上るといふわけです。『我が運命をば心にかくる人もなく』でしてね……世間の奴らは私に針を刺してやうといふ心算なんです……あ、悲しいかな！　奴らは一向知らないけれど……私の不運の原因は、まるで世間並みと變つた所がないといふことなんです。まあ例へば、今からしてあなたと話し込んでゐるやうに、ひよい／＼と氣紛れはやりますがね。しかし、こんな氣紛れは鏝錢一枚の値打ちもありやしない、こんなのは一番安つはい、一番低級な獨創ぶりですからね。」

彼は私の方へまともに向き直つて、兩手を振つた。

「あなた！」と彼は叫んだ。「私はこんな意見を持してゐるんです。一體にこの地上の生活はたゞ畸人に見與へられてゐる。ひとり畸人のみが生活の權利を有してゐる。Mon verre n'est pas

grand, mais je bois dans mon verre (わが盃は大ならず、されど)と誰かが云ひましたね。——「ねえ、」と彼は小さな聲で云ひ足した。「私は佛蘭西語の發音がきれいでせう。どんなに頭腦が大きく抱擁力に富んでゐても、又すべてを理解し、多くを知り、時代に遅れずついて行く力があつても、自分自身のもの、獨特のもの、固有のものが何一つなかつたならば、それが一體何の役に立ちませう！ それこそ陳腐な月並みを詰め込んだ藏がこの世に一つ増えただけの事で、誰も喜ぶものはありやしない。さうですとも、たとへ愚かであつても、自分自身であれ！ 自己の匂ひ、自分自身の體臭を持って、これが肝要なのだ！——しかし、お考へ違ひのないやうに、この體臭に關する私の要求は大したものぢやないんですから……どうして、どうして！ そんな程度の變り者は腐るほどゐます。どつちを向いても變り者ばかり、生きた人間は一人残らず變り者です。ところが私はその數に洩れたんで！」

「それにしても、暫く無言の後、また話を續けた。「若い頃はどんなに華々しい抱負を抱いてゐたこととせう！ 外國へ行く前から歸朝當時にかけて、自分をどんなに高く買ひ被つてゐたこととせう！ さて、外國で留學當時は一生懸命に耳を敬つて、何一つ聞き洩らさないやうにしながら、何時も獨りぼつちで押し通してゐました。なんでも一人で合點した積りでゐながら、終りになつて見ると、いろはのいの字も知らずにゐたなんていふ、我々書生仲間にはよくある奴なんですね！」

「變り者、變り者！」と彼は自ら責めるやうに頭を振りながら、言葉を繼いだ。「私は變り者と云はれてゐますが……正體を洗つてみると、凡そこの世の中に小生くらゐ平凡な人はゐない程なんです。私はきつと人眞似をして生まれたに相違ありません……さうですとも！ 現在生きてゐる

のだつて、今まで捻くり廻したいろんな作家たちの、眞似事をしてゐるやうなもんです。額に汗して生きてゐます。私は勉強もしたし、戀もしたし、最後には結婚もしたけれど、まるで自分の意志でやつたのではないやうです。何かの義務と云はうか、與へられた宿題と云はうか——その邊は誰にも分かりつこないが、とにかくそんな風なんです！」

彼は夜帽子を頭から引つ擱んで、寢床の上へ叩きつけた。「お望みなら、私の身の上話をお聞かせ致しますせう。」と彼は途切れがちな聲で云ひ出した。「いや、それよりいつそ、その中から變つたところを幾つか抜いて見ませうか？」

「え、どうぞ。」
「いや、こいつも見合せにして、私の結婚した顛末をお話した方がいゝでせう。何しろ結婚といふものは重大なことで、人間全體の試金石に當たりますから。まるで鏡にでもかけたやうに、その人となりが反映るといふわけで……だが、この洒落も餘り陳腐過ぎますかな……ちよつと失禮、嗅ぎ煙草を一服やりますから。」

彼は枕の下から煙草入れを出して、蓋を開けた。開けた煙草入れを振り廻しながら、また話を出す。

「あなた、お願ひですから、私の身にもなつて下さい……御自分で考へて御覽になつても分かる事ですが、ヘーゲルの百科全書の中から私はどんな利益を、ねえ、一體どんな利益を私が引き出す事が出来たか？ 後生ですから、御意見を聞かして下さい。この百科全書と露西亞人の生活の間に、え、どんな共通點がありますか？ また、それを我々の生活にどう適用しろと仰つしやるんですか？ いや、そんな百科全書ばかりでなく、一般に獨逸哲學を……更に一歩進めて云へば、

科學そのものをですな。」

彼は寢床の上に跳ね上がって、毒々しげに齒を喰ひしぼりながら、小聲にぶつ／＼云ひ出した。

「あゝ、さういふわけなんです！……それならば、何だつてのこ／＼外國くんだりまで出かけて行つたのだ？ 何故おとなしく我が家におつとしてゐて、周囲の生活を居ながらに研究しなかつたんだ？ さうすれば、實生活の要求も、その將來をも認識して、自分自身のいはゆる使命についても、はつきりした確信が得られたらうに……かう仰つしやるかも知れませんが、冗談ぢやない、」まるでおづ／＼と自己辯護でもしてゐるやうに、また語調を變へて語り續けるのであつた。

「まだ今まで、どんな才人も本に書かなかつたやうなことを、どうして我々風情に研究が出来るものですか！ 私はそいつに、露西亞の實生活に、喜んで教へを乞ふ筈だつたんですけれど、困つた事には肝心の相手が黙つてゐる。かうしてゐるから俺を理解するがいゝ、と云はんばかりなんですけれど、それが私には及びもしない。私が演繹を示して貰ひたい、結論を授けて欲しい、といふと……『結論だつて？』——それなら、ほら、これが結論だ。つまりモスクワの連中の説を聞くがいゝ。まるで鶯のやうな妙音で囀つてゐるぢやないか？」ところが悲しいかな、モスクワの連中はクルスクの鶯そののけに囀り立てるけれど、人間らしい話をしないのです……そこで私は考へに考へ抜いた——何しろ學問はどこへ行つても一つらしいし、眞理も一つしかない筈だといふので、斷然故郷を離れて異國の邪教徒の中に乗り込んだ譯です……何とも致し方がありません——血氣に逸つて自惚れに取つつかれてゐたんですからね。實は當分のあひだ脂肪ぶとりに肥りたくなかつたんです。尤も、これは身體の爲めにいゝと世間で云ひますがね。いや、さうは

云ふものの、自然に肉が附かなけりや、身體に脂肪も廻る氣遣ひはないんです！」

「それはさうと、」と稍々暫く考へてから、彼は云ひ足した。「私は自分の結婚した顛末をお聞かせすると約束したやうです。ぢや、聞いて頂きませう。第一にお断りしておきますが、妻はもうこの世に居りませんし、第二には……第二には、考へてみると、私の青春時代をお話しなければならんやうです。さもないと、何が何やらまるでお分かりにならないでせうから……本當にあなた、お睡くないんですか？」

「いゝえ、睡かありません。」

「それなら結構。一つ聞いて下さい……ほら、隣りの部屋で、カンタグリュールヒン氏が何と下品な躰をかいてゐること！ 私はあまり裕かでない両親の間に生まれました——私が両親と申し上げたのは、云ひ傳へによると、私にも母親の他に父親もあつたとの事ですからね。覚えては居りませんが、父は餘り豪い男ぢやなく、大きな鼻をして、雀斑があつて、赤つ毛で、片方の鼻で煙草を嗅いでたさうです。母の寢室には、黒い襟を耳まで立てた赤い制服姿の、お話にならない程みつともない親父の肖像が懸かつてゐました。私はよくその傍へ連れて行かれて、折檻されたものです。さういふ時、母は何時もの肖像畫を指さしながら、『もしお父さんが生きていらつしたら、こんな事ではお済ましにならなかつたらうに。』と云ひ／＼したものです。それがどんなに私を發奮させたか、あなたも想像がおつきになるでせう。私には男兄弟も姉妹もありませんでした。いや實のところは、やくざな弟が一人おりましたが、後頭部佝僂病といふのを患ひましてね、何だか箆棒に早く死んぢまひました……何だつて英國原産の佝僂病なんか、クルスク縣はシチグロフ郡まで入りこんで來たものでせう？ しかし、そんな事は肝心の話ぢやありません。私の

教育を引き受けてくれたのは母親で、如何にも田舎地主らしい眞剣さで、ひたむきにやつてくれたもんです！ 私が生まれ落ちたその記念すべき日から十六の聲を聞くまで、母は私の教育に専念しました：あなた、私の話をずつと聞いてゐますか？」

「聞かなくつてどうしませう、さあ、話して下さい。」

「いや、それなら結構です。さて、私が十六の聲を聞いたとき、母はさつそく猶豫なしに、ネージンの希臘區から来た獨逸生まれのフィリポギッチといふ佛蘭西語の家庭教師を追ひ出してしまひました。それから私をモスクワへ連れて行つて、大學へ入れてくれましたが、間もなく伯父の手に私を残して、天國へ旅立つてしまひました。伯父はコルトウン・バブーラと云つて、シチグロフ郡ばかりでなく、他郡にまで名を知られた凄腕の辯護士でした。この親身の伯父に當たる辯護士のコルトウン・バブーラは、よくある手で、私を綺麗に裸かにしてしまひました：しかし、これもやはり本筋の話ぢやありません。私が大學に入つた時は——母親の努力を多としなければなりません——可成りしつかりした力がついてゐました。けれども獨創力の缺けてゐる事には、もうその時分から氣がついてゐました。私の少年時代は他の若い連中の少年時代と較べて、少しも變つた所がありませんでした。私もやつぱり羽根布團にくるまつて育てられたみたい

に、だらしなくぼんやりと大きくなつて行つて、やはり御多分に洩れず、早くから詩の誦讀などを始め、空想的傾向などといふのを口實にして、だん／＼柔弱になつてゆきました。何を空想するかといふと、えゝと、さうですね、美しきものとか：さういつた類なんです。大學へ入つてからも、私は別に人並みはづれた道をとらうとはしませんでした。私は直きに研究團體へ入りました。その頃は時世が今とは違つてゐましたからね。しかし、あなたは研究團體つてどんなものか御存じないかも知れませんね？——たしかシルレルがどこかでこんなことを云つてゐたやうですね。

Gefährlich ist's, den Lenz zu wecken
Und schrecklich ist des Tigers zahn,
Doch das schrecklichste der Schrecken —
Das ist desp Mensch in seinem Wahn!

危きは獅子の眠りを醒ますこと

恐ろしきはまた虎の牙

なほいやさらに恐ろしきは

迷ひに落ちし人ごゝろ！

シルレルは確かに云ひ間違ひをしたんです。きつと Das ist ein «Krujok»... in der Stadt Moskau (恐ろしきはモスクワの町なる一研究團體)といふつもりだつたんですね。」

「でも、どうして研究團體がそんなに恐ろしいんでせう？」と、私は訊ねた。

同室の男は夜帽子を擱んで鼻の上まで引き下ろした。「何がそんなに恐ろしいか、ですつて？」と、彼は叫んだ。「ほかでもありません、研究團體なるものは、あらゆる獨創的發達を撲滅させるからです。研究團體は社會、女性、生活の代りに作ら

れた醜い贗造物なんです。研究團體は……あゝ、一寸待つて下さい、研究團體つてどんなものか、ひとつお話し致しませう！ 研究團體といふやつ——これは如何にも合理的な仕事らしい意味と外見を備へてはゐるけれど、その實、不精者どものだらしない寄りあひ暮らしなのです。研究團體は普通の會話を議論に代へて、何の役にも立たない饒舌の癖をつけ、獨り靜かに有益な仕事をすることを妨げ、人間に文學的疥癬病を傳染させる。さうして遂には、魂の新鮮さや健全な處女性を奪つてしまふのです。研究團體といふ奴——それは同朋愛だの友情だのといふ美名の下に匿れた凡俗性と倦怠に過ぎません。胸襟を披くとか、同情を寄せ合ふとかいふのを口實にして、誤解や自分勝手の主張を絡み合せたものに過ぎません。研究團體では一人々々の會員が權利を持つてゐるおかげで、いつ何時でも垢だらけの汚い手を、仲間の魂の中へ突つ込むことが許されてゐるので、誰ひとり他人の手に弄られない純潔な心を持つてゐるものはないのです。研究團體では頭腦の空っぽなお喋りや自惚れの強い小才子や、まだ若いくせに老成ぶつた人間などが崇拜されて、才能はなくとも『隠れたる』思想をもつたとか稱する詩人が擔ぎ上げられるんです。研究團體ではやつと十七八の若造が、女だの戀だのと生意氣に尤もらしく喋々してゐるが、いざ女の前に出ると黙り込んでしまふか、でなければ、まるで本を讀むやうな調子で話をする——しかもその話といふのが、なつちやゐないんです。研究團體では小生意氣な雄辯が盛んになつて、お互ひ同志が警視廳の刑事そののけに探り合ひをやる……あゝ、研究團體、それは研究團體でなく、立派な人間を一再ならず滅亡に陥れた魔法の圈だ！」

「いや、それは少し大仰ですよ、失禮ながら。」と私は遮つた。

同室の男は黙つて私を見つめた。

「さうかも知れません。全くのところ、さうかも知れません。しかし、何分我々のやうな連中に残された樂しみは、誇張するといふ事たつた一つだけなんですからね。そこで、私はこんな有様でモスクワに四年暮らしました。この間の年月がどんなに早く、どんなに呆れるほど早く經つてしまつたか、それはあなた、とても私などの口にくまう現はせるものぢやありません。思ひ出すと悲しくもなれば、忌々しくもなります。朝起きたかと思へば、まるで櫛にでも乗つて山を這り下りるやうに……氣がついてみると、もう何時の間にかやら麓に這りついてゐて、やがてもう日が暮れて行く。寢ほけ眼をした下男がフロックを着せてくれる——服裝を整へて友達の所へ出かけて行く。それからパイプをふかし、薄いお茶をコップに幾杯も幾杯も飲みながら、獨逸哲學だとか、愛だとか、永遠な精神の輝きとか、その他いろんなこの世に縁遠い問題を論じたものです。しかし、それでも獨創性のある、自我のはつきりした人達に出逢ひました。中にはどんなに自我を擽めても歪めても、持つて生まれた性質が自然と光りを放つものです。たゞ私ばかりは可哀想なもので、まるで柔かい蠟みたいに自分自身を捏ね廻してゐるが、生まれつきがやくざなものだから、こんな外部の小細工に一向反撥しようとしなない！ さうからしてゐるうちに、やがて、二十一の聲を聞きました。私は親から残された財産を相續しましたが、こいつは正確に云ふと、後見人がお情けで残してくれた財産の一部を貰つた迄です。私は農奴から自由の境涯にして貰つた召使ひのワシーリイ・クドリャーシェフに、世襲財産の管理を全部委任して、伯林へと海外留學に出掛けました。外國ではもう前にも申上げた通り、三年間滞在しました。ところでどうせう、そこでも、外國でも、私は相變らず獨創のない人間で濟んでしまひました。第一、歐羅巴といふものも、歐羅巴の生活なるものも、鵜の毛ほども知らないで終つたのは云ふまでもありません。

ん。私は獨逸の教授たちの講義を聞き、獨逸の本を本場で讀んだ。たゞこれだけがモスクワ生活と違ふだけでした。私はまるで修道院の僧みたいで、孤獨な生活を送りました。多少懇意になつたのは、退職の陸軍中尉連ぐらゐるもので、これが私と同じやうに、貪婪な知識慾に責め立てられてゐましたが、そのくせ極く悟りの鈍い方で、能辯の才といふものがまるでない。またベンザとかその他の地味豊かな地方から來た鈍感な家族連れの連中とも懇意にしたり、カーエーへ出入りしたり、雑誌を讀んだり、晩になると芝居へ行つたりしました。土地の人とは餘り交際をしないで、話をするのも妙に堅くなつてしまひ、自分の住居へは誰も寄せつけないやうにしてゐました。たゞ二三人の猶太生まれのしつこい若者だけが例外で、のべつ私の所へやつて來ては金を借りて行きました、露西亞人が信じ易いのをいゝ事にしましてね。その中に不思議な運命の戯れで、私は一人の教授の家へ出入りするやうになりました。それはかういふわけなんです。私がこの人の聽講生にならうと思つて申し込みに行つたところ、先生なんと思つたか、私を自分の家の集りに招待してくれました。この教授には娘が二人あつて、年は二十七ぐらゐ、かつしりした身體つきで——實際その通りだから仕方がありません——實に見事な鼻をして髪はきれいに渦を巻き、眼は薄青く、赤い手に白い爪をしてゐる。一人はリンヘンと云ひ、もう一人はミンヘンと云ふのです。私は教授の家へ出入りするやうになりました。お断りして置きますが、この教授は鈍物といふ譯ではないけれど、なんだか抜けてゐるやうなところがありました。講壇に立つと、可成り筋道の立つた話をするんですが、家へ歸ると舌つたらずのやうな口の利き方をして、いつも眼鏡を額に上げてゐる。それでゐて、なか／＼、博識の學者なんです——ところが、どうでせう？ 私は急にリンヘンに戀ひしてゐるやうな氣がして來ました。——それからまる六箇月といふも

の、ずつとそんな氣持ちが續きました。尤も、その娘と話をする事は餘りなくつて、どちらか云へば、ぢつとその顔を眺めてゐる方が多かつたのです。けれど、いろんな身につまされるやうな事を讀んで聞かせたり、そつと内緒で手を握つたり、晩になると二人で竝らんでぢつと月を眺めながら、月がなければ何となしに空を見上げながら、空想に耽つたりしてゐたものです。おまけに娘はコーヒーを入れるのがとても上手で……この上に何が不足かと思はれるばかりでした。たゞ一つ困つた事には、所謂、えも云はれぬ幸福の高潮した瞬間に、私はどうしたものか鳩尾の邊がしくしくと痛んで、惱ましい冷たい慄へが胃の邊りを走るやうな氣がするのです。私は到頭このやうな幸福感に堪へ切れなくて、逃げ出してしまひました。それからほ丸二年といふもの、外國で暮らしました。伊太利に行つた時には、羅馬の『基督變容』の前に立ち、フロレーンの『ヴィナス』の前に立つては忽ち大袈裟な歡喜の虜になつて、まるで物の怪にでも憑かれたやうな風でした。晩には又詩を書いたり、日記に筆を染めたり、一口口に云へば、こゝでも世間並みの事をやつてゐたわけです。それにしても、所謂獨創のある人間になり濟ますのがどんなに易々たる業か、これでお分かりになつたでせう。私は早い話が、繪や彫刻のことは一向に分らない……それならそれと、あつさり白狀してしまへばよささうなものです……どつこい、さうはゆかない。案内人を雇つて壁畫を見に駆けずり廻らなければならぬ……」

「さて、いよく故國へ歸りました。」と彼は疲れた聲で話を續けた。「そしてモスクワに着きました。だが、モスクワでは私の身の上に驚くべき變化が起こつたのです。外國にゐる間は主に黙りこんでばかりゐたものが、此處へ歸つて來ると、急に思ひがけないほど元氣に捲し立てるやうになつ

て、同時にとんでもない自惚れを抱くやうになりました。また私を殆んど天才扱ひにしてくれる寛大な人達も出て来ました。婦人たちは私の勿體らしいお喋りを感じて傾聴したものです。けれど、私はこの高い名聲を長く保つてゐることが出来ませんでした。或るとき突然、私のことで良からぬ風評が立ちました（誰がそんなものを捏造したか知りませんが、恐らく女の腐つたやうな奴でせう：モスクワにはこんな男の老嬢がうよ／＼する程ゐるんですから）。この風評は一旦立つが早いかまるで莓みたいにどんどん芽を殖やし、蔓を伸ばして行きました。私はその中に絡まれてしまつて、どうにかして遁れ出さう、この縛れつく糸を断ち切らうとしましたが——どつこい、中々さうはゆかない。で、私はモスクワを發つてしまひました。さて、この場合にしても、私はやはりやくざな人間に過ぎない事が分かりました。私は蕁麻疹の快復期を待つやうに、落ち着いてこの災難が去るのを待つておればよかつたのです。さうすれば、例の寛大な連中がまた抱擁の手を開いて私を迎へ、婦人達は再び私の言葉に微笑を浴びせてくれたに相違ない：けれど私が獨創的な人間でないのがいけなかつたのです。實は突然、馬鹿正直な氣持ちが頭を持ち上げたのです。私はなんだかのべつ幕なしに喋つて、喋つて、喋り立てるのが恥づかしくなつて来た。——昨日はアルバートで、今日はトルバで、明日はシフツェフ・ヴラジヨグで、相も變らぬ同じやうな事を喋り散らすのが氣恥づかしくなつたのです：しかし、それを世間が要求してるとすれば、構はないわけぢやありませんか？ まあ、この方面の本當の猛者連を御覽なさい。こんな事は蚊が喰つた程にも感じやしない、それどころか反つてさうしなくちやあられないので、中には二十年間も舌一枚を資本に働いて、おまけに始終同じ手で行つてる者さへあります。自己に對する確信と自負心の力は、なんと偉大なものぢやありませんか！ 私にだつてそれは

ありました、自負心は。そして、今でもまるつきり閉塞してしまつたわけぢやありません：しかし困つたことは、繰り返して云ひますが、私が獨創的な人間でなくて、中途半端なところで足踏みしてしまつたことなんです。私を生んでくれた自然は、うんと自負心をつけてくれるか、さもなくば、始めつからまるでそんなものを授けてくれなければよかつたのです。とは云ふものの、始め暫くの間は私も全く辛い思ひをしましたよ。おまけに外國などへ行つたために、すつかり身上を耗つてしまつたのですが、それかといつて、若い身體つきはしてゐるけれど、ゼリーのやうにぶよ／＼した商人の後家さんなどと結婚する氣にはならないので——結局、自分の持ち村へ引つ込んでしまひました。どうやら、と同室の男はまた私を横目にちらと見て、かう云ひ出した。「田園生活の最初の印象だとか、自然美の描寫だとか、孤獨生活の靜かな喜びとか、さういつたやうなものは抜きにしても御異存ないでせうね……」

「異存ありません、異存ありませんとも。」私は答へた。「しかし、」と話し手は言葉を續けた。「そんな事はみんな馬鹿氣でゐますからね、少なくとも私に關する限りでは。田舎に歸つた私は、まるで閉ぢ込められた仔犬のやうに、寂しくて寂しくて困つたものです。尤も正直なところ、初めて村へ歸る途中、春のことでしたが、馴染みの深い白樺の林を通りかゝつた時には、漠とした甘い期待のために頭がぐら／＼して、心臓が烈しく鼓動したものですがね。けれど、こんな風の漠とした期待は、御承知でもありませんが、決して實現される例がない。むしろその反對に、まるで思ひもかけなかつたやうな、別の事が起こつて來るのである。例へば獸疫だの、年貢の滞納だの競賣だの、何だのかだのといったやうなわけ。私は支配人のヤーコフに助けて貰つて、やつとのこととでその日を過ぎしてゐました。このヤーコフは前の

管理人の代りに取り立ててやつたのですが、その後暫くたつてから、前のに負けず劣らずの、いや、それにも優る位の泥棒だといふことが分かつたのです。おまけに、樹脂を塗りたくつた長靴の臭ひで、私の生活気分を毒すること夥しいのでした。かうしてゐる中に、或るとき私は近所に親しくしてゐた家がある事を思ひ出しました。その家族は退職陸軍大佐の未亡人と二人の娘なのでした。私は馬車の用意をさせて、この家へ訪問に出かけました。その日は永久に記念すべき日となつて、六箇月の後、私はこの大佐未亡人の二番目娘と結婚したのでした……」

話し手は頭を垂れて両手を空にさし上げた。

「それにしても、」と彼は熱くなつて言葉をついだ。「私は亡くなつた妻のことで、良からぬ考へをあなたの心に吹き込みたくはありません。とんでもない話です！ あれはこの上もなく高尚な、心ばえの優しい女で、愛情の深い、どんな犠牲をも厭はない人間でした。とは云ふものの、打ち明けて申しますが、もし私が妻に先立たれるやうな不幸な目に逢はなかつたら、恐らく今日あなたとお話しなにかすることは出来なかつたでせうよ。なぜつて、私は霜除け小舎の梁で何度首を縊らうと思つたか知れないからです、しかも、その梁は未だにそっくりその儘なんですからね！」

「或る種の梨は、」と暫く無言の後に、また彼は云ひ出した。「いはゆる『本當の風味』を出すためには、暫くの間、穴藏の土の中にかこつて置く方がいゝとされてゐますが、亡くなつた妻も、さういつた風な天賦の性質を持つた女なのでした。やつと今になつて私はあれのいゝところが本當に分かつて來ました。やつと今になつて、例へば、結婚前にあれと一緒に過ごした夜々を思ひ出すと、悲痛な気持ちなどは少しも起こらないで、かへつて、涙ぐましいほど感動させられるのです。家内の實家は決して裕かな方ではなく、家は至つて古風な木造でしたが、しかし住み心地の

よい家で、淋しいほど木立ちの生ひ茂つた庭と、草だらけな内庭の間にあつて、小高い丘の上に建てられてゐました。丘の麓には川が流れてゐて、鬱蒼とした茂みの間からちらほら透いて見えるのでした。大きな露臺が家の中から庭へ出る通路になつてゐて、露臺の前には薔薇の花で埋まつた細長い花壇が繚爛と咲き誇つてゐました。花壇の兩端にはアカシヤの樹が二本植ゑてありましたが、若木の頃に亡くなつた主人が悪戯をしたので、螺旋形に撚れ合つてゐるのでした。その少し先きの方には、手入れを怠つて荒れるに任した木苺の繁みの真ん中に、四阿が一つ立つてゐました。内部は數奇を凝して色さまざまに塗り上げられてゐましたが、外側は見るも氣味悪いほど古びて見すばらしい姿をしてゐるのです。露臺には硝子戸がついてゐて客間に通ずるやうになつてゐました。客間へ入ると、見る人の物珍しげな眼にうつるものは、先づ、四隅に造りつけられた化粧煉瓦の煖爐、右手に据ゑてある調子の怪しげなピアノ、その上に堆高く積み上げられた筆寫の樂譜、褪めた空色の地に白ちやけた花模様のある緞子を張つた長椅子、圓テーブルが一つ、エカチェリーナ朝時代の磁器や南京玉で飾つた玩具などを並べてある飾り棚が二つ、それから壁には、胸のところを鳩を抱いて、眼を上へ吊り上げた、白っぽい髪の少女を描いた、月並みな肖像畫が懸かつて居り、テーブルの上には剪り立ての薔薇を挿した花瓶……ほら、ね、随分細かく描寫するでせう。この客間で、この露臺で私の戀の悲喜劇がすっかり演じられたのです。主の未亡人は意地の悪い婆さんで、いつも突慳貪な鹽辛聲をしてゐる、横紙破りの口喧ましいしるものでした。二人の娘のうち一人はゼーラといつて、よくある型の田舎令嬢と一向に變つたところもない娘でしたが、もう一人はソフィヤといふので……實は、私はこのソフィヤの方に首つたけになつたのです。この二人の姉妹には他に一つ小さな部屋が當てがはれて、共通の寢室になつ

てみました。如何にも娘らしい木づくりの寢臺が二つ据ゑつけられ、黄色くなつた古くさいアルバムや、木犀草や、鉛筆で描いた甚だ拙い男友達や女友達の肖像がありました（その中でも、人並み外れて精力の漲つたやうな顔つきをして、更にそれ以上精神的な署名をした一人の紳士が、然る異彩を放つてゐた。若い頃には柄にない程の望みを囁かれてゐたけれど、結局のところは、私たち同様何一つ仕出來さないうで終つた男です）。それからゲーテやシルレルの胸像、獨逸語の本、乾からびた花環、そのほか記念に残された品々が並んでゐました。けれど、この部屋へは私は餘り出入りしませんでした。氣も進まなかつたのです。こゝへ入ると、何故か呼吸がつかまるやうな氣がしましたね。その上に——奇妙なことですが、ソフィヤが格べつ好もしく思はれたのは、私がこの娘に背中を向けて坐つてゐる時か、でなければ一人でその女のことを思つてゐる、——殊に夕方露臺の上で彼女のことを空想してゐる時なのでした。私はそんな時、夕焼け空や木立ちの蔭や、もう暗くなつてゐながら尙くつきりと薔薇色の空に浮き出してゐる緑の細かな葉などを、眺めつくしてゐたものです。客間ではソフィヤがピアノに向かつて、ベートホヴェンの作品のうち、何かしら自分の好きな、情熱の籠つた、物思はしい感じのする一節を絶えず奏でてゐるのです。意地の悪い婆さんは長椅子に凭れて、苦もなささうに翫をかいてゐる。茜色の夕焼けが龍のやうに流れ込んでゐる食堂では、エーラがまめ／＼しく茶の支度をしてゐる。サモワールは何か嬉しい事でもあるやうに、節面白くしゆつ／＼と沸るし、輪形麵麩は陽氣さうに音を立てて割れ、スプーンは茶碗にふれて澄んだ響きを立ててゐる。日がな一んち、遠慮會釋もなく囀り通したカナリヤは、不意に静まつて、たゞ時折り何かもの問ひたげな調子でちつちと鳴いてゐるばかり、透き通るやうな軽い雲の中から、通り雨がぱら／＼と落ちて来る……私はちつと坐つたま

ま、いつまでもいつまでも耳を傾け、そこはかとなく眺めつくしてゐる。すると心が廣々となつて、又しても自分は戀してゐるのだなといふ氣がして来る。さて、このやうな黄昏の魅はしにひかれて、あるとき私は老婦人に娘さんを貰ひたいと申し入れました。そして、二箇月ばかり経つてから、私たちは結婚しました。私は新妻を愛してゐるやうな氣がしてゐました……さあ、今ではもうはつきり分かつていゝ頃なんです。私は正直なところ、未だにソフィヤを愛してゐたのかどうか、あやふやなのです。あれは氣立ての優しい、利巧な、口數の少ない、温かい心を持つた女でした。けれども、どういふ譯か、神ならぬ身の知る由もありませんが、餘り長く田舎に暮らしてゐたせゐか、ほかに何か謂れがあつたのか、とにかくあれの心の底には（もし心に底といふものがあるとすればですが）或る一つの傷が隠れてゐたのです。でなければ、どうしても懸すことの出來ない小さな傷口が、絶えず血を滲ましてゐるやうな具合なのです。それは、彼女自身にしても、また私にしても、なんとも名のつけやうなものでした。この傷のある事に氣がついたのは、もちろん結婚してから後の事です。そのためには私はどれだけ苦心したか知れませぬ。——しかし、どうにも仕方がなかつたのです！ 私は子供の頃に鸞を一羽飼つてゐましたが、あるとき猫に爪を立てられたことがあります。私達はそれを助け出して手當をしてやりましたが、可哀さうな鸞は傷が癒つても、元の身體にはなれませんでした。いつも羽を膨まして元氣がなく、歌も唄はなくなりまして……とゞのつまりは、ある晩、戸を閉めるのを忘れたので、鼠が籠の中へ入り込み、嘴を噛み切つてしまひました。そのために、鸞も到頭はかない最期を遂げた次第です。一體どんな猫に爪を立てられたのか知りませんが、私の妻もその可哀さうな鸞と同じやうに、しよんぼりと元氣がなくなつて行きました。どうかすると自分でも羽ばたきをして、

爽かな空氣の中で日光と自由を楽しみながら遊び戯れたくなる様子で、一寸やつてはみるのです。が、すぐ意氣地なく縮こまつてしまふ。でも、妻は私を愛してくれました。もうそれ以上なんにも望む事はないと、幾度私に誓つた事やら知れませんが——なんと忌々しい事に——さういふ口の下からあれの眼が曇つて來るのです。私はあれの過去に何かあつたのぢやないかと思ひまして、いろ／＼調べても見たのですが、一向に何の種も上がらない。さあ、こゝで御判断を願ひますが、獨創的な人間ならちよつと肩を竦めて、まあ、二度ばかり溜め息をついただけで、自分の考へ通りな生活を始めたこととせう。が、私は獨創的な人間でないものだから、梁なんか眼をつけるやうになつたのです。私の妻には老嬢のあらゆる癖が沁み込んで——ベートホヴェンだの、夜の散歩だの、木屋草だの、友達との文通だの、アルバムだの、何だのといふ有様で、これより外の暮らし方、殊に一家の主婦としての暮らし方には、どうしても馴染めなかつたのです、それかと云つて、もう人妻になつた女が、そこはかとなほ惱みを抱いて、毎晩のやうに、『きみよ、東雲に佳き人を覺まし給ふな！』などを歌ふのは可笑しなものですからね。』

「まあ、こんな風で私達は三年間、夢のやうに暮らしてしまひました。ところが、四年目にソフイヤは初めてのお産で亡くなりました。しかも奇妙な事には——私にはなんだか初めから蟲の知らせみたいなのがあつたのです。あれは私に娘なり息子なりを授けてくれる力はない、この地上に新しい住人を送り出せさうもない、といふ氣がしてゐました。私は今だに葬式の時の模様を覚えてゐます。それは春のことでした。私たちの教區の教會は小さな古ぼけた建物で、聖帷は黝ずみ、壁は漆喰ひが落ち、煉瓦の床は、ところ／＼齒の抜けたやうになつてゐるのです。兩側の唱歌隊席には大きな古い聖像が掛けてありました。棺が持ち込まれて、聖門の前にあたる堂

の真ん中へ安置され、色の褪めた蔽ひを被せられて、周りに三つの燭臺が置かれました。やがて勤行が始まりました。小さな編み下げ髪を後ろに垂らし、緑いろの帯を低いところに締めたよぼよぼの伴僧が、經机の前で物悲しげに口をもぐ／＼として讀誦してゐる。人の好きさうな、しよぼ／＼眼をして、黄色い花模様のある薄むらさきの衣を着た、同じやうに老いぼれた司祭が、自分と助祭の分と二人前のお勤めをしてゐました。一杯に開け放した窓の外には、枝垂れた白樺の瑞々しい若葉がそよいで囁き交はし、庭からは草の香りが漂つて來る。蠟燭の赤い焰は春の陽の樂しげな光りの中に、白々と見えてゐます。雀が會堂の内外に高い囀りを漲らし、時々堂内へ飛び込んで來る燕の聲が、丸屋根の下で朗らかに響き渡る。金粉のやうに漂ふ陽光の中で、故人の靈にひたすら祈り續けてゐる數多からぬ百姓たちの亞麻色をした頭が、忙がしげに上がつたり下がつたりしてゐる。青味がかつた煙の流れが、香爐の孔から細々と立ち昇る。私は妻の死顔を眺めました……あゝ！死さへ、實に死さへも、彼女を自由にしてはやらなかつた。その傷を癒してはやらなかつた。依然として變りのない病的な、おど／＼した、啞のやうな表情——それは棺の中にあつても、居心地が悪いといふやうな具合でした……私は悲痛な氣持ちで、體内の血が止まつたやうな思ひがしました。全く優しい女でしたけれど、しかし死んだのは、結局あれ自身のために好い事だつたのです。」

話し手の頬は一面に紅を潮し、眼は曇つて來た。「妻が死んでからと云ふもの、」と彼は又話し出した。「私はひどい氣鬱症にとりつかれてゐましたが、やつとそいつを清算して、いはゆる仕事にとりかゝらうと考へました。で、縣廳所在地の町へ出て勤めにつきました。お役所の大きな部屋にゐると頭がやたらに痛んで、眼もどうやら鈍

つて来るのでした。そこへ搦て加へてほかの事情も重なつて来て……私は退職する事にしました。それからモスクワへ行かうと思つたのですが、第一に金はなし、第二に……もうお話しした事ですが、私は諦めをつけてゐたのです。この諦めがついたのは突然のやうでもあり、又さうでもないやうな具合でした。気持ちの上ではもうとつくに諦めてゐたのですが、頭の方はやはりまだ我を折らうとしなかつたのです。私はかうした慎ましやかな感情や思想を、田舎の生活や一身上の不幸のせゐにしてゐました……また一方から云ふと、私はもう前からこんな事に気がついてゐました——近隣の地主たちは若い者も年寄りも、殆んど凡て一様に、初めの中こそ、私の學識や外國留學や、そのほか私の教育上の特點に脅かされてゐた形ですが、やがてすつかり私に馴れ切つたばかりでなく、應對振りなども何だかぞんざいに、好い加減になつて、私の議論などろく／＼終ひまで聞きもせず、話しぶりにしても『さやうでございませう』なんて言葉遣ひはもうしなくなつた。それから、申し忘れてゐましたが、結婚した初めの年に私は徒然つれづれのまま、文學の方をやらうと思ひ立ちましてね、ある雑誌に原稿を送つた事さへあります。それは、私の記憶に間違ひがないとすれば、たしか中篇の小説だつた筈です。けれど暫くたつと、編輯者から鄭重な手紙が届いて、いろ／＼な文句の末に、貴下の頭腦は認めないわけにゆかないけれど、才能の方はさういふ事にまゐり兼ねる、文學に必要なのはたゞ才能ばかりだ、と書いてありました。その上にかへて加へて、モスクワから來たある男が——尤も極く善良な若者だつたんですけれど——縣知事邸の夜會で何かの話の拍子に、私の事を氣の抜けた頭の空つぽな人間だと評したといふ噂が、傳はり傳はつて私の耳に入つたのです。しかし、半分は私の身から出た錆でしたが、お芽出度い自惚れはそれでも相變らず續いてゐました。お察しでもありませんが、自分で自分に『びんたを喰らは

せる』氣になれなかつたのですね。けれども遂に或る時、忽然と眼が覺めました。それはまあ、こんな事情なのです。私のところへ地方の警察署長がやつて來ました。私にはまるで修理の工面がつかないで打つちやらかしておいた領地内の壊れた橋のことで、注意を促すつもりだつたんです。鯀鯀の燻製を肴にヨートカを一杯ひつかけながら、この鷹揚な署長はまるで父親めいた口振りで、私の不行届きを一應責めはしたものの、それでも私の立場に同情して、たゞ百姓たちに云ひつけて、不用な材木でも被せて置いたらよからうと勧めたばかりです。やがて、パイプに火をつけて、間近に迫つてゐる選舉の話を始めました。その當時縣の貴族團長といふ名譽職を狙つてゐたのは、オルバツサーノフ某といふ男でしたが、まるで中味のなくせに豪さうな事を云つて、おまけに賄賂まで取らうといふ人間なんです。その上、財産からいつても、家柄からいつても、別に取り立てていふ程の事もありません。私はこの男のことで自分の意見を述べましたが、その口振りが大分ぞんざいだつたのです。私は正直な話、オルバツサーノフ氏を高い所から見下ろしてゐたのです。署長はちつと私の顔を見て、愛想よく私の肩を叩きながら、人の好きさうな調子でかう云ひました。『いや、ワシーリイ・ワシーリッチ、われ／＼風情があんな人達のことをとやかく云ふのは間違つてゐますよ、及びもないこと……牛は牛づれ、馬は馬づれと云ひますからね。』『とんでもない、』と私はむつととして云ひ返しました。『私とオルバツサーノフ氏と、どれだけ違ふと仰つしやるのです？』署長は口からパイプを取つて、眼を丸くしたかと思ふと、いきなりぶつと嘔き出してしまひました。『いや、笑はせるよ。この人は、』と眼に涙を滲ませながら到頭かう云ひ出すのでした。『とんでもないことを宣ふお方だ……あゝ！驚いた！』と云つて、時々私の臍腹を脇で突ついたり、急に私を君呼ばはりしながら、歸るまで私をからかひ通すのでし

た。遂に署長は歸つて行きました。これこそ本當に盃を溢れさす最後の一滴だったのです。私の自信は一溜まりもなく崩れてしまひました。私は幾度か部屋の中を歩き廻つて、鏡の前に立ち止まり、いつまでもいつまでも自分の悄氣きつた顔を見つめながら、ゆる／＼と舌を出して、苦笑ひを浮かべながら頭を振つたものです。眼かくしをしてゐた布ぬれが落ちてしまつて、私ははつきりと鏡にうつるわが顔よりもはつきりと、自分が如何に空虚な、とるに足らぬ、なんの要もない、月並みな人間であつたかといふ事を、まぎ／＼と見て取つたのです！」

話し手は口を噤んだ。

「ヴォルテールの或る悲劇の中に、」と彼は萎れた聲で話を續けた。「一人の紳士が不幸のどんづまりまで行きつゝいたのを喜ぶところがあるでせう。私の運命には悲劇的なところなんか一向ありませんが、それでも正直に白状すると、なんだかそれに似たやうなものを味はひましたよ。私は冷やかな絶望の毒つばい喜びを知りました。午前中、悠然と寢床の中に身を横へたまゝ、自分の生まれた日と時を呪ふのがどんなに快いものか、それを経験しました。——私は一時にさつぱりと諦めてしまへなかつたのです。それに、察しても頂きますが、金がないものですから、忌々しい田舎に縛りつけられてゐたのです。領地の經營も役所勤めも文學も——何一つ私の身につかなかつた。地主たちとの交際つまじは避けるやうになり、書物は見るのも、厭になつてしまひました。捲毛をふり立てて、『人生』といふ言葉を躍起になつて繰り返してゐる、水ぶくれのしたやうな病的にセンチメンタルなお嬢さん方にも、さつぱり興味を感じなくなりました。私がお喋りをした時、有頂天になるやうな癖をやめてからといふものはね。それかといつて、全くの孤獨になつてしまふのも柄にないし、また出来もしなかつたのです……私は段々と——何を始めたか想像がお

つきになりますか？——近處の地主たちの家を訪ね廻るやうになりました。まるで自己輕蔑の毒に酔つたかのやうに、わざと折りのある度にけち臭い屈辱に浸るのでした。食卓では時々、料理を抜きにされたり、冷やかな高慢なあしらひを受けたりして、終ひにはまるで存在さへ認められないやうになりました。一座の話の仲間にも入れて貰へないので、昔モスクワ時代には、私の足の塵を舐め、外套の端に接吻しかねないほど私を崇拜してゐた、一人のお話にならないほど馬鹿なお喋りに、わざと隅つこの方から相槌を打つやうな始末……それでゐながら、自分がこんな皮肉な眞似をして苦い満足に耽つてゐるのだとは、夢にも考へないやうにしてゐました……冗談ぢやない、獨りぼつちでなんの皮肉どころでせう！ まあ、こんな風にして、幾年か過ごしました。そして、今でも同じやうにやつてゐるわけです……」

「それにしても、こんな作法つて聞いたことがない。」と隣りの部屋からカンタグリユーヒン氏が、睡さうな聲でぶつ／＼云ふのが聞こえた。「夜中にごと／＼話をするなんて、どこの馬鹿野郎だ！」

話し手は素早く毛布の中へ潜りこんで、臆病さうに外を覗きながら、指を立て、私を威す眞似をした。

「しつ……しつ……」と、囁いた。——そして丁度謝つてでもゐるやうに、カンタグリユーヒンの聲のする方へお辭儀をしながら、恭々しげに云つた。「畏りました、畏りました、どうか御免なすつて……ねえ、あの男だつて眠る権利があるんです。眠らなくちやありません。」と又ひそひそ聲で言葉を續けた。「あの男だつて新しい鋭氣を養ふ必要がありませんよ——まあ明日、食事を美味しく食ふためにもね。私たちはあの男の邪魔をする権利はありません。それに、私も云

ひたいだけの事はみんなお話ししたやうな気がします。きつとあなただつてお眠いでせう。おやすみなさい。」

話し手は疥症らしく、くるりと向かうをむいて、枕に頭を埋めた。

「それにしても、せめて、」と私は訊ねた。「あなたのお名前だけでも聞かして頂きたいものです。が……」

彼は素早く頭を持ち上げた。

「いえ、後生ですから、」と私の言葉を遮つた。「私の苗字は訊かないで下さい。私自身にも、他の人にも。たゞ、運命に叩きつけられた無名の男、ワシーレイ・ワシーリッチといふことにして頂きませう。おまけに、私は獨創のない人間ですから特別な名を持つ値打ちなんかありません……でも、もし強ひて何とか呼び名をつけたいとお思ひでしたら、さうですね……シチグロフ郡のハムレットと呼んで下さい。こんな風のハムレットは何處の國にも澤山をります。但し、あなたはまだ他の手合ひにぶつかつた事はないかも知れませんが……では、これで失禮します。」

彼はまた、羽毛布團の中へ潜り込んでしまつた。翌朝、人が来て私を起こした時、彼はもう部屋の中になかつた。夜が明ける前に發つたのである。

チエルトプハーノフとネドピュースキン

ある暑い夏の日、私は馬車に乗つて獵から歸つてゐた。エルモライは私の傍に坐つて、うとうとしながら、頻りに舟を漕いでゐた。私の足許でぐつすり寝込んだ犬は、まるで死んだものやうに、車の揺れる度に跳ね上がる。馭者は馬にたかる蛇をのべつ鞭で追つてゐる。白い埃が軽い雲のやうに馬車の後から従いて走る。私たちは藪の中に入った。道はいよ／＼凸凹が多くなつて車の轍が小枝に引つかゝり出した。エルモライはびくつと身慄ひして、邊りを見廻した……『よう！』と彼は口を切つた。『こゝらにや松松 鶏鶏がゐるに違えねえ。降りてみますべえ。』私達は車を停めて、原つばへ入つて行つた。私の犬が、巢に塊つてゐる一群を見つけ出した。私は一發撃つて、銃に装填しようとする、不意に後ろの方でがさ／＼と大きな聲が聞こえた。やがて、馬に乗つた男が兩手で藪を押し分けながら、私の傍へ近づいて來た。『一寸お訊ねしますが、』と男は横柄な聲で云ひ出した。『あなた方はどんな權利があつて此處で獵をなさる、え、あなたあ？』見知らぬ男は突拍子もなく早口に、鼻にかゝる聲で切れぎれに云つた。私はその顔を見やつたが、生まれてからこの方、凡そこんな顔を見た事がない。親愛なる讀者諸君、白つぽい髪の毛をして、赤い鼻の天井を向いた、恐ろしく長い人蔘色の口髭を生じた小柄の男を想像して頂き度い。上の方が緋羅紗になつて先きの尖つてゐる波斯風の帽子が、眉に届きさうなほど額に被さつてゐる。着てゐる物は黄色い草臥れた夏上着で、胸には黒い綿天鵞絨綿天鵞絨の丸入れ丸入れが取りつけてあり、縫目といふ縫目には、擦れた銀の飾紐モリがついてゐる。肩には角笛をかけ、腰には匕首を仰々

しくぶら下げてゐる。瘦せさらばへた段鼻の栗毛馬が、氣でも狂つたやうに、主人を乗せたまゝよろめいてゐるし、足の曲がつた二匹のボルゾイ種の瘦せ犬が、その馬の足許をちよ／＼駈け廻つてゐる。見知らぬ男の顔、眼つき、聲、一つ一つの動作——凡てその全體から、滅茶々々の無鐵砲さと、又と類のない方圖の知れぬ傲慢さとを發散させてゐた。薄青いビイ玉めいた眼は、酔ひどれのやうにきよ／＼と動いて、横目に人を見る癖がある。首をぐいと後ろに反らし、頬つべたを膨まし、鼻息の音荒く、りん／＼張り切つた威嚴を示すかのやうに、全身を慄はしてゐるところは、縦から見ても横から見ても七面鳥そつくりであつた。彼は又も同じ問ひを繰り返した。

「こゝで鐵砲を撃つのが法度だとは知らなかつたものですから。」と私は答へた。

「こゝは、あんた、」と彼は言葉を續けた。「私の地所なんですぞ。」

「それは／＼、では早速ひき上げませう。」

「ちよ、ちよつとお訊ねしますが、」と彼は遮つた。「失禮ながら、あなたはもしや貴族の方ぢやありませんか？」

私は名乗りを上げた。

「あゝ、さういふわけなら、どうぞ獵をなすつて下さい。かういふ私もやはり貴族なんです、貴族の御役に立つのは欣快の至りです……ところで、私の名は、パンテレイ・チュルトブハーノフです。」

彼は身を屈めて、一聲こわ高に叫ぶと馬の頸筋に鞭をくれた。馬は頭を振り、後脚で立つたと思ふと、脇の方へ飛び退いて、その拍子に一匹の犬の足を踏みつけた。犬はけた／＼ましい悲鳴を上げた。チュルトブハーノフは躍起となつて口から泡をとばしながら、耳の間を狙つて馬の頭を

拳固でなぐりつけ、稲妻よりも早く地べたへ飛び下り、犬の足を検めてみて、傷口に唾を吐きかけ、うるさく鳴かないやうに犬の横腹を一つ蹴つた後、額髪に手をかけて鐙に片足を乗せた。馬は鼻面を高くあげて、尻尾を立て、そのまゝ横つとびに藪のなかへ入つた。彼は片足で跳ねながら馬について行つて、どうやらやつとの事で鞍に身を乗せた。そして夢中になつたやうに鞭を振り廻し、角笛を吹き立てて駛り去つた。チュルトブハーノフの思ひがけない出現に面くらつて、私がまだはつきり我に返る暇もない中に、不意に今度は何の物音も立てないで、小肥りに太つた四十恰好の男が、小さな黒馬に乗つて藪の中から現はれた。彼は馬を止めて、緑いろの革の帽子を脱ぎ、か細い柔かみのある聲で、栗毛の馬に騎つた人を見かけなかつたかと問ひかけた。私は見かけたと答へた。

「どの方角へ行かれましたらう？」と男は帽子を被らうともせず、同じ調子で言葉を續けた。

「あつちの方です。」

「大きに有難うございました。」

男は唇を鳴らして、馬の横腹に兩足をくつつけながら、跑でぼか／＼と教へられた方角へ走つて行つた。角のやうに隅の尖つた帽子が枝のかげに隠れるまで、私はその後ろ姿を見送つてゐた。この新らしく現はれた見知らぬ男は、前の人物とはまるで風采がちがつてゐた。顔は鞠のやうに圓々と膨れてゐて、遠慮深い、人の好い、慎ましやかに遜つた性質を現はしてゐた。同様に圓く膨れてゐて、青い血の筋の縦横に透いて見える鼻は、見るからに好き者らしい相を示してゐる。髪の毛は前の方には一本もなく、後ろの方に亞麻色の毛が幾つかの束になつて疎におつ立つてゐる。まるで薄の葉で切つたやうな細い眼は愛嬌たつぷりに瞬きをして、如何にも汁氣の多き

うな赤い唇は甘つたるい微笑を浮かべてゐる。着てゐる眞鍮釦に立ち襟のフロックは、大分くたびれたものではあつたけれど、小ぎつぱりとしてゐた。羅紗のスポンは上の方にずり上がつて、長靴の黄色い縁飾りの上から脂ぎつた腓かぐらばきが覗いてゐる。

「あれは誰だね？」とエルモライに訊ねた。

「あれですかね？ ネドビュースキンでさ、チーホン・イワーヌイチなんで、チュルトプハーノフの家に暮らして居りますよ。」

「どういふ人なんだい、貧乏なのかね？」

「金持ちぢやござえません。といつたところで、チュルトプハーノフだつて鏢一文持つてるわけぢやねえけれど。」

「ぢや、なんだつてそんな家へ住みこんだのだ？」

「それが、その、すつかり仲よしになつちまひましてね。どこへ行くにも必ず二人連れ立つてでなけりや承知しねえんで……全くあれこそお神酒徳利みきどくりでさ……」

私達は藪の外へ出た。すると不意にすぐ傍で、二匹の獵犬がけたましく吠え出した。と、大きな白兎が、もうかなり高くなつた燕麥の畑を走るのが見えた。その後を追つて藪の中からゴンチイやボルゾイなど、幾匹かの犬が飛び出した。犬の後から主人のチュルトプハーノフが駆け出して來た。彼は嘯鳴りもせず、嗾しかけもしないで、息を切らしてあぶく／＼してゐる。時々ちぎれちぎれな意味もない音が、大きく開いた口から洩れるばかりであつた。眼をむき出してまつしぐらに飛んで行きながら、尙も夢中になつて、可愛さうな馬を鞭でたゞき續ける。獵犬は『もう一と息といふところ』まで追ひついた……白兎はちよつと腰を落したと思ふと、くるりと後ろ向き

になり、エルモライの傍をかすめて、藪をさして跳んで行つた……獵犬はそのまま先きへ駆け抜けた。『かあ、け、ろ、かあ、け、ろ！』へと／＼になつた獵きちがひが、まるで吃りのやうに、やつとのことで舌を廻しながら云つた。『いゝ子だ、しつかりやつてくれ！』その時、エルモライが火蓋を切つて放した……手傷を負つた白兎は、滑らかな枯草の上を獨樂のやうに轉がり、宙に一つ跳り上がったと思ふと、忽ち駆けつけた犬の口に唾へられて、悲し氣な聲を立てた。獵犬の群れがどや／＼と押し寄せた。

チュルトプハーノフは宙返りトリカマシ鳩のやうに馬からとび下り、匕首を引つ摺むと、大股を擡げて犬どもの傍へ駆けつけ、もの物凄しい勢ひで嘯鳴りつけながら、身體ぢゆう裂き傷だらけになつた兎を引つたくり、顔をひん曲げて、兎の咽喉へ柄も通れと匕首を突き刻した……突き刺してから『ほうい、ほうい。』と叫んだ。するとチーホン・イワーヌイチが緊みの縁に現はれた。『ほうい、ほうい、ほうい、ほうい、ほうい、ほうい！』とチュルトプハーノフは喚いた。『ほうい、ほうい、ほうい、ほうい、ほうい！』と相手は落ちついた聲で繰り返した。

「しかし、本當のところを云ふと、夏は獵をするもんぢやないんですがね。」と私は踏みしだかれた燕麥を指さしながら、チュルトプハーノフに云つた。

「私の畑だから構はんです。」とチュルトプハーノフは、やつと息をつきながら答へた。

彼は兎の脚を切り取つて、胴體を鞍に結へつけ、切つた脚を犬どもに分けてやつた。「いまの弾丸はわしの借りにしておくからな、お前。」獵師の掟に従つて、彼はエルモライの方を向きながら挨拶した。「そして、あなたあ、」と相變らずちぎれ／＼な、ぶつきら棒な聲で云ひ添へた。

「あなたにはお禮を申します。」
彼は馬に跨がった。

「失禮ですが：…つい失念いたしましたして：…あなたのお名と苗字は？」
私はまた名前を云った。

「お近づきになつて、大變愉快です。もしお序でがありましたら、お訪ねを願ひます：…したが、チーホン・イワーヌイチ、あのフォームカの奴はどこへ行つたんだ。」と中つ腹で言葉を續けた。「あいつのゐない間に兎を獲つてしまつたぢやないか。」

「乗つてゐる馬が倒れたもんで。」とチーホン・イワーヌイチは、にこ／＼しながら答へた。

「え、倒れたつて？ オルバツサンが倒れたつて？ ちよつ、忌々しい！ あいつは何處にあるんだ、何處に？」

「あちらに、森の向かうに。」

チェルトプハーノフは馬の鼻面に一鞭くられて、まつしぐらに駆け出した。チーホン・イワーヌイチは私に二度までお辭儀をした。一度は自分ので、もう一度は友達の分なのである。そしてまた藪の中へ小走りに入つて行つた。

この二人の紳士はひどく私の好奇心を唆つた：…これほど肌合ひの違つた二人の人間を、斷ち難い友情の絆に結びつけたのは一體なんだらう？ 私はいろ／＼聞き合はしてみた。そして私が調べ上げたのは、次のやうな事であつた。

パンテレイ・エレメーイチ・チェルトプハーノフは、この近在一帯にかけて險呑な分ならずやで、またと類のない高慢な喧嘩買といふ評判をとつてゐた。ほんの僅かなあひだ軍隊でつとめて

ゐたが『面白からぬ事情』があつて、俗に『まだお玉杓子で蛙になり切らぬ』と云はれてゐる官等のまゝ、職を退いた。由緒を糺せば、嘗ては長者と云はれた古い家柄の生れで、先祖は曠野地方の習慣で派手に暮らしてゐた。つまり、招いた客であらうとなからうと來る人毎に歡待して、へと／＼になるまで御馳走攻めにし、客の伴をして來た馭者には飼料として燕麥を一斗づつも渡してやり、家には音楽師や、歌うたひや、道化や、犬をふんだんに抱へ、祝ひ日には村中の百姓に酒や麥酒を振舞ひ、冬になると自分の馬に頭丈な大型の馬車を牽かせてモスクワへ出かけた。が、時によると何箇月も一文なしで暮らして、自分の所で獲れるものだけで済ます事もあつた。パンテレイ・エレメーイチの父親が遺産を相續した時には、身代が大分左前になつてゐた。ところが、當人も負けず劣らず盛んに面白をかしく暮らしたので、臨終のとき一人息子のパンテレイに遺してやつたのは、もう抵當に入つてゐるベスソーノフといふ小さな村だけであつた。そこには男三十五人、女七十六人の百姓が地附きになつてゐた。その他コロブロードワの荒地にある役に立たない十四町歩の地所があつたけれど、この地所についてゐる農奴といふものは、故人の書類を調べてみても別になささうであつた。正直なところ、先代は寔に奇妙な遣り方で身上を潰した。それは『自分流儀の算盤』の取り方が反つて身の仇となつたのである。彼の考へによると、貴族は商人や町人、又はこれと似たり寄つたりの『強盗ども』(これは彼の云ひ草なので)に係り合ふべきでないといふ譯で、自分の地内にありとあらゆる仕事場や工場を設けたのである。『自分流儀の算盤の方が品もいゝし、安くもつく。』とよく云ひ／＼した。この破滅の種となるやうな考へ方を、彼は生涯の終りまで捨てなかつた。つまり、そのために微碌してしまつたのである。が、その代り面白い目も散々し盡くした！ どんな氣紛れでもやつて見ずには置かなかつ

た。さまざまな出来ごころを起した中にも、ある時、自分の好み通りに馬鹿げて大きな自家用の箱馬車を作らした事がある。餘り大き過ぎたので、村中の百姓馬を狩り集め、その持ち主にまで手傳はせて、力を集めて一生懸命に曳かしたが、結局、坂道にかゝるが早いか引つくり返つて、ばら／＼になつて了つた。エレメイ・ルキッチ（パンテレイの父親はエレメイ・ルキッチと云つた）は、この坂道に記念碑を立てさせたが、これしきの事には平氣なものであつた。彼はまた教會を建てようと思ひついた。もちろん獨力で、建築家の力を借りないのである。煉瓦を焼くのに森一つ薪にしてしまひ、縣の中央寺院にでも間に合ひさうなとてつもない土臺を据ゑ、壁をめぐらし、さて圓屋根を造りにかゝつた。ところが、圓屋根は落ちてしまつたので、又やり直すところ――又もや崩れ落ちた。彼は三たびやり直したが――圓屋根は三たび壊れた。いかなエレメイ・ルキッチもこれには考へ込んでしまつた。こいつは少々怪しいぞ……忌々しい魔の祟りがあるに相違ない、と考へて……だしぬけに村中の年取つた農婦を一人残らずぶん撲れと云ひつけた。そこで農婦どもはお仕置きを受けたが――それでも圓屋根はやはり出来上がらなかつた。それから新しい設計で百姓家の建て直しを始めたが、これも同じく自己流の算盤から出た事なのである。まづ三軒の家を三角形に組合せて、その真ん中に柱を立て、彩色した椋鳥の巣箱と旗をそれに取つて見た。どうかすると、毎日のやうに新しい計畫を考へ出す事があつた。牛蒡でスープを作つて見るかと思へば、馬の尻尾を切つて下男どもの帽子を拵へてみたり、蕁麻を亞麻の代用品にしようと思つたり、豚の餌に菌を使はうと考へついたりした……一度なんかは『莫斯科報知』で、ハリコフの地主フリヤーク・フルビョールスキイの寄稿した農民生活に於ける道徳の必要といふ論文を讀んで、早速その翌る日百姓一同に、このハリコフの地主の書いた論文を即刻語記す

るやうに布れ出した。百姓らは論文を語記した。そこで主人は、その中に書いてあることが分かるかと訊ねたものである。すると番頭は、これが分からないでどうしませう！と答へた。又それと同じ頃に、秩序を保つ必要と、自分流儀の算盤から割り出して、家來どもを一人残さず勘定した上、銘々の番號を襟に縫ひつけると命令した。御主人に出逢ふ度に、誰でも有りたけの聲を出して『何號であります！』と呶鳴ると、旦那は優しい聲で『よし行け。』といふ譯なので。

ところが、秩序を保ち、自分流儀の算盤がとれたにも拘らず、エレメイ・ルキッチはだん／＼二進も三進もゆかぬ破目になつた。まづ手始めとして持ち村を抵當に入れ出したが、やがて賣りに出すやうになつた。一番後に残つた先祖傳來の巢ともいふべき村は、立ち腐れの教會と一緒にもう個人でなく政府の手で競賣に附されたが、いゝ按配にエレメイ・ルキッチの存命中ではなく――彼もこの打撃には堪へ切れなかつたに相違ない――死んでから二週間たつた時のことである。彼は運よくも自分の家の自分の寢床で、家の子に取り巻かれながら、お抱へ醫者に看護られて死ぬことが出来た。けれど不運なパンテレイの手には、やつとベスソーノフ村が入つたばかりである。

パンテレイが父病氣と知つたのはもう軍務についてからで、前に述べた『面白からぬ出来事』の持ち上がつてある眞つ最中であつた。彼は漸くつて十九になつたばかりであつた。極く幼い時から自分の生まれた家を離れたことがなく、極めて人がいゝけれど薄のろの母親ワシリーサ・ワシリーエヴナの手で、我が儘なお坊ちゃんに育つて來た。彼の教育に携はつたのは母親だけで、エレメイ・ルキッチは一流の工夫に急がしくて、それどころではなかつたのである。尤も彼はある時、息子が P を『アルツイ』と發音したといふので、自ら手を下して折檻した事があるけ

れど、その日エレメイ・ルキッチは秘藏の犬が樹に頭をぶつゝけて死んだので、人知れず深い悲しみに沈んでゐたのである。とは云ふものの、ワシリーサ・ワシリーエヴナが愛兒パンチューシヤの教育のために拂つた苦心も、只やきもきと無駄骨を折つただけのことであつた。彼女は苦心慘憺して、ビルコッフ某といふアルサス生まれの退職軍人を家庭教師に雇つたが、死ぬまでこの男の思惑を憚つて、戦々兢兢としてゐた。「さあ、あの人が暇をくれと云つたらどうしよう。わたしはもうお仕舞ひだ！ 誰に逢はす顔があらう？ どこで代りの先生を見附けよう？ あれだけの人でも、やつとこきで近處の邸から引つこぬいたんだもの！」と考へてゐた。ビルコッフは目はしの利く男であつたので、忽ち自分の獨占的な位置を利用して、へゞれけになるまで酔ひつぶれ、朝から晩まで寢通してゐた。「學業の課程」を終へた後、パンテレイは軍務についた。ワシリーサ・ワシリーエヴナはもうこの世にゐなかつた。彼女はこの重大な出來事の起る半年前に、恐ろしさの餘りこの世を去つてしまつた。熊に乗つた白い人を夢に見たのである。エレメイ・ルキッチもやがて配偶の後を追つて行つた。

パンテレイは父の健康が勝れぬといふ報せを貰ふや否や、取るものも取り敢ず駈けつけたが、父親はもうこの世の人ではなかつた。けれど大身代の相續人と思ひきや、裸一貫の貧乏人になつたと知れた時、この孝行息子の驚きはどんなであつたらう！ 大抵の人なら、かういふ急激な變化に堪へ切れるものではない。パンテレイは急に粗暴なきびしい人間になつた。甘やかされてむきになりやすい性質ではあつたが、正直で、氣が大きくて、親切な男であつたのに、生まれ變つたやうに傲慢な怒りつばい人間になつて、近所交際もやめてしまつた——金持ちに對しては引け目を感じ、貧乏な連中は鼻の先きであしらつた。——そして誰に向かつても途方もなく横柄にふ

るまひ、土地の官憲に對してさへも遠慮しなかつた。「俺は由緒の深い貴族だぞ」といふ腹なのであつた。一度などは、村の警部が帽子を被つたまゝ彼の部屋へ入つて來たと云つて、危く拳銃で撃ち殺さなければかりであつた。無論、當局の方でもやはり甘い顔をしたくないで、機會ある毎に思ひ知らせるやうにしてゐた。とは云ふものの、幾らか彼を怖がつてもゐた。なにしろ恐ろしい疝癩持ちで、二言目には、すぐ決闘を申し込むからである。ちよつとでも自分の意見に反對されると、チェルトプハーノフの眼は怪しく動き出して、聲が途切れ途切れになる。「あゝ、わ、わ、わ、わ」と彼はせきこんで、「忌々しい、どうなとなれ……」と、今にも喰らひ附きさうになる！ その上になほ生一本な人間で、曖昧な事件には一切かゝり合つたことがない。もちろん、誰一人彼を訪ねて行く者はなかつた……けれど、さういふ事はいろ／＼あるにもせよ、彼は善良な心の持ち主で、自己流のものではあるけれど、偉大なところさへもつてゐた、不公平や壓制は他人事でも我慢できなかつた。自分の百姓のためには、それこそ金城鐵壁であつた。「なんだと？」と彼は自分の頭を猛烈な勢ひで叩きながら、云ふのである。「おれのうちのものに手を出すつもりか、おれのうちのものに？ そんな事をされたら、チェルトプハーノフの男が立たぬわい……」

チーホン・イワーヌイチ・ネドピュースキは、パンテレイ・エレメイチのやうに自分の門閥を自慢するわけにはゆかなかつた。父は郷土の出で四十年間も勤めたおかげで、やつと貴族の仲間入りが出来たのである。父のネドピュースキ氏は、まるで個人的な憎しみに追ひ廻されてでもゐるやうに、遠慮會釋なく不幸にとり憑かれてゐるといつたやうな人間であつた。生まれ落ちてから死ぬまで丸六十年の間、この氣の毒な男は、下つ端の人間に付きものありとあらゆる

貧苦、疾病、災難と闘ひ通した。氷の上に抛り出された魚のやうに跳きつゞけ、寢食を忘れてここへお辭儀をしたり、駈けずり廻つたりした揚句、悄氣かへつてくよ／＼しながら、一コペイカニコペイカの事にも心を悩まし、勤めの方は全くの『濡衣』で餓首になり、揚句の果ては、自分分は固より子供らのためにも、その日の糧に困らぬだけのものを蓄へる暇もなく、屋根裏か穴藏か、そんな所で死んでしまつた。運命はまるで狩り場の兎のやうに、へと／＼になるまで彼を追ひ立てたのである。彼は善良で正直な人間であつたが、賄賂はとつてゐた——しかし額は十コペイカから二ルーブリまでの間である。ネドピュースキンには瘦せた肺病やみの細君があつた。子供らもゐたが、好い按配にみんなばた／＼と死んでしまつて、たゞチーホンと娘のミトロドーラだけが残つた。この娘は綽名を『酒屋のお洒落さん』と云はれてゐたが、いろ／＼悲しくも可笑しい経緯があつた後に、廢業した辯護士の所へ嫁入りした。父のネドピュースキンはまだ存命中に、息子のチーホンを或る役所の臨時雇ひとしてうまく箠めこんでやつた。けれど、チーホンは父親が亡くなつてから間もなく辭職してしまつた。年中絶え間のない心配事や寒さと餓ゑを相手の惱ましい闘ひや、母親のしよんぼりと氣落ちした様子や、父親のあくせくとしては落膽する有様や、家主や店商人の不遠慮な居催促や、さういつたやうな毎日の絶え間のない辛勞辛苦が、チーホンを又と類のない臆病者にしてしまつた。上役の姿をちらと見たばかりで、捕まへられた小鳥のやうに慄へ戦いて、頭がぼつとなつてしまふ。で、彼は職を辭してしまつた。冷靜なやうではあるが嘲弄好きでもあるらしい自然は、當人の社會上の位置や資力には一切無頓着で、様々な能力や傾向を人に授けるものである。自然は持ち前の細心な愛情をもつて、腰辨の息子のチーホンを、物に感じ易い、懶惰な、氣の優しい、感受性の發達した人間に——たゞ享樂のみに適す

る、嗅覺と味覺の竝み外れて鋭い人間にでつち上げて……でつち上げて、入念に仕上げまでしながら、この作品が酸っぱい甘藍と腐りかけた魚を食べて大きくなつて行くのに、素知らぬ顔をしてゐた。さて、この作品は成長し切つて所謂『生活』を始めたのである。自然の醜弄が始まつた。父親のネドピュースキンを絶え間もなく苛めた運命は、又もや息子に手を伸ばした。どうやら味をしめたらしいのだ。しかし、チーホンに對する遣口は別であつた。運命は彼を苦しめようとしないうで、娯物にしたのである。運命は一度も彼を絶望といふところまで追ひやつた事はなく、不面目な飢ゑの苦痛を嘗めさせもしなかつたが、その代り露西亞全國をゼリーキイ・ウスチュークの端からツァリヨフ・コクシャイスクに到るまで引つ張り廻し、それからそれへと卑しい仕事や滑稽な役割りを勤めさせた。時には口喧ましい疝癩もちで慈善家の奥様の所へ『家事取締り』として住み込ませたり、時には金持ちで吝ん坊の商人の家に居候さしたり、それかと思へば、英國風に頭を刈り込んだ出目金の旦那の家で帳場主任の位置につかせたこともあれば、或ひは大好きな銃獵家のところで半ば家令、半ば道化役を勤めさせたこともある……一と口に云へば、運命は可哀さうなチーホンに下積み生活の苦い毒盃を、ちびり／＼と最後の一滴まで飲み乾させたのである。彼は一生の間に有閑貴族の惡どい氣まぐれや、寢呆け氣分の意地悪な退屈ざましのために、どれだけ辛いお勤めをしたか知れない……腹に足るだけ、彼を黓りものにした大勢の客に『もうよろしい』と云はれて、自分の部屋へ引き下がり、やつと獨りきりになると、恥づかしさに顔を眞つ赤にして、眼に冷たい絶望の涙を浮かべながら、明日こそはそつとこの家を逃げ出して、町で一か八かの運試しをしよう、たとひ筆生の位置なりとも見つけ出さう、それも駄目なら、いつそ一と思ひに往來で野垂れ死しよう、幾度心に誓つたか知れない。けれど第一に

は神様からそれだけの力を授かつてゐなかつたし、第二には臆病神に取り憑かれてゐたし、また第三にはどうしたらいい就職が見つかるか、誰に頼んだらいいか、分からなかつたのである。『とてもそんな口を廻してはくれまい。』と、不幸な男は寢床の中で輾轉反側しながら、かう呟くのであつた。『とても廻してはくれまい！』かうして次の日になると、また従順しくいやなお勤めを始める。その上に、よく氣のつく造化の神でさへも、御機嫌とりの商賣になくて叶はぬ才能や天稟を、ほんの罌粟粒ほども授けてやらなかつたので、彼の立場は尙のこと慘憺たるものであつた。例へば熊の毛皮外套を裏返しに着て、ぶつ倒れるまで踊ることも出来なければ、長い鞭がすぐ耳許でびし／＼鳴るのを聞きながら、輕口を叩いたり、お愛想を云つたりする術も知らなかつた。彼は時によると、氷點下二十度の寒さに素裸で突き出されて、風邪を引いた事もあつた。彼の胃の腑は、インキやその他の異物を混ぜた酒だの、細かく刻んで酔をかけた蠅取り茸や、濕氣茸などを消化するやうには出来てゐなかつた。もし彼の最後の恩人とも云ふべき成金の買ひ占め商人が、ふと上機嫌のとき遺言狀へ『ジョーヂャ』（即ちチーホン）・ネドピュースキンに拙者の正當に取得せるベスセレンヂェフカ村及び一切の附屬地を、子々孫々の末までも永久の所有として譲渡するものなり』と氣紛れに書き込まなかつたら、チーホンの身の上はどういふ事になつたか見當もつかない位である。それから二三日して、この恩人は蝶鮫のスープをたべてゐる中に卒中で死んでしまつた。忽ち大騒ぎになつて、裁判所から來た役人が然るべく財産に封印をした。親族が集まつて、遺言狀を開封して讀み上げた。それから、ネドピュースキンを招んで來いといふ事になり、ネドピュースキンが顔を出した。集まつた人々の大部分は、チーホン・イワイヌイチが恩人の傍でどんなお役目を勤めてゐたか知つてゐたので、彼が現れると共に耳を聳せんばか

りの叫び聲と、冷かし半分の祝辭が浴びせかけられた。『地主様だ、ほら、あれが新しい地主様だ！』と他の相續人達が叫んだ。『これこそ、なんだ、』と剽輕者で皮肉屋として知られてゐる一人の男が、すかさず云つた。『これこそ、全く、云つてみれば……これこそ本當に……その……所謂……その……押しも押されぬ相續人だ。』すると、一同はぶつと噴き出してしまつた。ネドピュースキンは何時までもこの幸福を信じようと思つなかつた。遺言狀を見せられると、彼は眞つ赤になつて眼を瞑り、兩手を振り廻し始めたと思ふと、まるで堰でも切れたやうに泣き出した。一座の笑ひ聲は鼎の湧くやうな騒ぎに變つてしまつた。ベスセレンヂェフカの村には、みんなで二十一人の農奴しか附いてゐなかつたので、誰もそんなにひどく惜しがる者はなかつた。してみれば、どうしてこの機會を利用して、一と娛みなくさまずにはゐられよう？ 唯一人ペテルブルグから來た相續人で、希臘風の鼻とこの上もなく上品な顔付をしたロスチスラフ・アダムイチ・シュトツペリといふ豪さうな男が我慢し切れないで、横歩きにネドピュースキンの傍へ行き、さも横柄らしく肩越しに彼を見下ろした。『不躰ながら、あんたはお見受したところ、』と見下げたやうな調子で無造作に云ひ出した。『あんたは故人フォードル・フォードルイチの所で、云はば御機嫌とりのために奉公してゐられたやうですな？』ペテルブルグから來た紳士は、やり切れない程つきりした齒切れのいゝ凡帳面な言葉遣ひをした。興奮して夢中になつたネドピュースキンは、見知らぬ紳士の言葉がよく聞き分けられなかつたが、他の連中は一時に鳴りを潜めてしまつた。例の皮肉やお情けにやりと笑つた。シュトツペリ氏は揉手をしながら、同じ問ひを繰り返した。ネドピュースキンは吃驚りして眼をあけ、ぼかんと口を開いた。ロスチスラフ・アダムイチは毒のある表情で眼を細めた。

「おめでたう、あんた、おめでたう。」と彼はつぶけた。「もつとも、皆が皆、その、こんなお勤めをしてその日その日の糧を、か・せ・ぎ出さうと思ふ譯でもないがね。然し *De gustibus non est disputandum* つまり、誰でもそれ／＼の趣味をもつてゐるから……さうぢやありませんか？」

誰か後ろの列に坐つてゐた者が、吃驚りしたのと嬉しまぎれなもので、早口にぶしつけな感嘆の聲を上げた。

「一つ伺ひますが、」一座の微笑に「そう調子づいたシュトッペリ氏が、隙さず口を入れた。「一體どういふ特別な腕があつてこんな幸運を拾ひ上げたんですか？ いや、恥づかしがる事はない、云つて御覽なさい。こゝにゐる者はみんな、云はゞ内輪の者 *en famille* だからね、なんと皆さん、さうぢやありませんか、こゝにゐる者は *en famille* でせう？」

ロスチスラフ・アダムイチが偶然にこの質問を向けた相續人は、生憎と佛蘭西語を知らなかつたので、たゞ賛成の意を表するやうな軽い咳拂ひで誤魔化した。その代り、もう一人の相續人で額に黄色い斑點のある青年が急いで『ウイ、ウイ、(えい)無論ですとも。』と相槌を打つた。

「恐らく」とシュトッペリ氏は又云ひ出した。「あんたは逆立ちをして歩けるでせうな、足をその上へ上げて？」

ネドビュースキンはさも辛さうに四邊を見廻した。どの顔もどの顔も意地の悪い微笑を浮かべ、眼は笑ひ泣きの涙に潤んでゐた。

「それとも、雄鶏の鳴き眞似がお出来ですか？」

崩れるやうな笑ひ聲が一座に擴がつたが、すぐにひっそりして、次はどうなるかと待ち構へ

た。

「それとも、鼻の上に……」

「やめろ！」と出し抜けに鋭い銅羅聲がロスチスラフ・アダムイチを遮つた。「弱い者いぢめをしてよく恥づかしくない事だ！」

一同は振り返つた。戸口の所にチュルトプハーノフが立つてゐた。亡くなつた買ひ占め商人の四等親の甥にあたるところから、彼もこの親族會議に招待を受けたのだが、遺言狀を讀んでゐる間は何時もの癖でお高くとまつて、一座の中に交じらなかつたのである。

「やめろ！」傲然と頭を反らして、彼はまた繰り返した。

シュトッペリ氏は素早く振り返つて見ると、見すばらしい身なりをした風采の上がらない男だつたので、小聲で隣りの人に訊ねてみた。(大事をとるといふ事は、どんな時でも、悪くないものである)。

「あれは誰ですね？」

「チュルトプハーノフと云つて、大した代物ぢやありません。」と、相手は彼に耳打ちした。

ロスチスラフ・アダムイチは横風に構へた。

「一體あなたは誰です、そんな指圖がましい口をきいて？」と、彼は鼻にかゝつた聲で云つて、眼を細めた。「一體あんたはどういふ代物なのか、一つ訊かして貰ひませう。」

チュルトプハーノフは、火薬に火の粉が落ちたやうに忽ちかつとなつた。憤怒のあまり息が切れて物が云へなかつた。

「ず、ず、ず、ず、」とまるで首でも締められたやうに異様な聲を出したが、とたんに雷霆のご

とき叫びを上げた。「俺が誰かつて？ この俺が？ 俺はパンテレイ・チュルトプハーノフだ。先祖代々の貴族だ。先々代は皇帝陛下にお仕へしたくらみだぞ。さういふ貴様こそ何者だ？」

ロスチスラフ・アダムイチは眞つ蒼になつて、たち／＼と後ろに退いた。これほど手強く撥ね返して来ようとは思ひもかけなかつたのである。

「俺のことを代物だつて、俺のことを、俺のことを代物だつて……おゝ、おゝ、おゝ……」

チュルトプハーノフは恐ろしい勢いで前へ飛び出した。シュトツペリはすつかりまごつて、跳びのいた。客はみんながかりで疝癪持ちの地主を宥めに行つた。

「決闘だ、決闘だ、今すぐ、ハンカチを使つてやる、あの決闘だ！ (一枚のハンカチの下に二人の拳銃を所持し違へ) 」と、パンテレイは猛り狂つて喚き立てた。「それが厭なら俺に謝罪れ、それから、あれにも……」

「あやまりなさい、あやまりなさい。」と、シュトツペリの周りに集まつた相續人たちは、はらはらしながら囁いた。「何しろあれは氣狂ひのやうな男だから——人殺しさへしかねませんよ。」

「御免なさい。御免なさい、つい知らなかつたものですから。」と、シュトツペリはしどろもどろに云つた。「つい知らなかつたので。」

「あれにも謝罪れ！」と腹の蟲の納まりきららないパンテレイは呶鳴つた。

「あなたもどうかお赦しを。」とロスチスラフ・アダムイチは、瘡にでもかゝつたやうに慄へてゐるネドビュースキンの方へ向いて、云ひ添へた。

チュルトプハーノフは漸く落ちついて、チーホン・イワーヌイチの傍へ寄り、その手をとつて不敵な眼付きで四邊を見廻したが、誰一人として彼を正面に見る者がなかつたので、正當な手段

で手に入れたベスセレンチェフカ村の新らしい地主と相携へて、深い沈黙の中を勝ち誇つたやうに部屋の外へ出た。

その日からといふもの、二人はもう片時も離れなかつた(ベスセレンチェフカ村はベスソノフから僅か八露里しか離れてゐなかつた)。ネドビュースキンの限りない感謝の念は、間もなく盲目的な敬虔の情に變つた。氣が弱くて柔和な性質だが、餘り純潔とは云へないチーホンは、怖い物なしの無慾恬淡なパンテレイの前に三拜九拜してゐた。「大したものだ」と彼は時をり心中で考へた。「知事様と話をしておまけにその顔をまともに見るなんて……ほんとに豪いこつた……まともに見るんだからな！」

彼は不思議な位、頭がぼつとする位、パンテレイに感心しきつて、彼を非凡な賢い學者だと思ひ込んでゐた。それもその筈で、假令チュルトプハーノフの教育が、どんなにお粗末なものであつたにせよ、それでもチーホンの教育に較べたら、燦然と輝いてゐるやうに思はれた。チュルトプハーノフは實際、露西亞語で書いたものを餘り讀まなかつたし、佛蘭西語の知識も怪しげなものであつた。その怪しげさ加減といつたら、或るとき瑞西人の家庭教師に『Vous parlez français, monsieur? (あなたは佛蘭西語をお話になりますか)』と訊かれた時「私、わかりません。」と答へて、暫く考へた後『駄目』と云ひ足したやうな始末である。が、それにしても、彼は機智縦横の作者ヴォルテールがこの世にゐるといふ事も知つてゐれば、普魯西のフリードリッヒ大王が軍事の方面で頭角を現はした事も覚えてゐた。露西亞の文學者ではチュルジャーキン(偽古典派の代表的詩人、一七四三—一八一六年)を崇拜し、またマルリンスキイ(有名通俗小説の作者「アマ」を愛して、秘藏の牡犬にアマラート・ベークといふ名をつけた位である)。

この二人の仲間に初めて出逢つてから、四五日経つて、私はベスソーノ村のパンテレイ・エレメイイチを訪ねて行つた。彼の小さな家は遠くの方から見えてゐた。それは村から半露里ばかり離れた、樹も何も生えてゐない所謂『吹き晒し』の場所に、丁度畑に下りた兀鷹のやうな恰好で建つてゐた。チェルトプハーノフの邸といふのは、離れと既と納屋と湯殿と、大小様々な古ぼけた小舎が四棟あるだけ、それがめい／＼自分勝手に離ればなれに建つてゐて、塀も廻らしてなれば門らしいものも見當たらなかつた。私の馭者は怪訝さうな様子で、半ば腐つて塵に埋もれた井戸の傍に馬を停めた。納屋の脇では、瘦せたむく毛のボルゾイ種の仔犬が何匹か、死んだ馬を食ひ裂いてゐる。恐らくオルバツサンの死骸であらう。その中の一匹が血まみれの鼻面をあげて、氣忙しさうな吠え聲を立てたが、すぐに又あらはになつた肋骨に嚙りついた。馬の傍らには年ごろ十七ばかりのむくんで黄色い顔をした男の子が立つてゐた。コサツク風の服装をして裸足である。少年は預けられた犬を、勿體らしい様子で見守りながら、時々、餘り食ひ意地の張つたのに、鞭をくらはしてゐた。

「旦那様は家かね？」と私は訊ねた。

「どうだか知らない！」と少年は答へた。「戸を叩いてごらん。」

私は馬車から飛び下りて、離れの玄關口へ行つた。

チェルトプハーノフ氏の住家はいとも惨めな有様であつた。丸太は黝ずんで『腹』を外側へ突き出してゐるし、煙突は崩れ、家の隅々は濕つて、腐り氣味になり、少々ばかり歪んでゐる。どんよりと青みがかつた灰色の小窓が、もしや／＼した藁屋根の垂れ下がつた庇のかけから、なんとも云へない鑿めつ面をして覗いてゐる。年とつたあばずれ女などが、よくこんな顔付をしてゐるものだ。私は戸を敲いた。誰もそれに應へる者が不在。けれど戸の向かうで、鋭い調子で云つてゐる妙な言葉が聞こえた。「ア、B、V、露西亞アルファベ、え、こいつ、馬鹿め、」と暖れた聲で云つてゐる。「ア、B、V、G……それぢや駄目だ！ G、D、E！ E！……ちよつ、こいつ、馬鹿め！」

私はもう一度戸を敲いた。

すると同じ聲が、「おはひり——誰だね……」と叫んだ。

私はがらんとした小さな控室へ入つた。すると、開け放した扉の向かうに主人のチェルトプハーノフの姿が見えた。脂じみたブハラ織の部屋着を着て、廣いだぶ／＼のズボンを着き、赤い椀形の帽子を被つて椅子に腰をかけたまゝ、左手で若い老犬の鼻面を締めつけ、右手には一と切れの麵麩を持つて、犬の鼻の眞上にさし出してゐる。

「あゝ！」席を起たうともせずに、威嚴を帯びた調子で云つた。「ようこそお訊ね下すつた。まあどうぞおかけ下さい。いま私はこの通り、エンゾールに藝を仕込んで居りますので……チーホン・イワーヌイチ、」と彼は聲を高めて云ひたした。「こつちへ来てくれんか。お客様のお越しだ。」

「只今、只今」と、隣りの部屋からチーホン・イワーヌイチが答へた。「マーシヤ、ネクタイを出しておくれ。」

チェルトプハーノフは又エンゾールの方に向かつて、麵麩の切れを鼻の上に載せた。私はあたりを見廻した。部屋の中には長短まち／＼の脚が十三本ついた、伸縮自在な反つくり返つた卓と、毀れかゝつた四つの籐椅子のほか、家具類といつては一つもなかつた。ずつと前に白く上塗

りしたばかりで、今は星模様みたいな青い斑點しみの一面についた壁は、大分あちこち剝げ落ちてゐる。窓と窓の間には、マホガニーまがひの大きな縁に箆められた、ひゞだらけの、どんよりした鏡がかゝつてゐる。部屋の隅々には長いパイプや鐵砲が立てかけてある。天井からは太い眞つ黒な蜘蛛の絲がたれてゐる。

「A、B、V、G、D」とチェルトプハーノフはゆつくり云つたが、出し抜けに物凄いな聲で呶鳴りつけた。「Eだ！ E！ Eだ！……なんて馬鹿の畜生だ…… Eだといふのに！」

けれど、不運な老犬はたゞぶる／＼慄へるばかりで口を開けようとしなかつた。悄然と尻尾を捲きこんで、相變らずちつと坐つたまゝ鼻面を歪めて、げつそりしたやうに、眼をぱち／＼させたり、細く閉ぢたりしてゐたが、その様子は「どうも仕方がございません。御存分になすつて！」と獨り言でも云つてゐるやうな按配であつた。

「さあ、食べろ、そら！ 取れ！」と、私の強い地主は繰り返した。

「あなたが嚇しつけておしまひなすつたからなんですよ。」と、私が口を入れた。

「ぢや、こんなもの逐ひ出してしまへ！」

彼は犬を軽く足で蹴つた。不運な犬はそつと起き上がつて、麵麩きれを鼻から振り落とし、如何にも無念さうな様子で、爪立ちでもして歩くやうに、玄關の方へ行つてしまつた。それも無理からぬ事で、知らない人が初めて訪ねて來たのに、こんな取り扱ひをされるとは。

次の間へ通ずる戸が用心深さうにぎいと軋んだと思ふと、ネドピュースキン氏が愛想よく小腰をかゞめ、にこ／＼しながら入つて來た。

私は立ち上がつて、會釋をした。

「どうぞお立ちにならないで、どうぞその儘に。」と、彼は覺束ない調子で云つた。

私たちは腰を下ろした。チェルトプハーノフは次の間へ出て行つた。

「あなたは大分前からこの里へお越しになりましたので？」と、ネドピュースキンは嗜みよく手を口にあてながら咳拂ひをして、お體裁に指を唇に附けたまゝ、柔かみのある聲で云ひ出した。

「もう足掛け二箇月になります。」

「はゝあ、なるほど。」

私たちは暫く無言でゐた。

「こゝのところ、よいお天氣が續きました。」と、ネドピュースキンは言葉を續け、まるで天氣がいゝのは私のお蔭だとも云ふやうに、有難さうに私を眺めた。「穀類は、なんと申しますか、素晴らしい出来で。」

私は同意のしるしに軽く頭を下げた。また暫く沈黙が續く。

「パントレイ・エレメーイチは、昨日兎を二匹お仕とめになりました。」如何にも話を引き立たせようと思ふらしく、ネドピュースキンは幾らか骨の折れる様子で口を切つた。「さやう、とても大きな兎でございましたよ。」

「チェルトプハーノフさんは、いゝ犬を持つて居られますか？」

「それをそ大したものでございます！」と、ネドピュースキンは我が意を得たり、といふやうに答へた。「まづ縣内でも指折りせうな（彼は私の方へ身體を摺り寄せた）。それもその筈！ パントレイ・エレメーイチは、さういふお方でございますからね！ なんでも欲しいと思ひになつたら、つまり、なんでもかうとお考へになつたら、みる／＼中にもうちやんと出来上がつて、

凡てがずんずん抄かが行くんでございますよ。パンテレイ・エメレーイチは、遠慮なしに申しますと……」

チェルトプハーノフが部屋へ入つて来た。ネドピュースキンはつと笑つて口を嚙み、『いまに御自分でなるほどとお思ひになりますよ。』とでも云ひたげに、眼で彼の方を指さして見せた。私たちは獵の話始めた。

「なんなら、うちの犬をお目につけてませうか？」と、チェルトプハーノフは私に問ひかけて、返事も待たずにカルプを呼んだ。

水色の襟と紋章入りの釦のついた、青い南京木綿の長上衣カフタンを着た頑丈な若い衆が入つて来た。

「フォームカにさう云つて、」と、チェルトプハーノフはぶつ切ら棒な調子で云つた。「アムマラートとサイガを連れて来させる。だが、ちやんとしておかなくちやいかんぞ、いゝか？」

カルプは口を一杯に開けて、にたりと笑ひ、何ともつかない聲を出したまゝ出て行つた。髪を綺麗に撫でつけて、きちんと引き締まつた身なりをした、長靴姿のフォームカが犬を連れて来た。私は作法を守つて、この馬鹿げた犬どもに見惚れる振りをした（ボルゾイ種は凡て恐ろしく間抜けなのである）。

チェルトプハーノフはアムマラートの鼻の孔を目かけて唾をかけてやつたが、それは犬にとつて一向嬉しくもなささうであつた。ネドピュースキンもアムマラートの尻の方を撫でてやつた。私達はまた雑談を始めた。チェルトプハーノフはだん／＼心がとけて来て、終ひには力んだり鼻を鳴らしたりしないやうになつた。顔の表情もすっかり一變した。彼は私とネドピュースキンの顔色を窺つたが……

「えゝ、構ふもんか！」と、出し抜けに叫んだ。「何も彼女を獨りぼつちにしておく事はいらん。マーシャ！ おい、マーシャ！ こつちへ来んか！」

誰やら隣りの部屋でかさこそ動いたが、返事はなかつた。

「マーアシャ、」と、チェルトプハーノフは優しい聲でくり返した。「こつちへお出で、大丈夫、びく／＼せんでもいゝよ。」

扉が静かに開いた。と、私の眼には背の高い、すらりとした、ヂプシイ風の淺黒い顔をして、

黄味を帯びた鳶色の眼に、タールのやうにまつ黒な髪をした、二十歳ばかりの女の姿が映つた。

大きな白い齒が厚ぼつたい眞つ赤な唇のかけに輝いてゐる。身に纏つてゐるのは眞つ白な着物で、襟もとを金のピンで留めた水色のショールが、生粹のヂプシイらしい、細つそりした手を半ばかくしてゐる。彼女は野育ちの女らしい、おづ／＼したぼつの悪さうな様子で、二足ばかり踏み出したと思ふと、立ち止まつてさし俯向いた。

「さあ、御紹介ませう、」と、パンテレイ・エレメーイチが口を切つた。「これは正式の女房といふわけではないが、まあ／＼女房みたいなものだ。」

マーシャはぼつと顔を赧らめて當惑したやうに微笑んだ。私は普通よりも丁寧に頭を下げた。女はすつかり私の氣に入つて了つた。小鼻がからりとして半ば透き通るやうに見える細い尖つた鼻、秀でた眉のきり／＼とした線、蒼白い、ほんの心持ちこけた頬——すべて彼女の顔の輪郭は、奔放な情熱と、物事に拘はらぬ大膽さを示してゐる。三つ編みにして束ねた髪の下から、廣い頸筋に見事な生え下がりが二すぢ並んでゐた。——種族の血と力の徴である。

彼女は窓ぎはへ行つて腰を下ろした。私はこのうへ彼女を當惑させたくなかつたのでチェルト

プハーノフと話を始めた。マーシャはそつと首を捻ぢ向けて、上目づかひに偷むやうに、野獸のやうな素早さで私を見はじめた。その眸が蛇の舌のやうにちら／＼する。ネドピュースキンはその傍に腰を下ろして、何やら耳打ちした。彼女は又につこりとほゝ笑んだ。微笑みながら、軽く鼻に皺をよせて上唇を持ち上げたが、そのために、猫ともつかなければ、獅子ともつかない表情が添ふのであつた。

『あゝ、これまさに鳳仙花の實だ。』と、こちらも同じやうに、彼女のしなやかな姿や、瘦せた胸や、ぎくしやくした素ばしつこい身振りを偷み見ながら、私はかう思つた。

『どうだね、マーシャ、』と、チュルトプハーノフは問ひかけた。「何か、お客様におもてなしをしなくちやなるまい。おい？」

『うちにジャムがありますわ。』と彼女は答へた。

『そんならジャムを出しなさい。それから序でに火酒ワットカもな。あゝ、さうだ、マーシャ、』と、後から追つかけるやうに聲をかけた。「ギタアも持つて来るんだ。』

『ギタアなんかどうして？ わたし、歌なんかうたはないから。』

『なぜ！』

『氣が向かないんですもの。』

『ちよつ、つまらん事を、その氣になるさ、もしも……』

『なんですつて？』とマーシャは急に眉をひそめて問ひ返した。

『もし御所望があつたら。』と、チュルトプハーノフは幾らかてれ氣味で云ひ足した。

『あゝ、さう！』

彼女は出て行つたが、間もなくジャムとワットカを持つて引つ返した。そして又もや窓ぎはに腰を下ろした。その額にはまだ一筋の小さな皺が見え、双の眉は黄蜂の髭のやうに上がつたり下がつたりしてゐる……讀者諸君、黄蜂がどんな意地の悪い顔をしてゐるか、お目に止められた事がありますか？ 『いや、これは一と荒れあるわい』と私は考へた。話はうまく油が乗らなかつた。ネドピュースキンはすつかり鳴りを潜めて、窮屈さうにや／＼笑つてゐた。チュルトプハーノフは息をはずませ眞つ赤な顔をして眼をむき出してゐる。私はもう暇を告げようと思つた！ ……すると、不意にマーシャが立ち上がつて、いきなりさつと窓をあげ、頭を外に突き出して、通りかゝつた百姓女をさも腹立たしげに、『アクシーニヤ！』と呼びかけた。百姓女はぎくつとして振り向かうとした途端に、思はず足が滑つて、どうとばかり地びたに倒れた。マーシャは反りかへつて、聲高らかにから／＼と笑ひ出した。チュルトプハーノフもそれにつれて笑ひ出した。ネドピュースキンは夢中になつて嬉しさうに金切り聲を立てた。私たちはみんな身慄ひした。まさに電光一閃、夕立ちが襲つて來た形だ……鬱してゐた空氣が爽かになる。

三十分ばかり経つた時には、私たちはまるで別人の觀があつた。みんな子供のやうに喋つたり、巫山戯たりしてゐた。マーシャは誰よりも一番はしやいだ、チュルトプハーノフはまるで喰ひつきたさうな眼つきで、女から眸を離さない。彼女の顔は蒼ざめて、鼻の孔は擴がり、眸は同時に燃え立つたり暗くなつたりする。野育ちの女がすつかり本性を現はしたのだ。ネドピュースキンは雄鴨が雌鴨を追ひ廻すやうに、太い短い足で、よち／＼とその後から跛びつてをひいて歩く。エンゾールまでが玄關に取りつけた臺の下から這ひ出し、闕の上に立つて暫く私達を眺めてゐたが、不意に跳ね上がりながら吠え出した。マーシャは次の間へ小鳥のやうに飛び出したと思ふ